

## 第3章 調査の記録

### 第1節 調査地点と層序

#### 1. 調査地点の位置

本調査地点は岡山大学鹿田地区の南側中央部、現在の岡山大学病院の病棟南西側に位置する（図6）。鹿田遺跡の構内座標ではCN29区～CW45区にあたる。本調査地点の周辺では、北～北東側には東西約130mの範囲にわたって第9・11・14次調査地点が連なっている。特に第9・11次調査地点南辺と本調査地点B・C地点とは、約70mにわたって境を接している。また、南東約50mには第3・4・10次調査地点が位置している。

第9・11・14次調査地点では、弥生時代後期～古墳時代初頭の水田関連遺構の検出により、臨海集落における生産と土地利用に関する成果、中世村落構造の変遷に関するこれまでの調査研究を補完する成果が得られている。第3・4・10次調査地点では、古代の河道および河道内に設けられた橋脚や杭群などの施設が検出されたほか、本調査地点と同様、掘立柱建物、柱穴列、井戸、土坑、溝で構成される中世前半の居住域も確認されている。

#### 2. 層序

本調査地点では大小4か所の調査区で土層を観察・記録した。一部では攪乱により十分な土層観察と記録ができなかったが、全体的にはほぼ連続して断面観察・記録ができており、可能な限り断面図を提示する。ただしC地点については、東西にほぼ水平堆積する土層が連続しているため、東端1か所の柱状図を示す（図7～10）。

<1層>（近現代）：1922（大正11）年に始まった岡山医科大学建設に伴う造成と、以後、現在に至るまでの造成

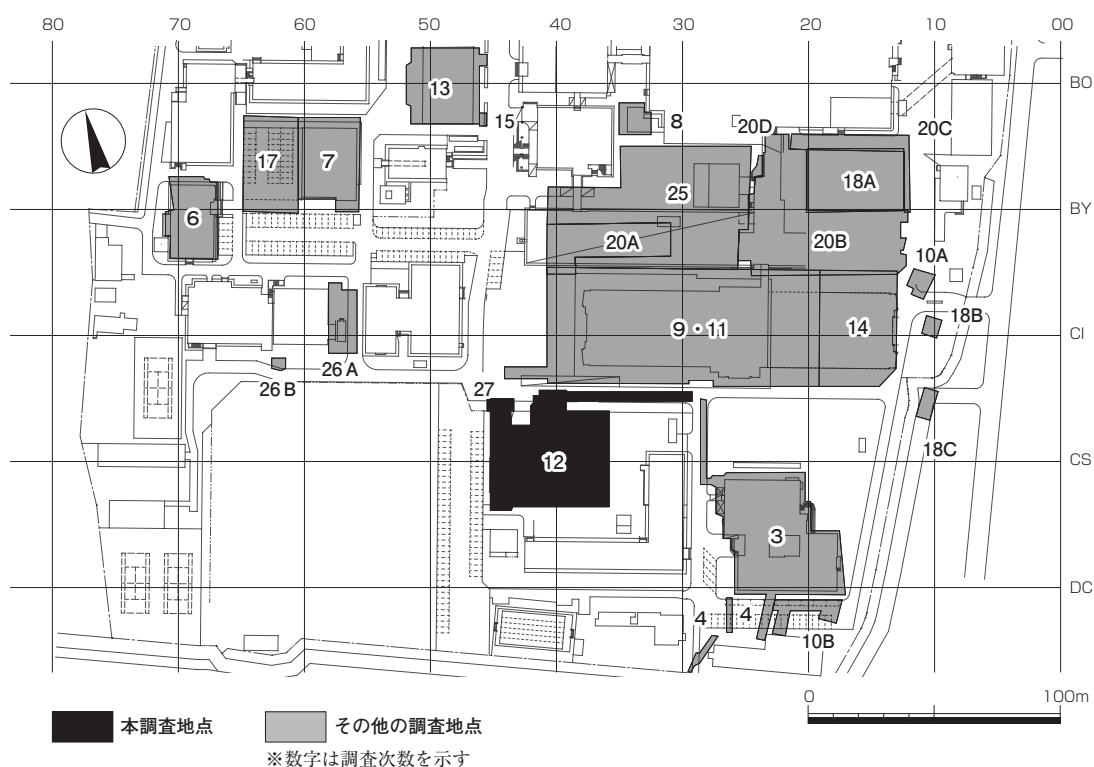


図6 調査地点位置図（縮尺1/3,000）

による土層である。現地表面の標高は約2.1～2.3m、層厚は約0.9～1.0mである。

＜2層＞（近代）：灰色粘質土である。調査区の全域に広がる。地点によって明暗が観察されており、北側の方が暗い色調を呈している。鉄分の沈着がみられ、径0.5cm程度の小礫や土器・陶磁器小片を包含する。上面のレベルは1.14～1.43mで、層厚は0.1m前後である。既往の調査成果から、明治～大正にかけての耕作土とみられる。

＜3層＞（近世）：明褐色粘質土である。一部ではグライ化により、緑色の強い色調に変化している。調査区東半から西半北側にかけて広がるが、分布の中心は東半の低位部にある。鉄分の沈着はみられるものの弱い。上面のレベルは1.09～1.4m、層厚は約0.05～0.2mである。地形の低い調査区東半部で厚さを増す。近世の耕作土とみられる。上面で近世陶磁器等を含む土坑群が検出されている。遺物出土量はコンテナ3.5箱（28ℓ／箱、以下同量）で、近世陶磁器小片が主体をなす。

＜4層＞（中世前半）：緑灰色粘質土である。二層に細分される。中世前半に属する遺構群を検出した。遺構との関係から、本層は少なくとも11世紀後半までには形成されていると考えられる。出土遺物のなかには、本来本層に帰属するものの、発掘作業の過程で下位の＜5層＞で検出された遺構に包含されていたものも含まれる。

＜4 a 層＞（中世前半）：緑灰色粘質土で、場所により色調に濃淡がある。調査区全体に広がる。鉄分の沈着は認められるものの弱い。マンガンの凝集が顕著にみられる。炭を多く包含する。上面のレベルは0.94～1.3mである。層厚は0.04～0.3mである。下層地形の高いA地点西辺や南辺西半では薄く、北半部、とりわけ北東部で厚い。上面で中世前半に属するピット群、井戸、溝を検出した。出土遺物量はコンテナ4.5箱である。

＜4 b 層＞（中世前半）：緑灰色～明緑褐色粘質土である。鉄分の沈着がみられ、マンガンの凝集が顕著である。炭化物の包含は少ない。下層地形の高いA地点西辺や南辺西半にかけては確認されない。上面のレベルは0.77～1.22mである。層厚は0.03～0.2mと差が大きい。A地点西辺や南辺の近くでは薄く、北半で厚い傾向がある。中世前半のピット群、溝を検出している。出土遺物量はコンテナ2箱である。

＜5層＞（古墳時代初頭）：褐色粘質土で、調査区全体に広がる土層である。場所によって明暗、グライ化の影響による緑色化が認められる。鉄分の沈着はみられるが弱く、マンガンの凝集が顕著である。上面のレベルは0.63～1.24m、層厚は0.1～0.3mである。上面で古墳時代初頭、飛鳥時代、中世前半の遺構を検出したが、本層形成の下限を示すのは古墳時代初頭の土器だまりである。また、本来は＜5層＞上には古代の土層が形成されていたと想定されるが、＜4層＞形成時に失われたと考えられる。中世前半のピット群、土坑、溝は本来＜4層＞に帰属する。出土遺物量はコンテナ4箱で、古墳時代初頭の土師器が出土している。

＜6層＞（古墳時代初頭）：明黄褐色粘質土である。上位の＜5層＞、下位の＜7層＞も褐色系の粘質土であるが、両層よりも明るく、黄色の強い色調を呈することを特徴とする。鉄分の沈着、マンガンの凝集が顕著である。上面のレベルは0.51～0.68m、層厚は0.05～0.1mである。A地点北東からC地点にかけての北東部を中心とした河道埋没後の低位部に広がる。上面で古墳時代初頭の高まり、土坑、溝群を検出した。遺物はほとんど出土していない。上下の土層との関係から、古墳時代初頭の土層と位置づけられる。

＜7層＞（弥生時代後期後葉～古墳時代初頭）：暗褐色粘質土である。鉄分の沈着が顕著で、マンガンの凝集もみられる。上面のレベルは0.42～0.53m、層厚は0.1m前後である。＜6層＞と同じく、A地点北東からC地点にかけての北東部を中心とした河道埋没後の低位部に広がる。＜8層＞検出の河道からは弥生時代中期～後期の土器（図123-1～4）が出土しており、本層の形成はそれ以降で、古墳時代初頭の土器を包含する溝を下限とする。上面で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属する土坑、溝群を検出した。遺物はほとんど出土していない。

＜8層＞（弥生時代中期以前）：黄橙褐色砂質土である。鉄分の沈着、マンガンの凝集がみられる。本地点を北西～南東方向に通る河道によって切られ、北側には広がらない。A地点南半から西辺にかけて広がりをもつ。直上には＜5層＞、＜7層＞が堆積する。上面のレベルは0.77～1.0m、層厚は約0.1～0.3mで、南西隅がもっとも厚く、東に向かって漸次厚みを減じてゆく。上面で溝や溝と考えられる流路と本来上位層に帰属する土坑を検出し



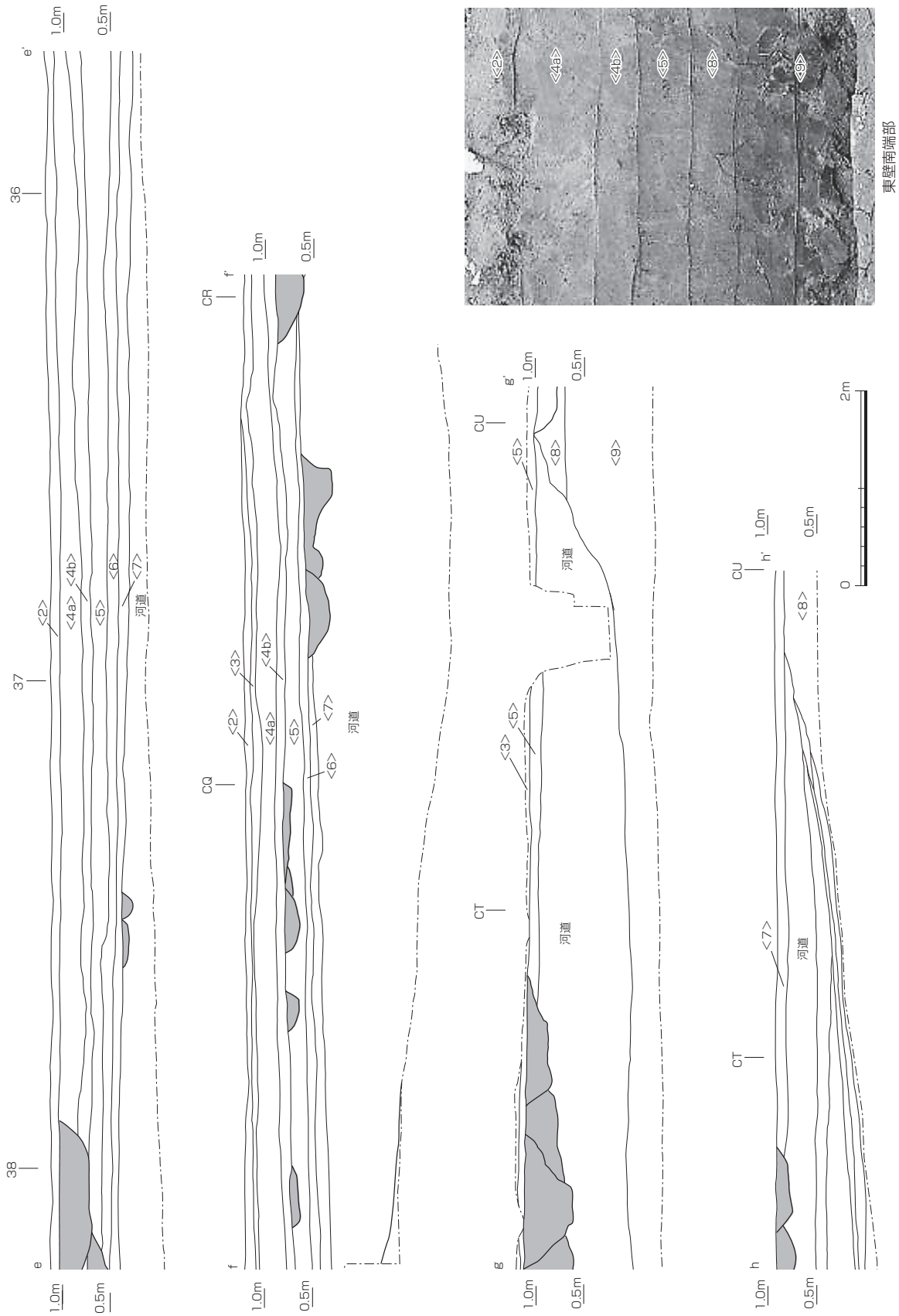


図8 調査区土層断面(2) (縮尺1/60)

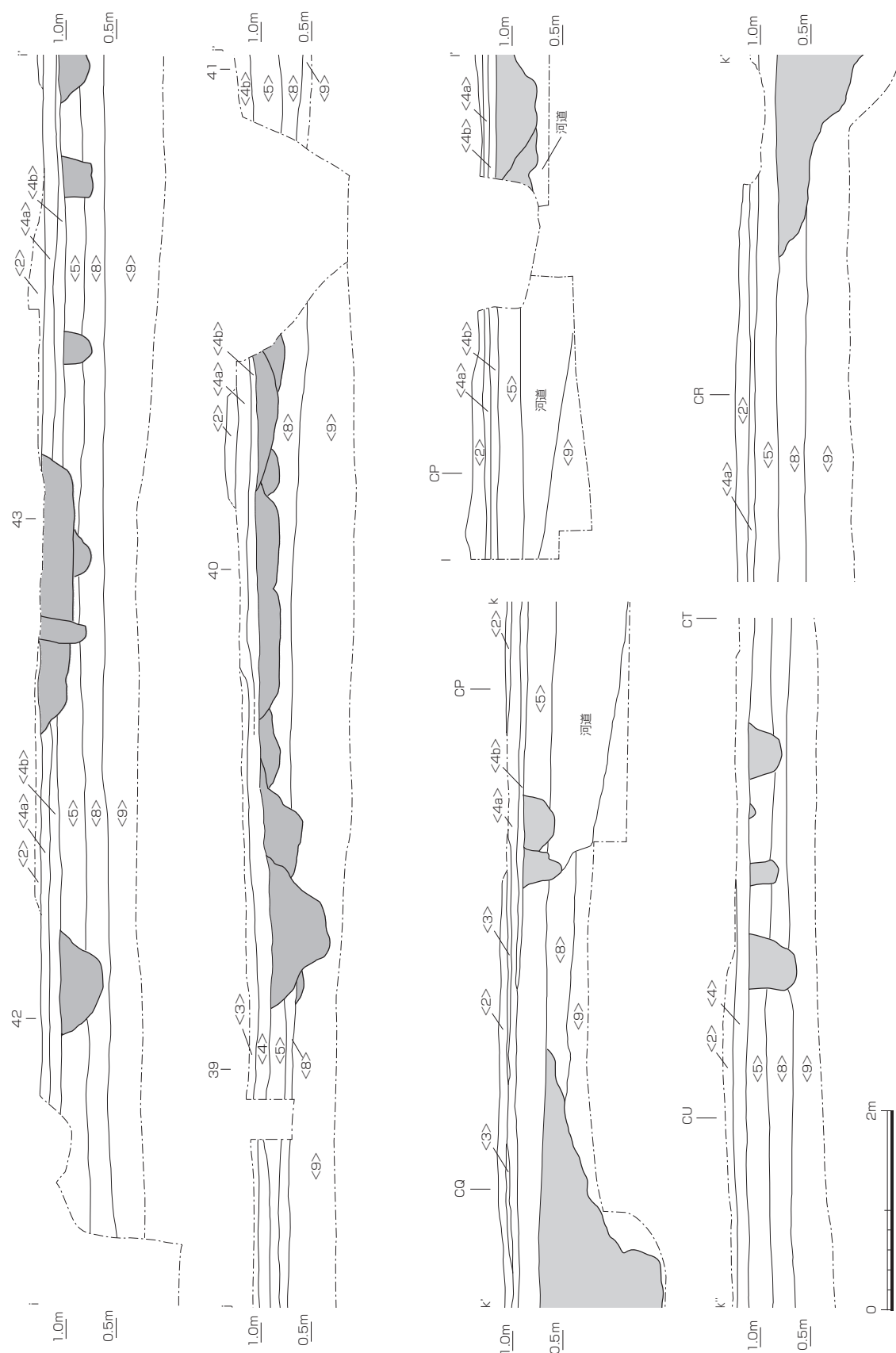
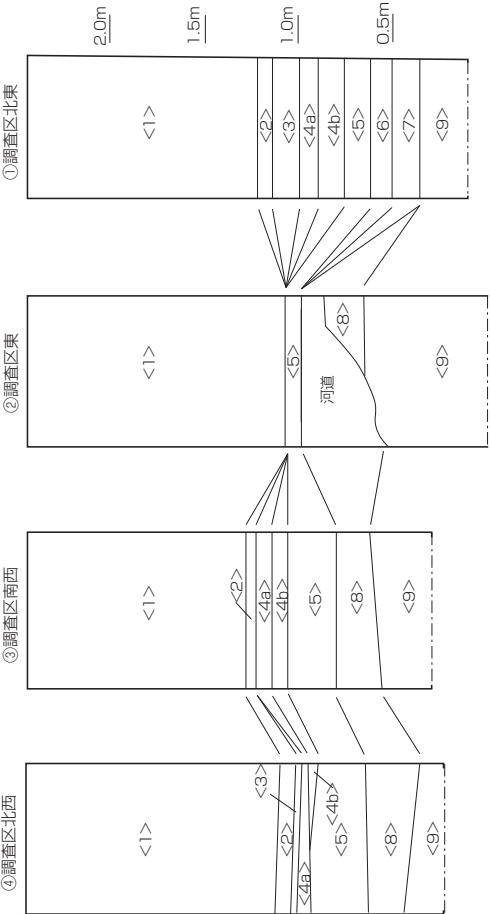
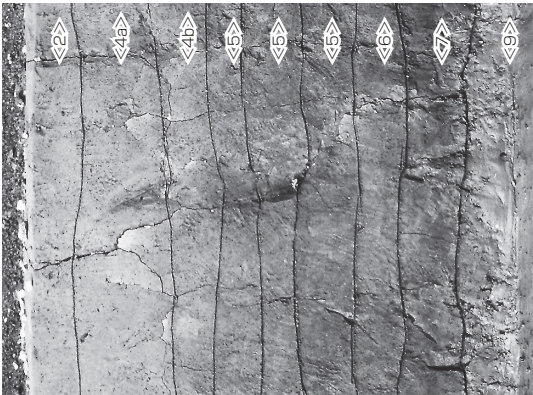


図9 調査区土層断面(3) (縮尺1/60)



| A地点【北壁】 |        |       |        |       |        |        |        |      |      | C地点【北壁】 |      |       |      |        |       |      |      |      |    | A地点【東壁】 |        |      |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
|---------|--------|-------|--------|-------|--------|--------|--------|------|------|---------|------|-------|------|--------|-------|------|------|------|----|---------|--------|------|------|---|-------|--|--|--|--|-------|--|--|--|--|
| ← a →   |        |       |        |       | → b →  |        |        |      |      | ← c →   |      |       |      |        | → d → |      |      |      |    | ← e →   |        |      |      |   | → f → |  |  |  |  | ← g → |  |  |  |  |
| 層名      | 44     | 43    | 42     | 41    | 40     | 39     | 38     | 37   | 36   | 35      | 34   | 33    | 32   | 31     | 30    | CP   | CQ   | CR   | CS | CT      | CU     | CW   |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <2>     | (1.33) | (1.3) | (1.24) | (1.2) | (1.15) | (1.12) | (1.15) | 1.15 | 1.2  | 1.25    | 1.24 | 攪乱    | 1.24 | 攪乱     | 1.21  | 1.21 | 1.2  | —    | 攪乱 | 攪乱      | CU     | 1.28 |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <3>     | —      | —     | —      | —     | —      | —      | —      | —    | —    | 1.14    | 1.17 | 攪乱    | 1.17 | (1.15) | 1.13  | 1.09 | 1.14 | 1.24 |    |         |        | 攪乱   | 1.22 |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <3a>    | 1.25   | 1.21  | 1.16   | 1.13  | 1.1    | 1.09   | 1.05   | 1.05 | 1.09 | 0.93    | 0.92 | (1.1) | 0.99 | 0.97   | 1     | 1.06 | 1.03 | 1.16 |    |         |        | 攪乱   | 1.03 |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <4>     | —      | 1.12  | 1.08   | 0.91  | 0.84   | 0.79   | 0.82   | 0.82 | 0.87 | 0.85    | —    | 0.9   | 0.92 | 0.87   | 0.9   | 0.78 | 0.89 | 0.95 | 攪乱 | 攪乱      | (1.08) | —    |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <4b>    | —      | —     | —      | 0.78  | 0.76   | 0.71   | 0.72   | 0.72 | 0.79 | 0.72    | 0.77 | 0.81  | 0.84 | 0.81   | 0.77  | 0.69 | 0.82 | 0.92 |    |         |        | 1.07 | 0.92 |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <5>     | 1.01   | 0.93  | 0.9    | 0.91  | 0.84   | 0.79   | 0.82   | 0.82 | 0.87 | 0.85    | —    | 0.9   | 0.92 | 0.87   | 0.9   | 0.78 | 0.89 | 0.95 |    |         |        | —    | —    | — |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <6>     | —      | —     | —      | 0.64  | 0.59   | 0.54   | 0.61   | 0.57 | 0.56 | 0.61    | 0.63 | 0.65  | 0.63 | 0.55   | 0.62  | 0.51 | 0.61 | 0.7  | —  | —       | —      | —    |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| 遺構      | —      | —     | —      | 遺構    | 0.5    | 遺構     | 0.51   | 0.46 | 0.47 | 0.57    | 0.54 | 0.55  | 0.57 | 0.45   | 0.5   | 0.42 | 0.53 | —    | —  | —       | —      | —    |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <7>     | —      | —     | —      | —     | —      | —      | —      | —    | —    | —       | 0.44 | 0.48  | 0.47 | 0.32   | 0.37  | 0.3  | 0.46 | 0.64 | 攪乱 | 0.98    | 遺構     | 0.8  |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <8>     | (0.42) | 0.84  | 0.8    | —     | —      | —      | 0.43   | 0.37 | 0.32 | 0.47    | 0.44 | 0.48  | 0.47 | 0.32   | 0.37  | 0.3  | 0.46 | 0.64 |    | 0.05    | 0.7    | 0.68 |      |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |
| <9>     | —      | —     | —      | —     | —      | —      | —      | —    | —    | —       | —    | —     | —    | —      | —     | —    | —    | —    |    | 0.19    | 0.05   | 0.7  | 0.68 |   |       |  |  |  |  |       |  |  |  |  |

| A地点【南壁】 |      |        |        |        |       |      |      |      |      | A地点【西壁】 |      |      |     |      |       |      |  |  |  |    |    |
|---------|------|--------|--------|--------|-------|------|------|------|------|---------|------|------|-----|------|-------|------|--|--|--|----|----|
| ← j →   |      |        |        |        | ← i → |      |      |      |      | ← k →   |      |      |     |      | ← l → |      |  |  |  | 遺構 | 河道 |
| 層名      | 36   | 39     | 40     | 41     | 42    | 43   | 44   | CV   | CU   | CT      | CS   | CR   | CQ  | CP   |       |      |  |  |  |    |    |
| <2>     | 攪乱   | 攪乱     | 攪乱     | 攪乱     | 攪乱    | 攪乱   | 1.37 | 1.27 | 1.37 | 攪乱      | 攪乱   | 1.42 | 1.4 | 1.4  |       |      |  |  |  |    |    |
| <3>     |      | (1.12) |        |        |       |      |      |      |      |         |      |      |     |      | 1.31  | -    |  |  |  |    |    |
| <4a>    | 1.07 | 1.05   | (1.22) | (1.25) | 1.24  | 1.24 | 1.24 | 1.25 | 1.28 |         |      |      |     |      | 1.28  | 1.29 |  |  |  |    |    |
| <4b>    |      |        | 1.13   |        | 1.16  | 1.12 |      |      |      |         |      |      |     |      |       | 1.22 |  |  |  |    |    |
| <5>     | 0.97 | 0.91   |        | 1.11   | 1.04  | 1.03 | 1.11 | 1.12 | 1.14 | 1.06    | 1.23 | 1.22 | 1.2 | 1.14 |       |      |  |  |  |    |    |
| <6>     |      |        |        |        |       |      |      |      |      |         |      |      |     |      |       |      |  |  |  |    |    |
| <7>     |      |        | 遺構     |        |       |      |      |      |      |         |      |      |     |      |       |      |  |  |  |    |    |
| <8>     | 0.84 | 0.75   |        | 0.81   | 0.78  | 0.82 | 0.85 | 0.97 | 0.92 | 0.89    | 0.92 | 1    | 遺構  | 0.9  |       |      |  |  |  |    |    |
| <9>     | 0.73 | 0.68   | 0.69   | 0.59   | 0.56  | 0.62 | 0.6  | 0.67 | 0.69 | 0.69    | 0.69 | 0.71 |     | 0.61 |       |      |  |  |  |    |    |

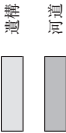


図10 調査区土層断面(4) (縮尺1/40)

た。遺物はほとんど出土していない。河道との関係から、本層は弥生時代中期以前の形成と位置づけられる。

＜9層＞：黒灰色粘質土である。鉄分の沈着はわずかにみられる。直下の土層を起源とするとみられる5～20cm大のブロックを多く包含する。本地点を北西－南東方向に通る河道によって切られ、北側には広がらない。A地点南半から西辺にかけて広がりをもつ。上面のレベルは0.6～0.7m、層厚は約0.1～0.25mである。南西隅から西辺でもっとも厚く、東にむかって漸次厚みを減じてゆく。遺物は出土していない。

### 3. 地形

前項で示した各層の土質、上面標高、層厚、堆積範囲等の情報に基づき、本調査地点の地形の変化を＜8・9層＞段階（弥生時代中期以前）、＜5層＞段階（古墳時代初頭）、＜4層＞段階（中世前半）の三段階をとりあげて示す（図11）。

＜8・9層＞段階：調査区北西部からA地点南東部にかけ、北西－南東方向で弥生時代中～後期の河道が通る。河道の南側は微高地となる。本調査区では河道南岸側の法肩を検出した。本調査区の北に隣接する第9・11次調査区では調査区南西部のCL41～43区にかけての範囲で河道とみられる落ちが確認されている。この範囲では河道北岸側の法肩は確認されていないので、さらに北に広がることが推定される。その場合、河道の幅は約30～40mをはかると推定される。河道上面のレベルは0.3～0.9m、確認できた底面の標高は-0.19mで、深さは約1.2m以上である。

この段階の地形、とりわけ河道の存在は、後の本地点の土地利用のあり方に多大な影響を及ぼしていく。

＜5層＞段階：弥生時代中～後期の河道は、調査区北東側に広がる＜6・7層＞が約0.2～0.3mの厚みで堆積し、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭にかけて次第に深さを減じていく。＜5層＞より前の地層形成は微高地から低位部にかけての斜面堆積によるものであった。＜5層＞は＜6・8層＞の直上に形成され、調査区全体に広がりをもつ層厚0.1～0.3mの土

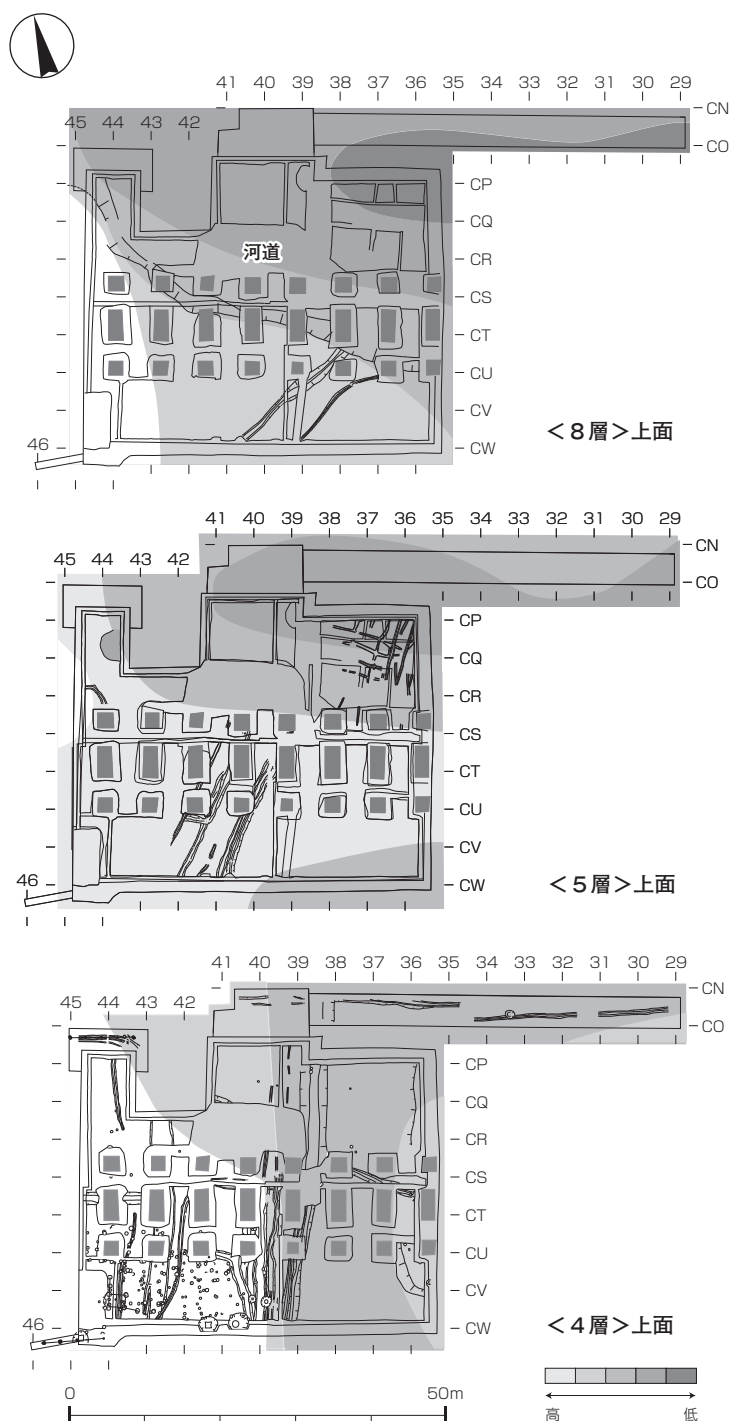


図11 地形の変遷（縮尺1/1000）

層である。しかし、調査区北東の河道は完全には埋まりきっておらず、南半とは約0.2～0.3mの比高をもつ低位部としてのこっている。

＜4層＞段階：本層形成の下限は11世紀後半で、調査区北東に通っていた河道の痕跡はほぼ埋没した。40ラインの東西では、直線的に約0.1～0.3mの高低差がみられる。遺構分布をみると、この位置に南北方向の溝が繰り返し掘削されており、溝により土地区画が表示されたと考えられる。また、40ライン以西では多数のピット、井戸、鍵形に折れる溝が検出される。40ライン以东では、A地点で南北方向の区画溝が39～40ライン間に掘削されるが、それ以外は希薄である。北側のB・C地点でも東西方向の溝、土坑1基がみられるが、希薄な分布状況を示す。近世に属する＜3層＞段階において、低位部は水田として利用されており、この地形は近世の作為を反映する可能性もあるが、中世の遺構配置にも有意な関係性を見出せるので、中世に遡る可能性も指摘しておきたい。

## 第2節 弥生～古墳時代初頭の遺構・遺物

### 1. 概要

弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構として、耕作に関係すると考えられる高まり1か所、井戸1基、土坑11基、溝17条、土器だまり1か所を検出した。前節で示したとおり、この段階は調査区北半部を占める河道が機能していた段階から埋没していく過程にあたり、遺構の種類や分布も埋没の進行にともない変化する。

調査区北半を占める河道は、出土遺物から弥生時代中期には機能しているとみられ、この段階の遺構としてはA地点南東で溝の可能性のある流路1条が河道に取り付くか、切られるかたちで形成されている。その後、河道の埋没は弥生時代後期に急速に進行し、河道埋土の上面を掘り込んで古墳時代初頭の遺構が構築される。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構のうち、調査区北半の河道埋没範囲では井戸1基、土坑8基、溝16条、高まり1か所、土器だまり1か所が確認された。微高地をなす＜8層＞上では土坑3基、溝1条が確認された。遺構の種類、遺構数からは低位部の利用が顕著な状況がうかがわれる。

調査区北半の溝には、北に隣接する第9・11次調査で確認された溝との関連をうかがわせるものがある（図132）。北方向から延び溝8に合流する溝は第9・11次調査の溝17に接続する。C地点では溝4が第9・11次調査の溝2、第14次調査の溝1に接続し、長さ約145mにおよぶ。溝6・7は走行方向が第9・11次調査の畦畔8や溝8aと平行する。溝2で確認された円弧を描く掘り方形状は、第9・11次調査の円形溝群や円形高まりと似る。

こうした溝のほか、高まりと関係性の強い溝群がある。CP～CR36～38区で、高まりに沿う位置、走行方向、規模、屈曲点の位置などの要素で共通点のある溝群（溝8～14）が検出された。切り合い関係では基本的に北側の溝から南側の溝へと順次掘削がなされ、最終的に溝15の掘削によって高まりの形成は完了する。第9・11・14次調査地点では、高まりは畦畔で画された耕作地に点在しており、本地点も耕作地にともなうものと推測される。

井戸は耕作地縁辺の低位部に単独で位置している。土器だまりは河道・溝5埋没後の低位部に形成されている。土坑はC地点からA地点の高まりにかけては小規模なもの、南側は比較的大型のものが作られる傾向がある。

### 2. 高まり（図13、図版8）

A地点北半中央から東辺、CP～CR36～38区に位置する。南西部を攪乱で失っている。＜6層＞で検出した。高まりを成すのは河道埋土である。平面形状は溝15の掘削によって作出されたものである。西部は円弧を描き丸くカーブする。北辺は38～41ラインではやや内湾するものの、西北西～東南東方向をとってほぼ直線的にのび、CP38交点付近で南北方向に屈曲する。CQ38交点やや南で再び屈曲してくびれ部を形づくり、ゆるやかなカーブを描いて調査区東辺へと至る。CR～CS36～38間で確認した南辺は北辺に平行し、緩やかなカーブを描く。平面

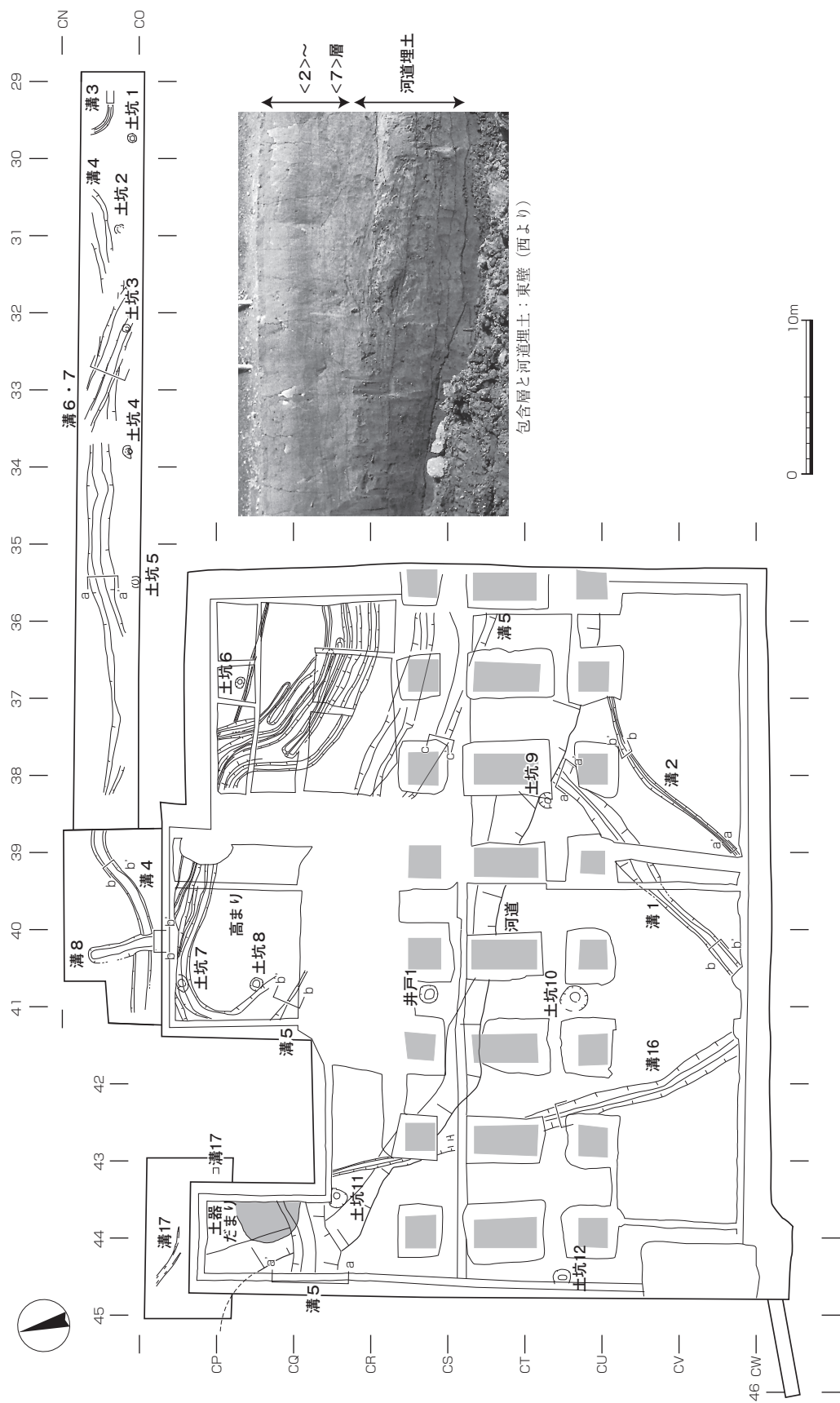


図12 弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構全体図（縮尺1/400）

規模は東西長約26m、くびれ部西側の南北最大幅約7m、東側の南北幅約2mである。上面の標高はa-a'断面で0.87m、c-c'断面で0.63m、底面高（溝15）はa-a'断面で0.58m、c-c'断面で0.4mである。高まりの斜面は溝15の外縁にも広がりをもっており、b-b'断面の斜面下端の標高は0.44m、c-c'断面の南では0.55m、北では0.4mであり、上面との比高はb-b'断面で0.59m、c-c'断面北で0.21mをはかる。

高まりの北辺の形状と相似する溝8・10～15は、高まりと関係性の高い溝である。平面的には高まりの北に幅約2～3mの範囲で掘削され、立体的な関係では高まり法面下の平坦面に位置する。これらの溝の切り合い関係をたどると基本的には北から南に順次掘削しており、溝10・11の掘削が溝で区画される高まり形成の嚆矢となっている。その後、掘削位置を南に移しながら溝8、溝12・13が掘削される。その他、これらの溝に共通すること

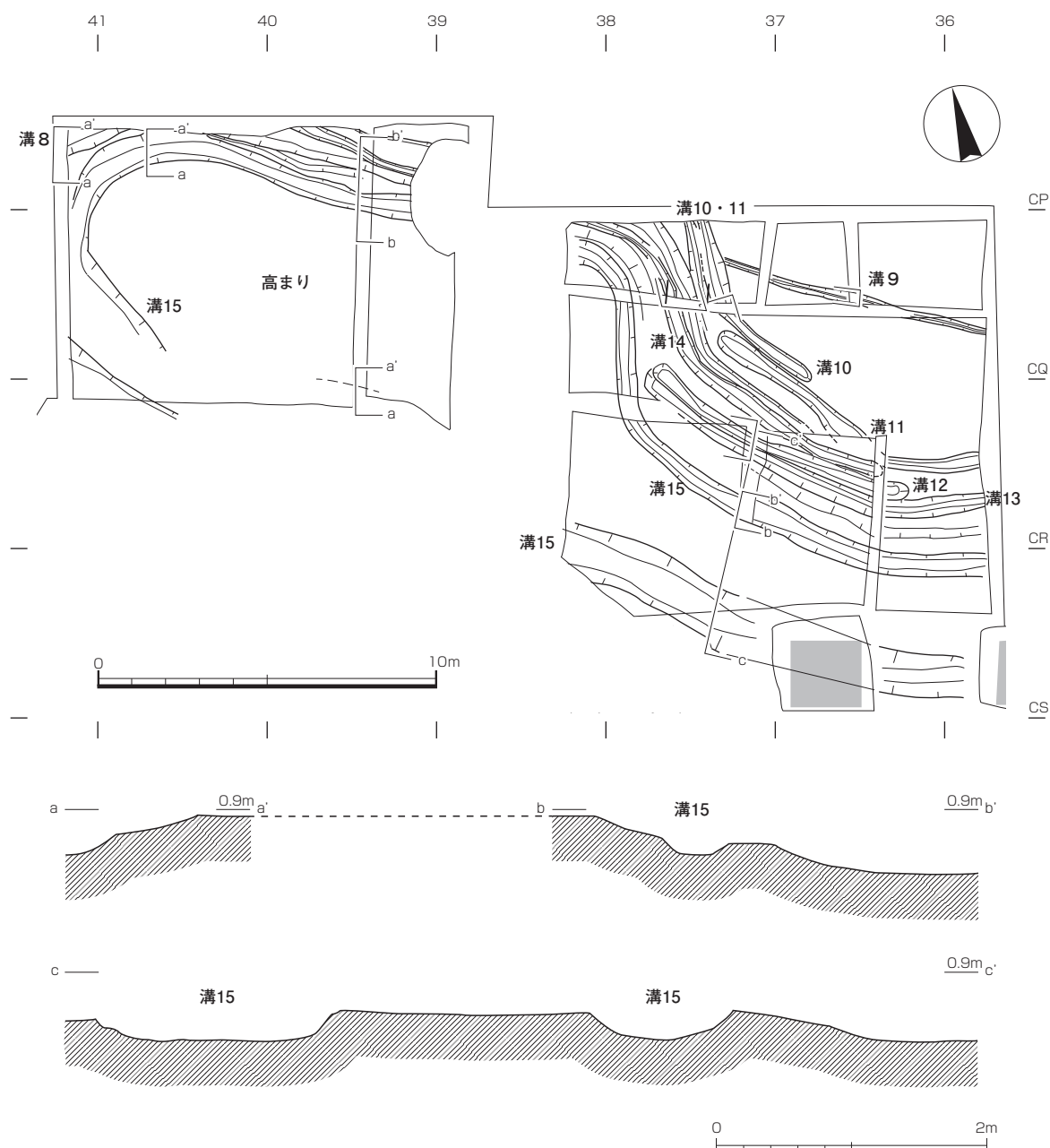


図13 古墳時代初頭の高まり（縮尺1/50・1/200）

として、端部が丸く収束し、長く掘削されないことに注意したい。

高まりの形状を最終的に形成した溝15は、規模、頂部から法面中ほどに上がった掘削位置、一連の掘削で外周をめぐることなどの点で、溝8～14とは異なる規準で掘削されている。隣接する第9・11・14次調査で検出されている高まり・畦畔との関連がうかがわれ、耕作に係する遺構と推測される。

検出面および周辺遺構との関係から、古墳時代初頭に位置づけられる。

### 3. 井戸

井戸1（図12・14・15、図版2・3・42）

A地点中央、CR40区に位置する。A地点中央を東西に貫く建物基礎間で検出された。北側には広く深い攪乱が広がっている。＜5層＞下面で検出した。検出面の標高は0.92m、底面高は-0.2mで、深さは1.12mである。

平面形は、上面では東半は方形、西半は円形を基調とする。底面は隅丸方形を呈する。規模は、上面で直径1.2m、底面で長軸長0.74m、短軸長0.61mである。断面形はU字形を呈する。

埋土は17層に分層される。土色、土質、包含物を指標に五群に大別する。一群は1～3層が該当する。粒径1cm程度のブロックを包含した、褐色系の色調を呈する埋土で、砂質を帯びる傾向がある。1・2層は中央のくぼみ部にレンズ状に堆積する。二群は4～8層が該当する。白色微砂、炭化粒を包含した、褐色系の色調を基調とする砂質土である。4層では炭化粒に加え、焼土塊の包含が散見される。三群は9層が該当する。暗黄褐色砂混じり粘質土で、炭化粒を包含する。四群は10～13層が該当する。灰～灰褐色系の砂質土で、包含物を含まない。五群は14～17層で、暗灰色系の色調を基調とする粘質土～粘土で構成される。各層とも砂のほかには顕著な包含物は認められない。16層では古墳時代初頭の土師器、17層では編籠が検出された。この段階に底部付近において何らかの祭祀的な行為を行ったと考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器のほか、編籠が出土した。編籠の遺存状態は良くない。保存処理後の計測では、中心部はタテ材、ヨコ材とも幅約3mmの素材を用いている。残存部分からは3本の材を1束に揃えて網代に編んでいるとみられる。外縁部では、中心部から延びる幅約1～2mmの素材をタテ材とする。これに直交するヨコ材は、幅約1mmの細い素材で、1本越え1本潜り1本送りのゴザ目に編んでいる。中心部と外縁部で編み方が変わり、その転換位置が籠の器形の変わり目とすれば、網代編み部分が底部、ゴザ目編み部分が体部にあたると考えられる。

本井戸の時期は、検出層および出土遺物から古墳時代初頭に位置づけられる。

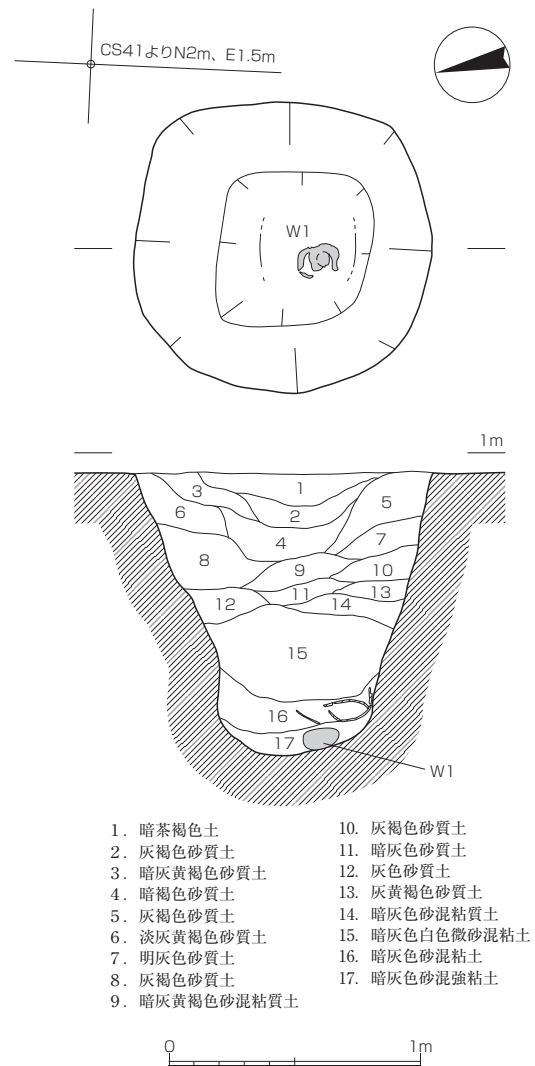
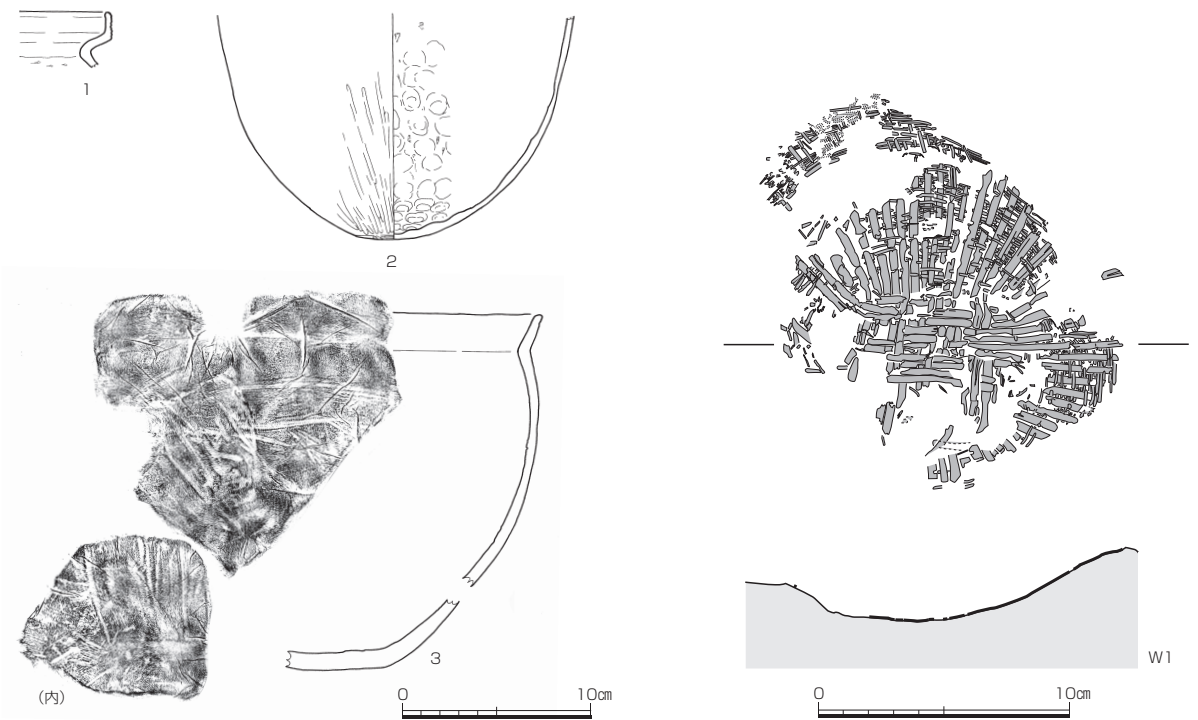


図14 井戸1（縮尺1/30）



| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・－は1/6以下 |         |    |        | 特 徴                               | 胎 土      | 色 調：内/外 |
|------|-------|---------------|---------|----|--------|-----------------------------------|----------|---------|
|      |       | 口径            | 底径      | 器高 | 計測部残存度 |                                   |          |         |
| 1    | 土師器 甕 | －             | －       | －  | －      | 口：櫛描沈線8条、内：横匔ケズリ、外：煤、2と同一個体か      | 微砂/礫・角閃石 | 淡灰褐     |
| 2    | 土師器 甕 | －             | 3.6～4.3 | －  | 1/1    | 内：匔ケズリ・押圧・煤、外：匔ミガキ少・煤、底外：匔ミガキ     | 微砂/礫・角閃石 | 淡白褐～暗褐  |
| 3    | 土師器 鉢 | －             | －       | －  | －      | 内：ハケメ・粗いハケ状のナデ、胴外：ハケメ後ナデ・押圧、底外：ナデ | 微砂       | 淡黄白～淡橙灰 |

| 番号 | 器種 | 残存長 (cm) | 残存幅 (cm) | 厚 (cm) | 特徴                                             |
|----|----|----------|----------|--------|------------------------------------------------|
| W1 | 編籠 | 15.4     | 11       | －      | 編み方：網代編み、ゴザ目編み、素材：底部で幅3mm、体部でタテ材幅1～2mm、ヨコ材幅1mm |

図15 井戸1出土遺物（縮尺1/3・1/4）

## 4. 土坑

### 土坑1（図12・16、図版3）

C地点東側、CN29区に位置する。＜7層＞で検出した。南半部は側溝にかかっているため上半部を失っているが、側溝底面では下半部を確認できた。検出面の標高は0.42m、底面高は0.16mである。深さは0.26mをはかる。

平面形は上面、底面ともに円形で、その規模は上面で径約0.6m、底面で径約0.3mである。断面形はすり鉢状を呈する。

埋土は4層に分層され、土質から上下の土層群に大別される。上半の1・2層は灰色系の砂質土で、1層には粒径1～10cm程度までのブロックを含む。下半の3・4層は灰色系で粘性を有する埋土であり、3層では粒径約5cmの暗灰白色粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

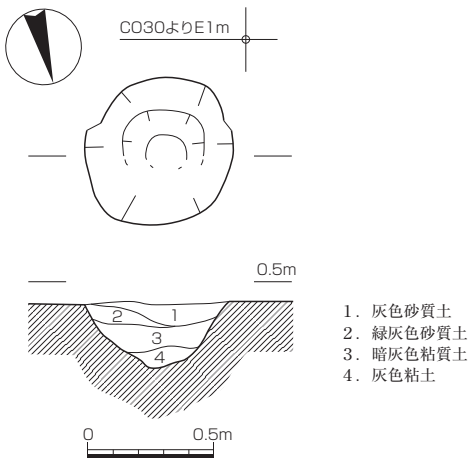


図16 土坑1（縮尺1/30）

# 土坑2 (図12・17、図版3)

C地点東側、CN30区に位置する。＜7層＞で検出した。西～南にかけては溝4に切られ、東の一部には上層遺構の裁ち割りがかかっているため、平面的には過半を失った状態で確認した。検出面の標高は0.46m、底面高は0.32mで、深さは0.14mをはかる。

過半を失っているものの、残存部からみると平面形は上面で円形、底面でも円形と考えられ、北西－南東方向での規模は上面が径約0.7m、底面が約0.4mである。残存部はわずかなものの、断面形は皿状を呈するとみられる。

埋土は暗橙褐色砂質土で、粒径5cm前後のブロックを含む。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

# 土坑3 (図12・18)

C地点東側、CN32区に位置する。＜7層＞で検出した。溝6と重複しており、上部および北半部は溝6によって失われている。検出面の標高は0.47m、底面高は0.34mで、深さは0.13mをはかる。

残存する南半部では、上面の平面形は半円形を呈しており、円形に復元できる。底面も同様に円形を呈すると考えられる。残存部の規模は上面で径約0.55m、底面で径約0.23mである。断面形は皿状を呈する。

埋土は2層に分層される。1層は淡黒灰色土、底面直上の2層はブロックを含む砂質土である。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

# 土坑4 (図12・19、図版4)

C地点中央部、CN33区に位置する。＜7層＞で検出した。南半部は側溝にかかっており上半部を失っているが、側溝底面では下半部を確認できている。検出面の標高は0.5m、底面高は0.2mで、深さは0.3mである。

平面形は円形を基調とするが、北～西縁では円弧の膨らみが小さい。底面をみると、北東－南西方向の軸がやや長い楕円形を呈しており、上面の平面形についても楕円形となる可能性が考えられる。残存部の規模は上面で径約0.85m、底面で長軸約0.35m、短軸約0.28mである。断面形は東側で二段掘り状を呈する。西側についても確認できた断面の標高約0.45m付近で傾斜が緩くなっており、調査では確認されなかったものの、これより上方に段が存在していた可能性も考えられる。

埋土は3層に分層される。いずれも灰色系の砂質土で、1・3層では粒径2～3cm大のブロックを多く含む。遺物は出土していない。

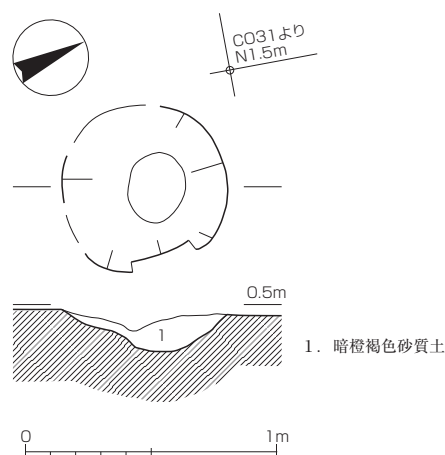


図17 土坑2 (縮尺1/30)

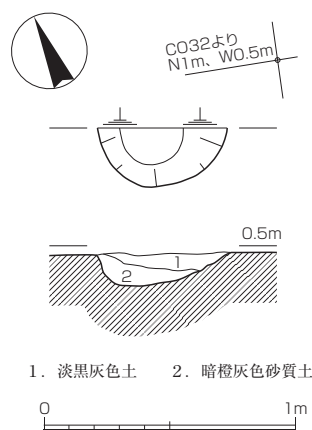


図18 土坑3 (縮尺1/30)

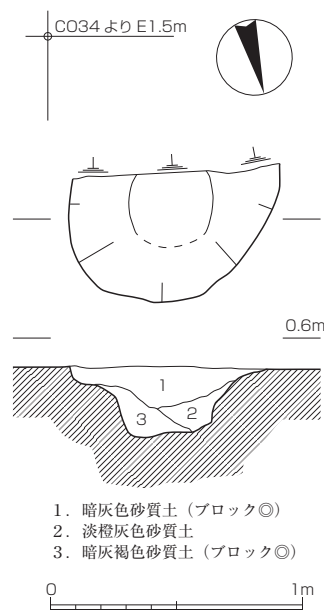


図19 土坑4 (縮尺1/30)

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑5 (図12・20、図版4)

C地点中央部、CN35区に位置する。＜7層＞で検出した。調査区南辺に設定した土層観察用土手内で確認しており、北側は南側溝で失われている。また矢板で画された南西側ではコーナー部分が調査区外にかかる。検出面の標高は0.47m、底面高は0.27mで、深さは0.2mである。

調査区内で確認できる平面形は、北辺を失っているものの、上面が隅丸方形、底面が南北方向に長軸をとる隅丸長方形と想定される。規模は上面で東西0.72m、底面で南北方向の長軸長0.45m以上、東西0.31mである。断面形は碗状を呈する。

埋土はいずれも黒灰色粘質土であるが、上層の1層には粒径約5cmまでのブロックが包含され、下層の2層は脱色して淡い色調となっており、2層に分層した。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑6 (図12・21、図版4)

A地点北側東部、CP36区に位置する。＜7層＞で検出した。検出面の標高は0.39m、底面高は0.06mで、深さは0.33mである。

平面形は上面、底面ともに楕円形を呈する。規模は、上面の長軸長0.72m、短軸長0.54m、底面の長軸長0.27m以上、短軸長0.23mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は4層に分層される。中層に薄く堆積する暗灰色砂質土の3層のほかは粘性を有する暗褐色～黒色の色調を基調とする埋土が主体をなす。1層は層厚約0.2mと厚く、明黄褐色砂質土ブロックの包含が認められる。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑7 (図12・22、図版4)

A地点北側中央部、CP40区に位置する。＜7層＞で検出した。検出面の標高は0.52m、底面高は0.12mで、深さ0.4mである。北側は北側溝で失われている。

平面形は、上面では楕円形を呈している。底面についても上面の平面形と北半の遺存部分から楕円形となると想定される。規模は上面の長軸長0.99m以上、短軸長0.84m、底面の長軸長0.52m、短軸長0.48mである。断面形は逆台形を呈すると推測される。

埋土は3層に分層される。いずれも灰～灰褐色系の砂質土で構成される。1・2層では黄色砂の包含が認められる。遺物は

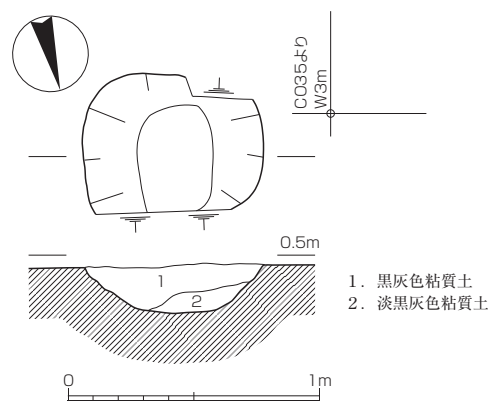


図20 土坑5 (縮尺1/30)

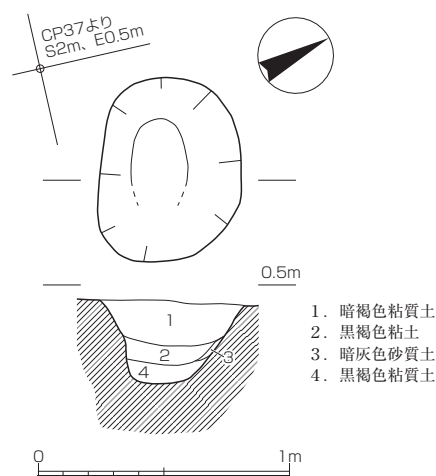


図21 土坑6 (縮尺1/30)

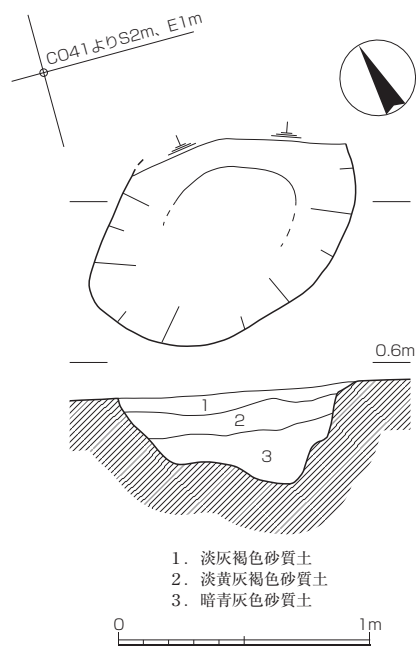


図22 土坑7 (縮尺1/30)

出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑8 (図12・23、図版5)

A地点北側中央部、CP40区に位置する。＜7層＞で検出した。検出面の標高は0.6m、底面高は0.08mで、深さは0.52mである。南西の一部に裁ち割りがかかるものの、遺存状況は良い。

平面形は上面で隅丸方形、底面では東半が円形、西半が隅丸方形を呈する不整円形となる。規模は上面で長軸長0.88m、短軸長0.77m、底面で長軸長0.48m、短軸長0.46mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は6層に分層されるが、土質・包含物の有無により三群に大別される。上層群をなす1・2層は灰褐色系の砂質土である。これ以下は断面形がレンズ状を呈した粘性をもつ埋土で構成される。中層群の3・4層は灰色系の粘土で、白色砂ブロックを包含する。下層群の5・6層は黒灰色系の粘土である。白色砂ブロックに加え、炭を包含することが特徴である。5層は3・4・6層と比して層厚が薄い。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑9 (図12・24、図版5・6)

A地点中央南東寄り、CT38区に位置する。＜8層＞で検出したが本来は＜5層＞に帰属する。検出面の標高は0.83m、底面高は0.04mで、深さは0.79mである。南辺および東側上端の一部に裁ち割りがかかるが、南辺では裁ち割り底面で掘り方を検出した。

平面形は上面では円形を呈するものと考えられる。底面は楕円形を呈する。規模は上面で径約1m、底面で長軸長0.44m、短軸長0.33mである。断面形はY字状を呈する。

埋土は6層に分層される。1層はレンズ状に堆積した淡灰褐色砂質土である。3・4層を構成する淡灰褐色砂質土が本土坑の法面に沿って堆積後、2層の黒褐色砂質土が中央を充填するように堆積している。4層以上は断面図の堆積状況から流入土と考えられる。土坑法面の屈曲点以下では、黒灰褐色砂質土の5層が約0.2～0.25mの厚さで、淡黒灰色粘質土の6層が約0.25～0.3mの厚さで堆積している。遺物は土師器小片が出土している。

本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑10 (図12・25、図版6)

A地点中央南西寄り、CT40・41区に位置する。＜8層＞で検出したが本来は＜5層＞に帰属する。検出面の標高は0.85m、底面高は0.18mで、深さ0.67mである。重複する上層遺構によって西側

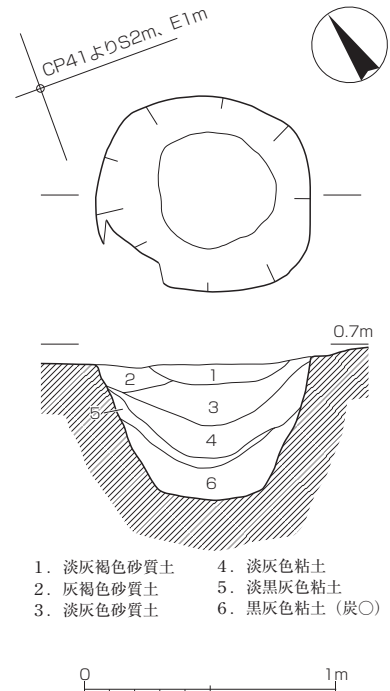


図23 土坑8 (縮尺1/30)

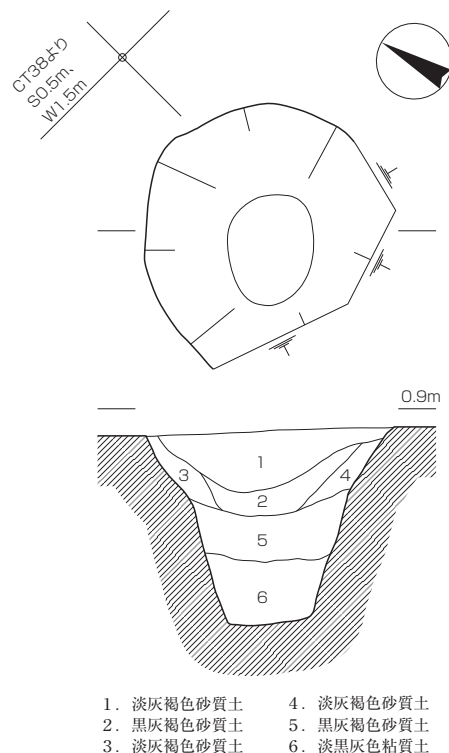


図24 土坑9 (縮尺1/30)

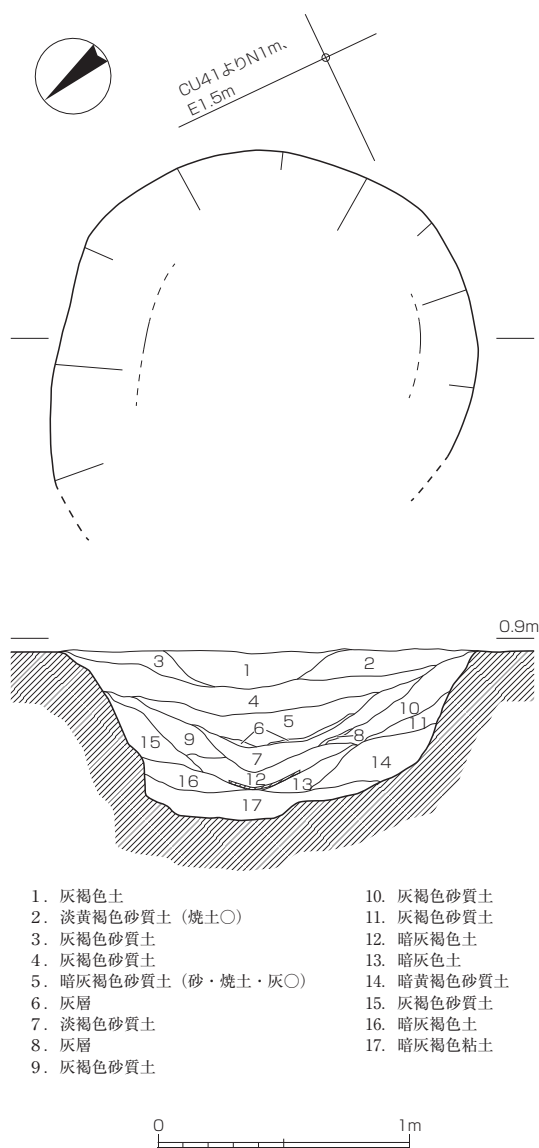


図25 土坑10 (縮尺1/30)

本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

#### 土坑11 (図12・26、図版7)

A地点北西部、CQ43区に位置する。＜5層下面＞で検出した。検出面の標高は0.99m、底面高は0.35mで、深さは0.64mである。北側は側溝で失われている。

平面形については、上面では西側に張り出す不整な円形を呈すると推定される。底面はほぼ円形を呈している。規模は上面で径1.32m、底面で径0.41mである。断面形は東側では検出面以上の状況が明瞭ではないが、西側の形状を参考にとすると二段掘りを呈していた可能性も推定される。

埋土は7層に分層されるが、色調・土質・包含物から四群に大別する。一群は1・2層で構成される。灰褐色系の埋土で鉄やマンガンの集積が認められる。二群は鉄分の沈着がみられる褐色系の砂質土で、3・4層が該当する。本群には土器がまとまって包含されていた。三群を構成する5・6層は灰褐色系の砂質土で、暗黄褐色砂ブロックを包含する。最下の7層は暗灰色粘質土ブロック等を多く包含するため四群とした。人為的な埋め戻し

の一部が失われている。

平面形は上面でやや歪な円形、底面は凹凸のため明瞭には形状をとらえられなかったが、上面と同様、円形を呈すると考えられる。規模は上面で径約1.63m、底面は、断面図北側の標高約0.25m付近の屈曲点と南側の標高約0.4m付近の屈曲点間をとった場合、径約1.1mとなる。断面形については、底面に凹凸がみられるものの、大局的には逆台形の範疇として捉えられよう。

埋土は17層に分層されるが、色調・土質・包含物等から五群に大別する。一群は1～4層で構成される。灰褐色砂質土が主体で、ブロックを多く包含し、焼土塊が混入する土層群である。二群は5・6層が該当する。6層は灰の単純層であり、上位の5層では焼土塊・灰の混雑層と砂層が互層状をなしていることが観察されている。なんらかの祭祀的行為が行われた可能性があることを示唆する層群と評価される。三群は7～12層で構成される。灰～灰褐色系の砂質土が主体で、ブロックの混入がみられる層群である。本群にも8層で灰の単純層が確認されているが、6層ほど明瞭ではない。四群は13～16層で構成される。砂質を帯びる暗灰色系の埋土が主体である。ブロックの混入が認められる。五群は17層が該当する。本層のみ粘性の強い粘土が堆積している。本土坑では二群でもっとも明瞭に炭・焼土層が観察されているが、一～三群のいずれも炭や焼土塊およびブロックの包含が認められ、複数回にわたる祭祀的行為が継続的に行われていたことが考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器片が出土している。12層下部では壺胴部の大型破片が12層と13・16層との層理面に沿って出土した。

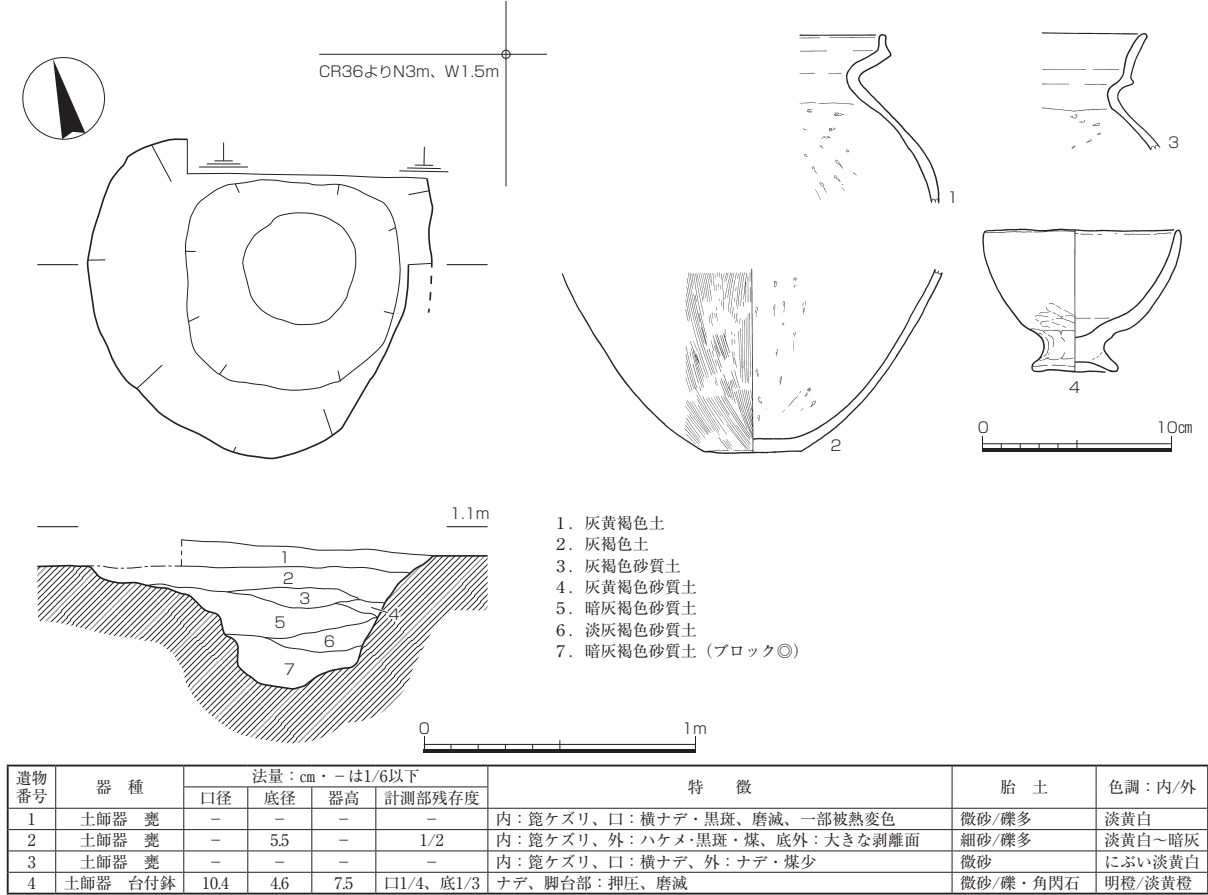


図26 土坑11・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

土や周囲からの崩落土の可能性が考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器が出土した。本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と位置づけられる。

土坑12 (図12・27・28、図版8)

A地点西辺中央、CT44区に位置する。西側を西側溝で失っている。＜8層＞で検出した。検出面の標高は0.97m、底面高は0.69mで、深さは0.28mである。

平面形は上面、底面ともに楕円形である。規模は上面で長軸長1.19m、短軸長0.91m以上、底面で長軸長0.53m、短軸長0.3mである。断面形は皿状を呈する。

埋土は5層に分層されるが、土質や包含物から三群に大別される。上層の1層は淡黒灰色土で、焼土塊・炭を包含する。中層の2・3・4層は橙灰褐色系の色調で砂質を帯びる埋土が主体の一群で、鉄分の沈着がみられる。下層の5層は淡橙色砂質土である。鉄分の著しい沈着が認められ、ブロックを多く包含する特徴がある。堆積状況を見ると、中層3・4層では法面沿いの周縁部で5層を掘りこむ層理面のラインとなる。

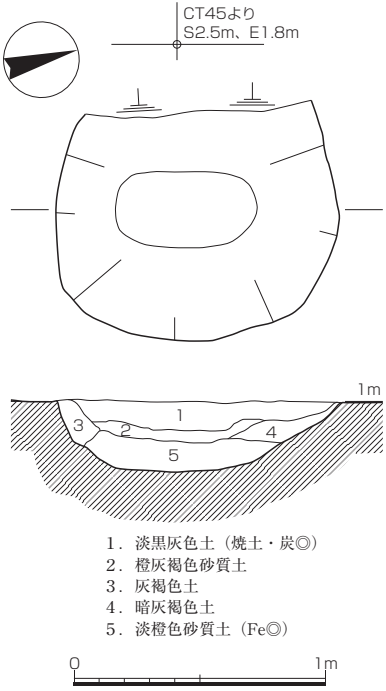
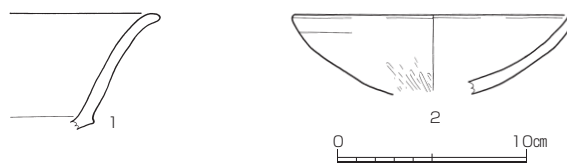


図27 土坑12 (縮尺1/30)

遺物は古墳時代初頭の土師器が出土している。本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と位置づけられる。



| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・－は1/6以下 |    |    |        | 特徴                           | 胎土      | 色調：内/外 |
|------|-------|---------------|----|----|--------|------------------------------|---------|--------|
|      |       | 口径            | 底径 | 器高 | 計測部残存度 |                              |         |        |
| 1    | 土師器 壺 | －             | －  | －  | －      | 内：横位窺ミガキ、外：縦位窺ミガキ・黒斑、磨滅、表面剥離 | 微砂/粗砂   | 明橙     |
| 2    | 土師器 鉢 | 15            | －  | －  | 1/5    | 内：剥離、外：窺ミガキ、高杯の可能性あり         | 微砂/細～粗砂 | 橙/淡橙   |

図28 土坑12出土遺物（縮尺1/4）

## 5. 溝

### 溝1（図12・29、図版11）

A地点南半中央部、CT37区からCV40区に位置しており、北側の一部は建物基礎の攪乱で失われている。ここでは溝として報告するが、急に深まる底面高や断面形で同層検出の溝2とは異なっている。また、本溝のほかに、明確に弥生時代中期に位置づけ得る遺構は、隣接の調査区にもない。以上から本溝は自然流路の可能性も想定される。

流路の方向は北東－南西を志向しており、わずかな蛇行はあるもののほぼ直線的に走行する。調査区内で長さ約18mを検出した。北側は河道に切られているが、接続している可能性もある。検出面は<8層>で、検出上面の標高は0.55～0.84m、底面高は0.28～0.59mで、深さは0.06～0.48mである。

底面高からは南西から北東へと下がる傾斜となっており、特に河道付近で大きく底面高を下げる。幅は北側で1.83mをはかるが、検出高の低かった南側では約0.6mである。断面形は浅いところでは皿状、深いところでは碗状となるが、いずれも底面が丸く湾曲する形状である。

底面高の高い南側では削平をうけており、わずかに底面付近の埋土が観察された。b－b'断面では青灰黄色の粘質土で、鉄分の沈着がみられる。河道に近接するa－a'断面では、底面高が大きく下がっており、埋土は4層に分層される。1～3層は橙褐色～灰褐色の砂質土で、鉄分の沈着がみられ、2層では下方に有機物の包含が認められた。底面直上に堆積する4層は暗灰褐色粘質土で、鉄分を含む。

遺物は出土していない。切り合いまたは接続する関係にある河道では弥生時代中～後期の遺物が出土しており、本溝の時期については弥生時代中～後期の幅のなかで考えたい。

### 溝2（図12・30、図版11）

A地点南半東側、CU37～CV39区にかけて、北東－南西方向で、北に弧状にふくらむカーブで走行する。調査区内で長さ約13mを検出した。北側は建物基礎の攪乱にあたり、それより先は検出されないため、河道との関係は不明である。検出面は

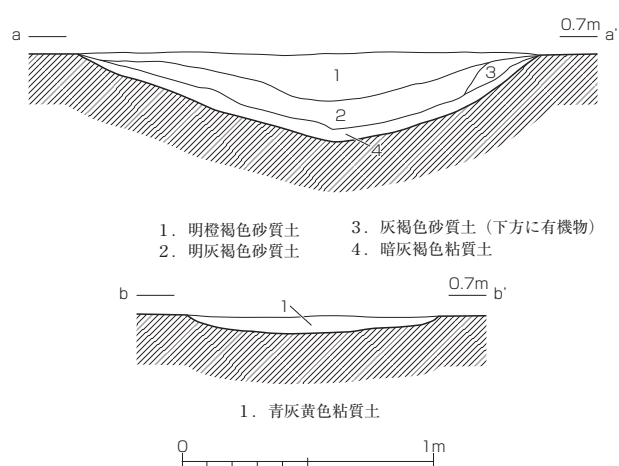


図29 溝1断面（縮尺1/30）

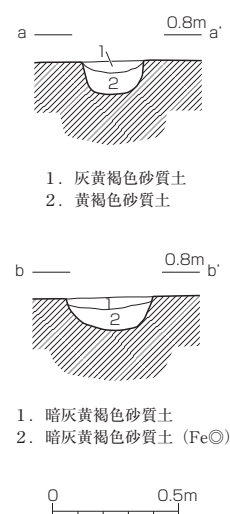


図30 溝2断面（縮尺1/30）

＜8層＞で、検出上面の標高は0.7～0.73m、底面高は0.55～0.58mで、深さは0.13～0.18mである。底面高から溝の傾斜は南西から北東へと下がるものとなっている。幅は0.24～0.35mである。断面形は椀状を呈する。埋土は2層に分層される。1層は灰黄褐色砂質土で鉄分の沈着がみられる。2層は暗灰黄褐色砂質土で鉄分の沈着が1層よりも顕著である。

遺物は出土していない。河道および＜7層＞との関係が不明であるため、所属時期は弥生時代中期～古墳時代初頭の幅のなかで考えておきたい。

### 溝3（図12・31）

C地点東端、CN29区に位置する。北西－南東で弧状にカーブする。調査区内では長さ約2mを検出したが、北・東側で調査区外へと延びていくものとみられる。検出面は＜7層＞で、検出上面の標高は0.46～0.49m、底面高は0.4～0.44mで、北西から南東へと下がる傾斜である。深さは0.06mである。幅は0.4mで、断面形は皿状を呈する。第9・11次調査を参照すると、円形にめぐる溝の一部である可能性が高い。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

### 溝4（図12・32、図版11）

B・C地点を東西に走行、CN29～CQ41区に位置する。第9・11・14次調査の溝に接続し、本調査区内では長さ約53mを検出した。東西方向を基調とするが、約15mの間隔で小さな蛇行を繰り返す。東西端とも調査区外へと延びている。検出面は＜7層＞で、検出上面の標高は0.4～0.69m、底面高は0.24～0.55mで、東から西へと下がる傾斜である。深さは0.14～0.26mである。幅は0.63～1.73mで、断面形は椀状を呈する。

B地点では上半を削平され、わずかに底面近くの埋土が確認された。暗橙灰褐色砂質土で、鉄分の沈着が顕著であり、粘土ブロックの包含が認められる。a－a'断面では3層に分層される。1・2層は暗橙灰色砂質土で、鉄分の沈着が顕著である。3層は黒灰～灰色粘質土で、粘土ブロック、有機質の包含が認められる。

遺物は出土していない。接続する第9・11調査の溝2、第14次調査の溝1の時期から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

### 溝5（図12・33・34、図版12）

A地点北半をCQ・CRラインにまたがり、北北西－東南東方向に走行する。A地点北半中央部には大規模な攪乱が入るうえ、北西部には凹字状に調査対象外地があるため、連続的に確認できなかったが、走行方向、断面形や底面のレベル等で共通性が高く認められる溝を同一のものと判断した。調査区内での長さは約45mの確認となる。東端、西端ともに調査区外へ延びる。検出面は＜5層下面＞で、検出上面の標高は0.2～1.1m、底面高は－0.26～0.34mで、北西から南東へと下がる傾斜である。深さは0.37～1.36mである。幅は5.21m、断面形は二段掘りを呈する。

＜5層下面＞まで掘り方がのこるa－a'断面（調査区西壁）の埋土は16層に分層される。土質・土色・包含物・層序から四群に大別する。一群は1～9層が該当する。灰褐色～灰色系の砂質土で構成される。上半の1～6層には鉄分の沈着やマンガンの凝集が認められる。1～8層の層理面は緩い弧状を呈するが、9層の層理面は

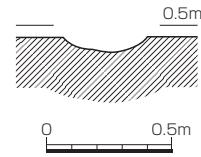
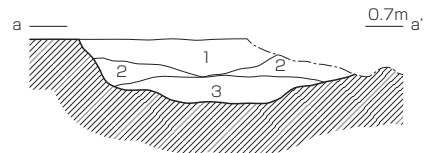
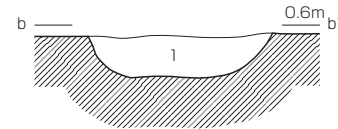


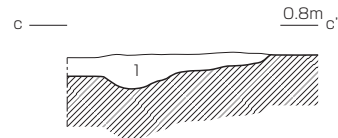
図31 溝3断面（縮尺1/30）



1. 暗橙灰色砂質土
2. 暗橙灰色砂質土 (Fe○)
3. 黒灰～灰色粘質土



1. 暗橙灰褐色砂質土



1. 暗橙灰色砂質土 (Fe○)



図32 溝4断面（縮尺1/30）

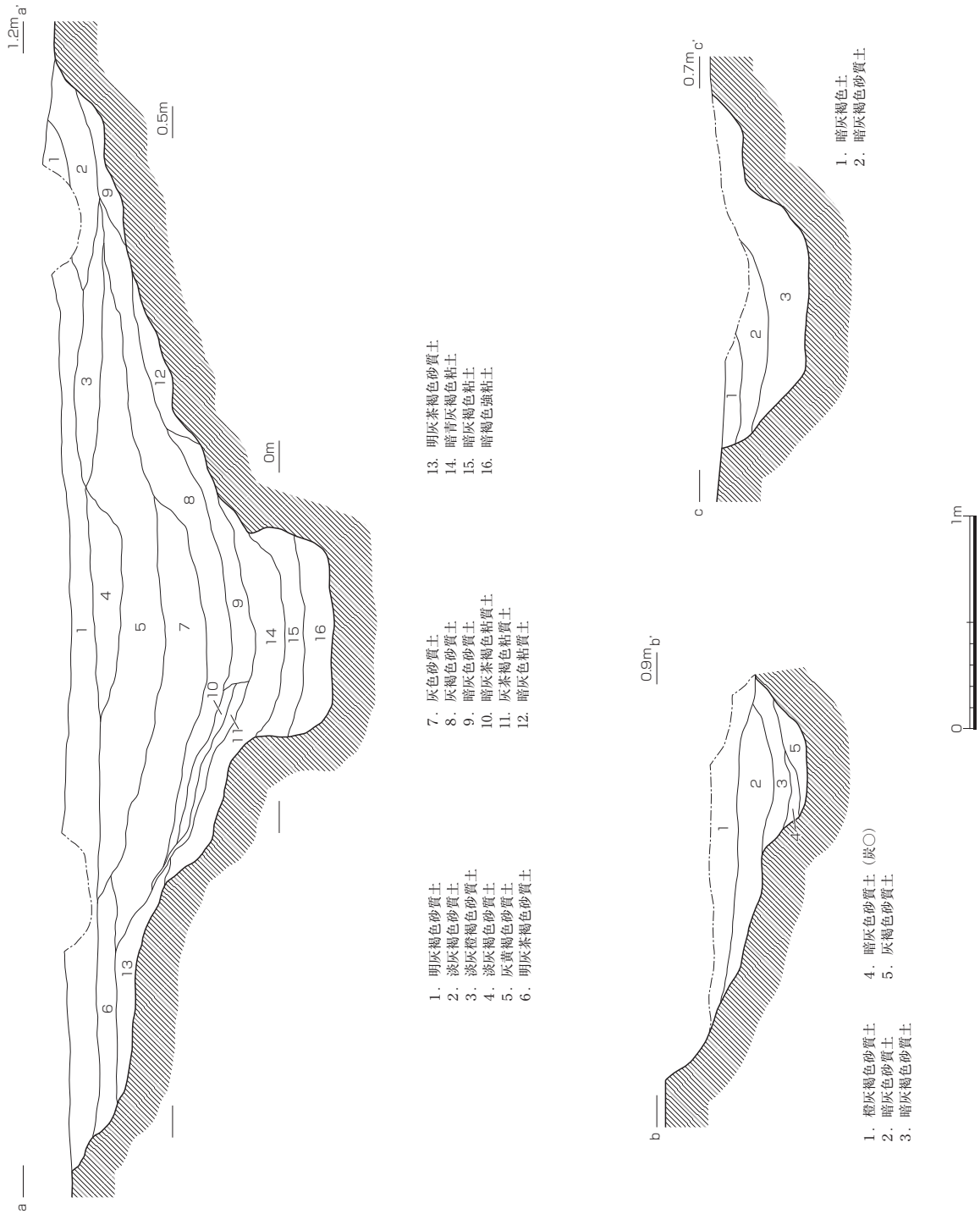


図33 溝5断面 (縮尺1/30)

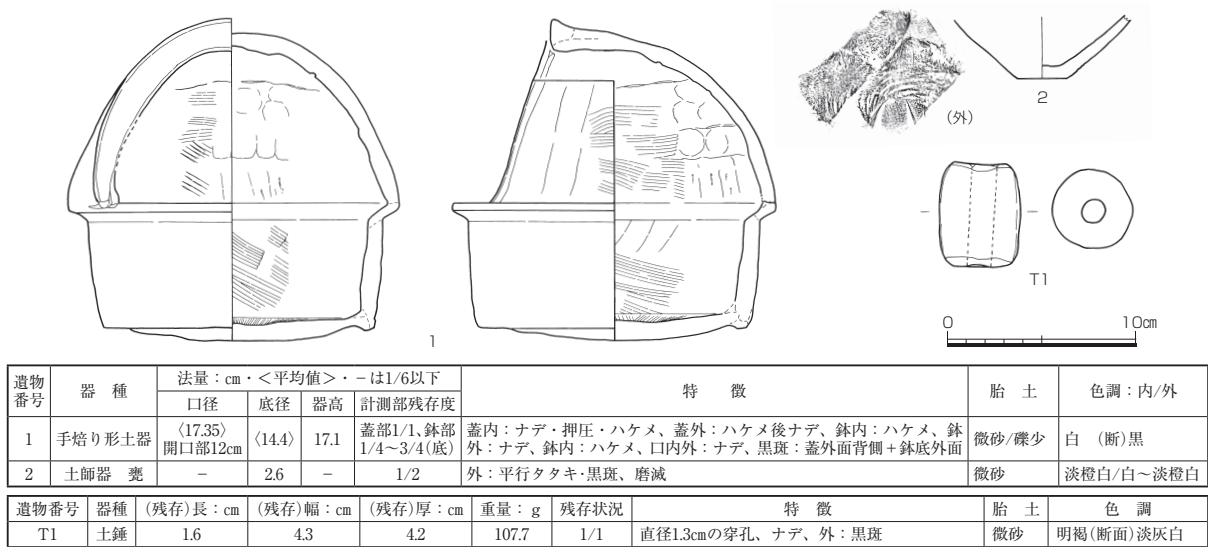


図34 溝5出土遺物（縮尺1/4）

直立気味の急な角度で立ち上がっており、再掘削がなされたものと考えられる。二群は10～12層が該当する。暗灰～茶褐色系の色調を呈する粘質土である。層中に白色微砂をラミナ状に含む。三群は13層が該当する。暗灰茶褐色砂質土で、鉄分、微砂ブロックを含む。四群は14～16層で、暗灰褐色～暗褐色の粘土である。特に16層は粘性が強い。炭や有機物の包含が認められる。

遺物は古墳時代初頭に属する土師器、土鍾が出土している。このうち手焙り形土器は蓋部、鉢部、底部のパーツに分離していたものの、一か所にまとまって出土した。出土遺物から古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝6・7（図12・35、図版12）

C地点中央東寄り、CN31～33区に位置する。二条が並行しており、溝6は北東側の溝7に切られる。調査区内で長さ約7mを検出した。北西から南東方向に走行し、両端部は調査区外へと延びている。検出面は＜6層＞である。溝6の検出上面の標高は0.6～0.65m、底面高は0.26～0.33mで、南東から北西へと下がる傾斜である。深さは0.32～0.34mである。残存する範囲では幅0.98mである。断面形はボウル状を呈する。溝7の検出上面の標高は0.6m、底面高は0.23～0.35mで、南東から北西へと下がる傾斜である。深さは0.25～0.37mである。幅は0.68～1.03m、断面形は平坦部がわずかではあるが、二段掘りを呈する。

埋土は溝6が7層、溝7が5層に分層される。溝6は砂質土を主とする埋土で、7・10・12層にはブロックの包含がみられる。溝7も同様に砂質土を主とする埋土で構成され、4層にはブロックの包含がみられる。

遺物は出土していない。検出層からともに古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝8（図12・13・36、図版13）

本溝は一部が調査区外や土層観察用土手にかかるため、連続的に検出・確認できていないが、平面的な位置関係および断面形、底面の標高などから、A地点北辺中央から東側、CO39～41区、CP・CQ36・37区に位置する

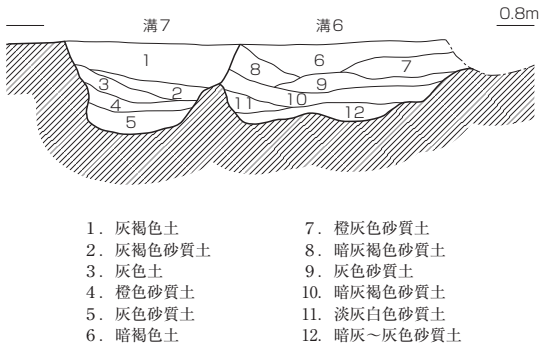


図35 溝6・7断面（縮尺1/30）

溝と、B地点中央を南北に走行、CN・CO40区に位置する溝が合流すると考える。また、A地点では、調査区中央と東側との間は上層遺構により失われているため、こちらも連続的に検出・確認できてはいないが、走行経路、底面高、断面形などから同一の溝と判断している。

調査区内で検出できた溝の長さは、A地点で約23m、B地点で約4mである。A地点北辺の西端部はさらに西に向かっており、調査区外へと延びている。調査区中央北辺では北壁に沿って東西方向を基調とした緩いカーブを描いており、一部は北壁に入り込んでいる。東側では、東西方向を基調とした軸線で北西から延びてきた溝が屈曲し、北北西－南南東の軸へと転じると、南に向かって徐々に浅くなり消失する。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.36～0.61m、底面高は0.24～0.34mで、A地点では南東から北西、東から西へと下がる傾斜、B地点では北から南へと下がる傾斜である。深さは0.04～0.31mである。

溝の掘り方は、A地点東側のCP・CQ36・37区では南～西に並行する溝14に切られ、北辺では北側溝で失われている。残存する溝幅は0.65～1.65mとなる。断面形は皿状を呈する。B地点では幅は1.25m、断面形は皿状で凹凸がみられる。

埋土は2層に分層される。1層が黒灰色粘質土、2層が黄褐色砂質土である。2層には粒状やブロック状の黒褐色粘土が包含されていることが観察されている。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

#### 溝9 (図12・13・37)

A地点北辺東半部、CP35～37区に位置する。調査区内で長さ約8mを検出した。北北西－南南東に直線的に走行する。東側は調査区外に延びる。西側は重複する溝10・11に切られ、それ以西では確認できなかった。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.41～0.45m、底面高は0.39～0.41mと差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.02～0.05mである。幅は0.29m、断面形は皿状を呈する。

埋土は底面付近に堆積した暗褐色粘質土が確認された。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

#### 溝10・11 (図12・13・38、図版13)

A地点北東部、CQ35・36、CP36・37区に位置する。調査区内で長さ約6mを検出した。溝10は西に並行する溝11に切られる。溝10は北西－南東方向を基調とするが、CP37区中央付近で屈曲点がみられる。東端は深度を減じ収束する。北側は調査区外へ延びるが、C地点に該当する溝がないこと、屈曲点の位置関係が周囲の溝と同じであることから、土層観察用土手から未調査域の範囲で屈曲し、北北西方向に延びるものと推測される。

溝11は北西－南東方向を基調とする。CP37区中央付近の側溝で屈曲点が失われているが、溝10の南西に並行する溝に連接すると考えられる。北端・東端ともに調査区外へ延びるが、

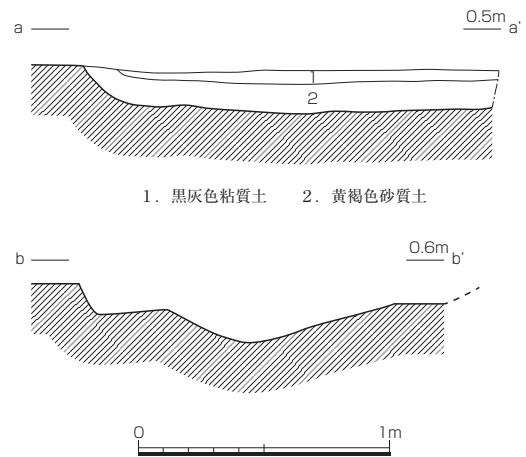


図36 溝8断面 (縮尺1/30)

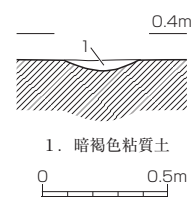


図37 溝9断面 (縮尺1/30)

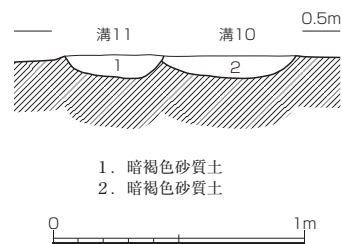


図38 溝10・11断面 (縮尺1/30)

北端は溝10と同様の理由により未調査域で屈曲し、北北西に延びるものと推測される。

検出面は＜7層＞である。溝10の検出上面の標高は0.39～0.42m、底面高は0.3～0.34mで差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.06～0.16mである。幅は0.26～0.53m、断面形は皿状や椀状を呈することが確認されている。溝11の検出上面の標高は0.34～0.43m、底面高は0.31～0.35mで、差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.04～0.11mである。幅は0.29～0.49m、断面形は皿状や椀状を呈することが確認されている。

埋土はともに1層のみ確認された。いずれも暗褐色砂質土で、鉄分の沈着、マンガンの凝集が認められる。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

#### 溝12・13（図12・13・39）

A地点北東部、CP37・CQ36・37区に位置する。溝12は調査区内で長さ8.3m、溝13は長さ約11mを検出した。溝12は南に並行する溝13に切られる。ともに北西－南東方向を基調とする。溝12は北西端、南東端ともに深さを減じながら収束、溝13は北西端では深さを減じながら収束するが、南東は調査区外へと延びる。検出面はいずれも＜7層＞である。溝12の検出上面の標高は0.34～0.44m、底面高は0.18～0.34mで、深さは0.1～0.16mである。幅は約0.5～0.7m、断面形は皿状を呈する。溝13の検出上面の標高は0.32～0.47m、底面高は0.18～0.26mで、深さは0.08～0.29mである。幅は約0.35～0.7mで、断面形は皿状～ボウル状を呈する。

溝12の埋土は褐色を呈する砂質土で鉄分の沈着がみられる。溝13は3層に分層される。灰～褐色の色調を呈する粘質土で、一部で鉄分の沈着が認められる。遺物は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器小片が出土している。

出土遺物から古墳時代初頭に属すると考えられる。

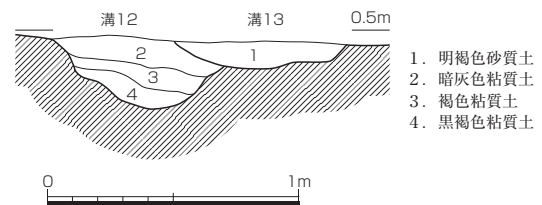


図39 溝12・13断面（縮尺1/30）

#### 溝14（図12・13・40）

A地点北東部、CO39・CP37・38・CQ36・37区に位置する。調査区内で長さ約21mを検出した。北～東に並行する溝8を切る。北西－南東方向を基調とする。南東端は深さを減じながら収束する。北西はA地点の調査区外へと向かうが、B地点では該当する溝は確認されておらず、両地点の土層観察用土手内や境界部のなかで収束している可能性もある。検出面は＜7層＞で、検出上面の標高は0.3～0.47m、底面高は0.2～0.29mで、深さは0.08～0.22mである。幅は0.36mで、断面形は椀状を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土で砂のブロックを含む。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

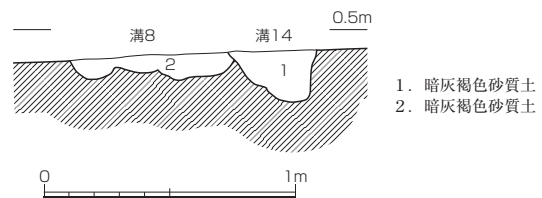


図40 溝14断面（縮尺1/30）

#### 溝15（図12・13・41、図版13）

A地点東部、CO～CRライン、35～42ラインで画される範囲において、高まりを取り囲むように掘削された溝である。調査区東側では、稠密に掘削される溝10～14の南側に沿って掘削される。これらの溝とは屈曲点の位置や、走行方向などの点で強い共通性がみられる。調査区北辺では、凸字状に入り込む調査区域外東辺土手に接する位置で大きく弧状にカーブし、高まりを画すように再び北西－南東方向に延びている。東辺ではCRライン側の掘り方、CSライン側の掘り方ともに調査区外へと延びる。

検出面は＜6層＞で、検出上面の標高は0.66～0.94m、底面高は0.51～0.62mで、深さは0.11～0.34mである。幅は1.05～1.8mで、断面形は皿状を呈する。

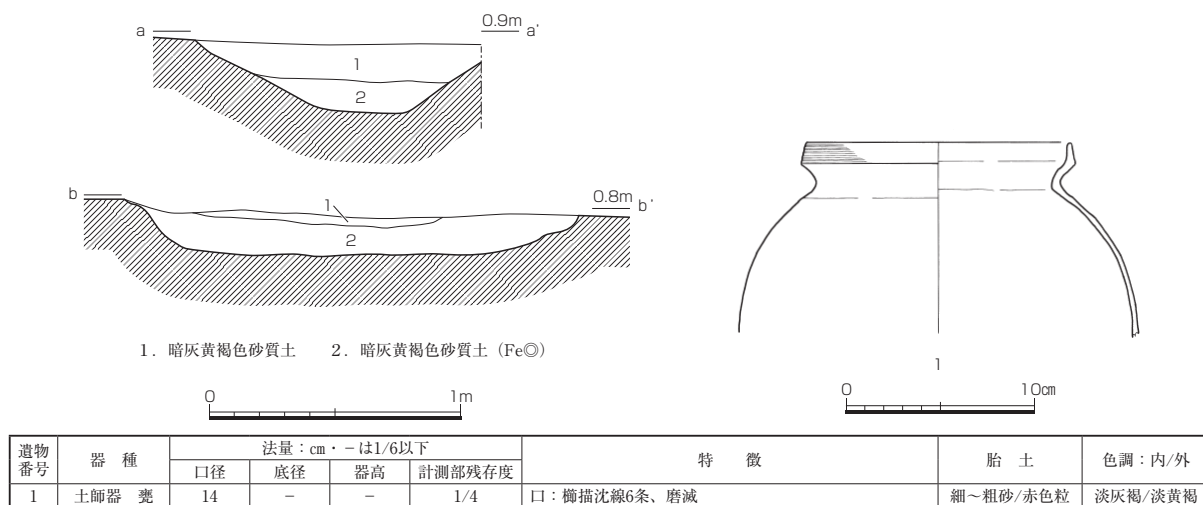


図41 溝15断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

各断面とも埋土は1～2層に分層される。高まり西側では上位に暗茶褐色土、下位に灰～灰褐色砂質土が堆積する。鉄分の沈着やブロックの包含が認められる。高まり西側では灰褐色の色調を呈する砂質土が主で、包含物はみられない。遺物は古墳時代初頭の土師器が出土している。

出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

#### 溝16 (図12・42、図版13)

A地点西側、41～43ライン間において南北方向に掘削される。調査区内では26.5mを検出した。南北とも調査区外へと延びる。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.22～0.72m、底面高は0.1～0.24mで、深さは0.1～0.55mである。南から北にむかって傾斜する。幅は約1.2～1.35mである。断面形はY字形を呈する。

埋土は6層に分層される。そのうち1～5層は灰褐色～褐色の色調を呈する砂質土、最下の6層は暗灰色粘土である。4層以外のすべての層に地山を起源とするブロックの包含が認められる。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

#### 溝17 (図12・43)

D地点を北西～南東方向に走行する。CO43・44区に位置する。上層の溝26と位置が重複しており、遺存状態は良くないが、調査区内では約9mを検出した。北西端、南東端とも調査区外へと延びる。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.74m、底面高は0.53mで、深さは0.21mである。北西から南東方向に下がる傾斜を有する。幅は0.3m以上で、断面形は椀状である。

埋土は3層に分層される。いずれも灰色を基調とする粘質土で、グライ化の影響による緑化もみられる。1層で粘土ブロック、2・3層で砂ブロックを多く含む。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

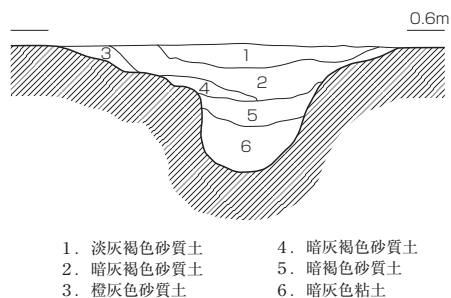


図42 溝16断面 (縮尺1/30)

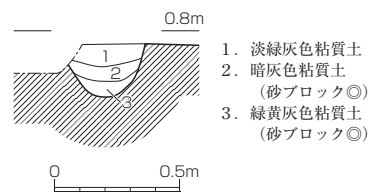


図43 溝17断面 (縮尺1/30)

## 6. 土器だまり

### 土器だまり 1 (図12・44～49、図版9・10・34～36)

調査区北西、CP43・44区に位置する。東側は側溝、北側は攪乱で失われている。＜5層＞で検出した。本地点は弥生時代中～後期の河道が埋没した位置にあたる。また、南側は幅広で深度の大きい溝で、古墳時代初頭に位置づけられる溝5に重複しており、溝5の埋没後に形成された、南西から北東にむかって下がる緩斜面のなかの窪地を利用したものとみられる。窪みの規模は、現状で南北4.05m、東西2.9m、深さ0.21mである。このうち、土器が集中するのは、現存部の南半および断面ライン以北では東寄りの約1／3の範囲である。形状をとどめた

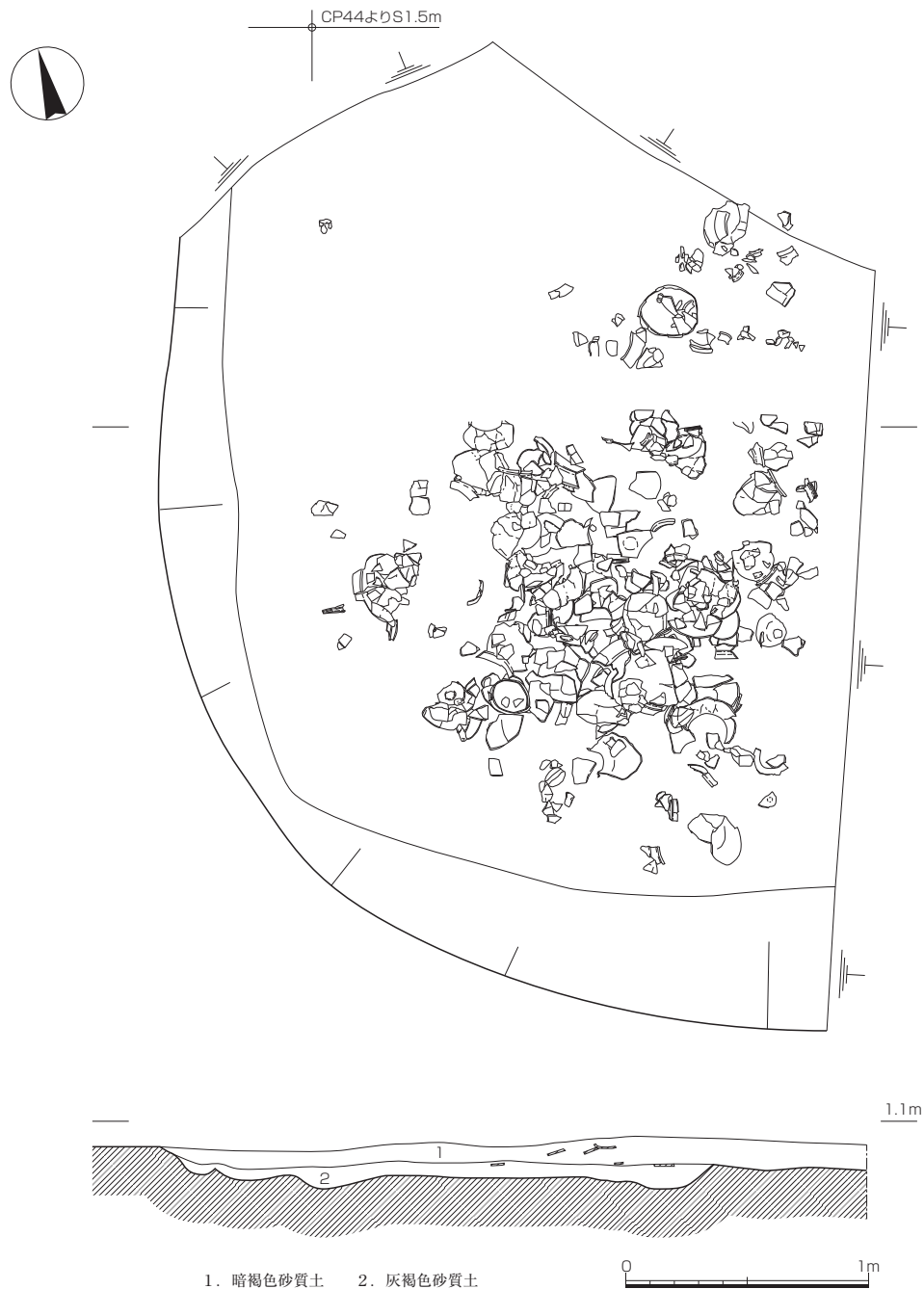
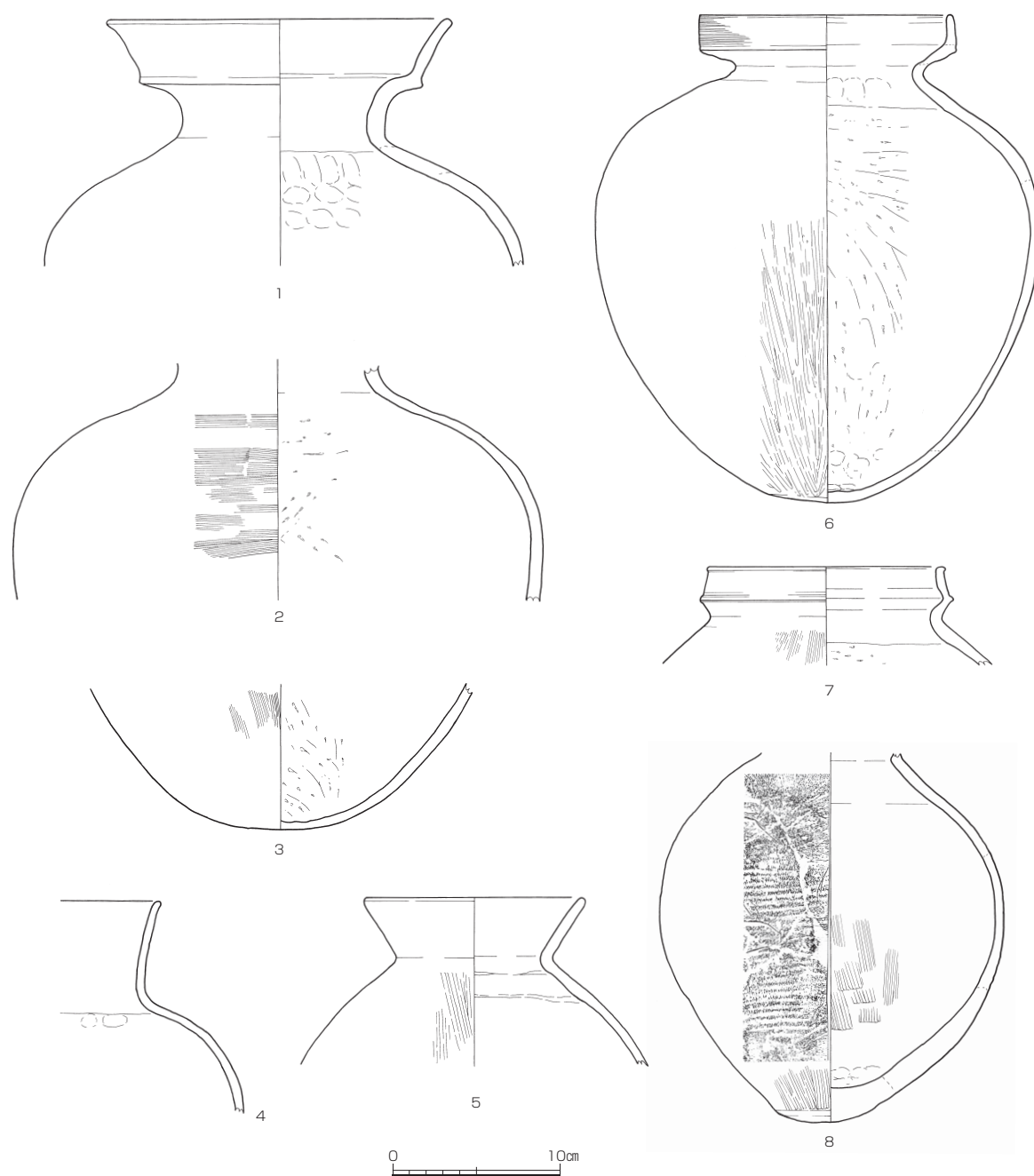


図44 土器だまり 1 (縮尺1/30)



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・－は1/6以下 |     |      |         | 特 徴                                 | 胎 土      | 色 調：内/外   |
|----------|-------|---------------|-----|------|---------|-------------------------------------|----------|-----------|
|          |       | 口径            | 底径  | 器高   | 計測部残存度  |                                     |          |           |
| 1        | 土師器 壺 | 20.6          | －   | －    | 1/2     | 磨減、内：胴部押圧・頸部ナデ、口：横ナデ・内面上半は橙色化       | 微砂/細砂    | 黄橙        |
| 2        | 土師器 壺 | －             | －   | －    | －       | 内：剥離顕著・甕ケズリ、外：ハケメ・頸部はナデ・剥離大・磨減      | 細砂       | 橙褐        |
| 3        | 土師器 壺 | －             | －   | －    | 1/1     | 内：甕ケズリ、外：浅いハケメ・ナデ・黒斑、底外：ナデ          | 細砂多      | 明褐/暗灰～黄灰褐 |
| 4        | 土師器 壺 | －             | －   | －    | －       | 磨減、内：灰白色の付着小粘土塊が点在、外：横位ハケメ、焼成不良？    | 微～細砂/角閃石 | 灰白～暗灰褐/橙褐 |
| 5        | 土師器 壺 | 13.2          | －   | －    | 1/4     | 磨減、内：甕ケズリ・粘土帯接合痕明瞭、外：ハケメ、口：剥離痕      | 微砂/角閃石   | 暗灰褐       |
| 6        | 土師器 壺 | 15.4          | 5.6 | 29.1 | 1/1～3/4 | 口：櫛描沈線10条以上、内底：押圧、外：甕ミガキ・黒斑         | 微砂/細砂    | 暗灰/淡黄灰褐   |
| 7        | 土師器 壺 | 14.2          | －   | －    | 1/5     | 内：甕ケズリ、外：ハケメ、口～頸部：横ナデ               | 微・細砂/角閃石 | 暗灰褐/黄褐    |
| 8        | 土師器 壺 | －             | 5.6 | －    | 1/2     | 内：ハケメ・押圧、外：タタキ・下端ハケ・肩部ナデ・黒斑・被熱・表面劣化 | 粗砂/礫多    | 黒灰/橙褐～暗褐  |

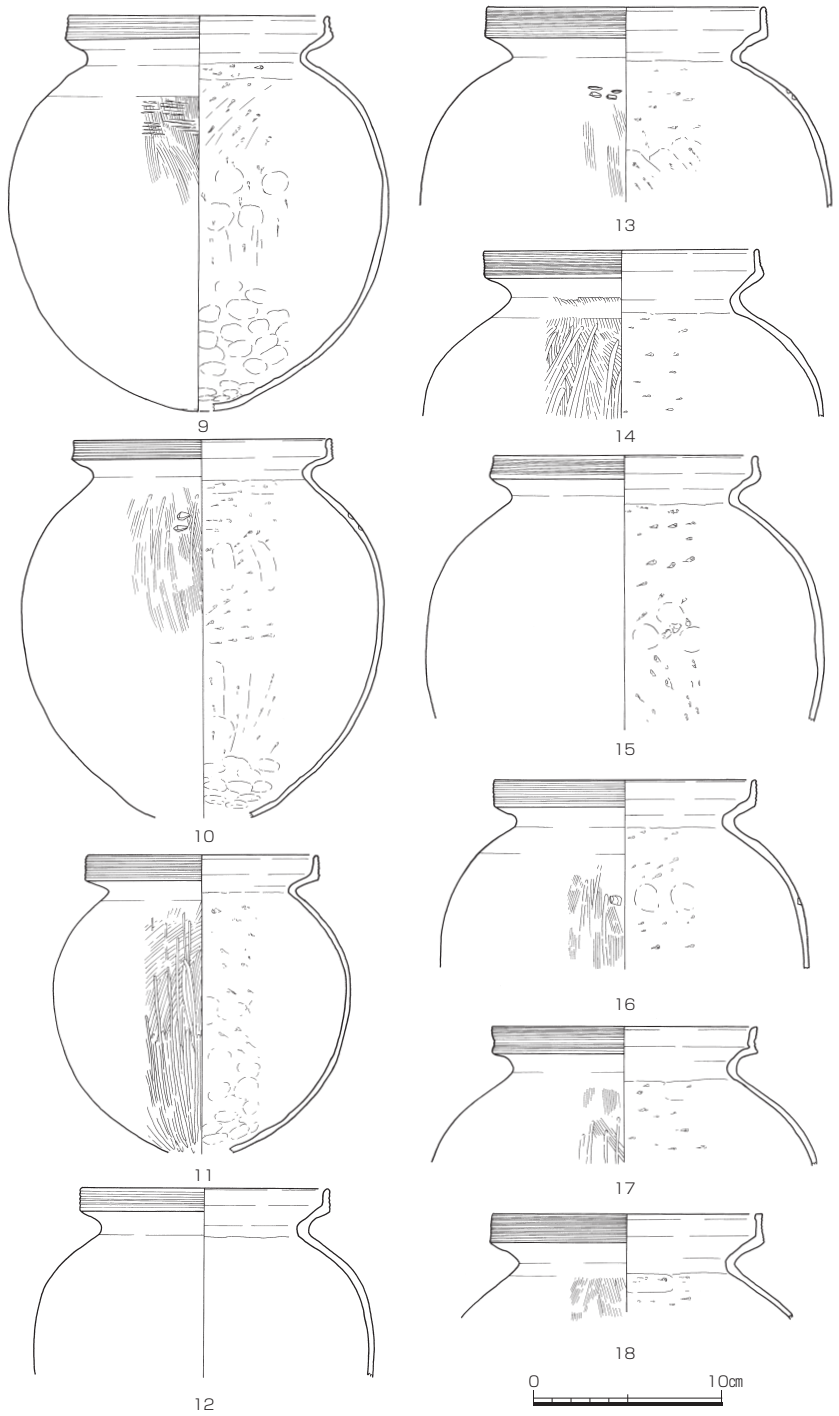
図45 土器だまり1出土遺物(1) (縮尺1/4)

大型部位片をのこす個体が多くみられることから、原位置をほぼ保っていると考えられる。また、幅約0.3～0.4mの東側溝および東側溝を隔てた東壁面では顕著な土器の包含は認められていない。北側の攪乱からは、本来、本土器だまりに包含されていたとみられる土器の出土はわずかであった。以上から、図44に示した土器検出状況が、土器が置かれた元来の範囲をほぼ示していると考ええる。この場合、土器分布域の規模は、南北約2.7m、東西約2.2mとなる。

さらに、この範囲のなかでも土器分布には粗密がみられる。図44断面において一段深く窪む2層の範囲では、複数の土器が重なり合った、密な状態で検出されている。一方、その周縁部では平面的にも垂直分布においても密度が低い。

器種別の分布については、特定の器種が偏在するなどの事象は特に認められなかった。

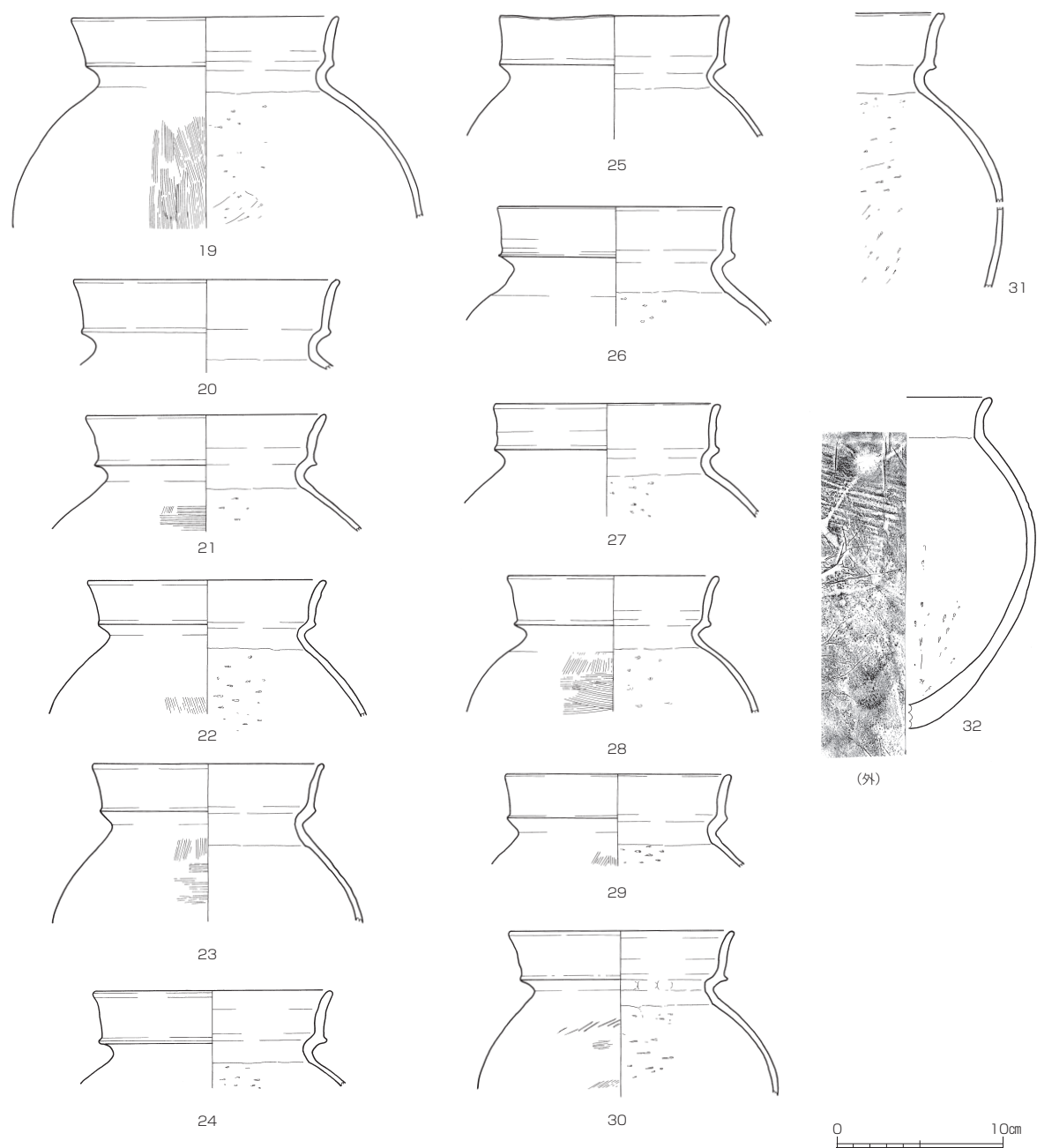
遺物はコンテナ12箱が出土した。土器の器種としては、壺、甕、高杯、鉢、器台、製塩土器、手焙り形土器が確認された。土器以外では、石錘



| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・(推定値)・－は1/6以下 |     |        |           | 特 徴                                   | 胎 土       | 色 調：内/外  |
|------|-------|---------------------|-----|--------|-----------|---------------------------------------|-----------|----------|
|      |       | 口径                  | 底径  | 器高     | 計測部残存度    |                                       |           |          |
| 9    | 土師器 甕 | 13.9                | 3.2 | 21     | 口1/2、胴3/4 | 口：櫛描沈線4条、内底：煤、外：ハケメ・肩部タタキ痕・磨減・煤・変色    | 細砂/角閃石多   | 橙褐/明褐    |
| 10   | 土師器 甕 | 13.6                | —   | —      | 口3/4、胴1/2 | 口：櫛描沈線6条、外：ハケ+ミガキ(上半)・刺突文1か所2点・煤・黒斑   | 細砂/角閃石多   | 灰黒/明橙褐   |
| 11   | 土師器 甕 | 13                  | —   | (16.2) | 1/3       | 口：櫛描沈線7条、外：ハケ+ミガキ(上半)・煤・変色            | 細砂/礫・角閃石多 | 淡灰褐      |
| 12   | 土師器 甕 | 13.2                | —   | —      | 1/2       | 口：櫛描沈線4条、内：篋ケズリ、外：煤、磨減、赤色粒多い          | 細砂/礫・角閃石多 | 淡橙褐      |
| 13   | 土師器 甕 | 14.8                | —   | —      | 1/4       | 口：櫛描沈線10条、内：篋ケズリ、外：ハケ・刺突文1か所4点・煤、磨減   | 細砂/礫・角閃石多 | 灰黒/橙褐～灰褐 |
| 14   | 土師器 甕 | 14.4                | —   | —      | 1/2       | 口：櫛描沈線8条・工具痕、内：篋ケズリ、外：ハケメ・篋ミガキ        | 細砂/礫・角閃石多 | 明褐       |
| 15   | 土師器 甕 | 14                  | —   | —      | 1/4       | 口：櫛描沈線6条、内：篋ケズリ・一部押圧、外：磨減・被熱          | 細砂/礫・角閃石  | 淡(橙)灰褐   |
| 16   | 土師器 甕 | 14                  | —   | —      | 口1/4、胴1/2 | 口：櫛描沈線6条、内：ケズリ・押圧、外：ハケ・ミガキ・煤・刺突文1か所1点 | 細砂/礫・角閃石多 | 淡橙白～淡灰褐  |
| 17   | 土師器 甕 | 14                  | —   | —      | 1/2       | 口：櫛描沈線8条、内：篋ケズリ、外：ハケメ・篋ミガキ・煤少         | 細砂/礫・角閃石多 | 淡灰褐      |
| 18   | 土師器 甕 | 14.4                | —   | —      | 1/3       | 口：櫛描沈線11条、内：篋ケズリ、外：ハケメ                | 細砂/礫・角閃石多 | 淡黄灰褐/橙褐  |

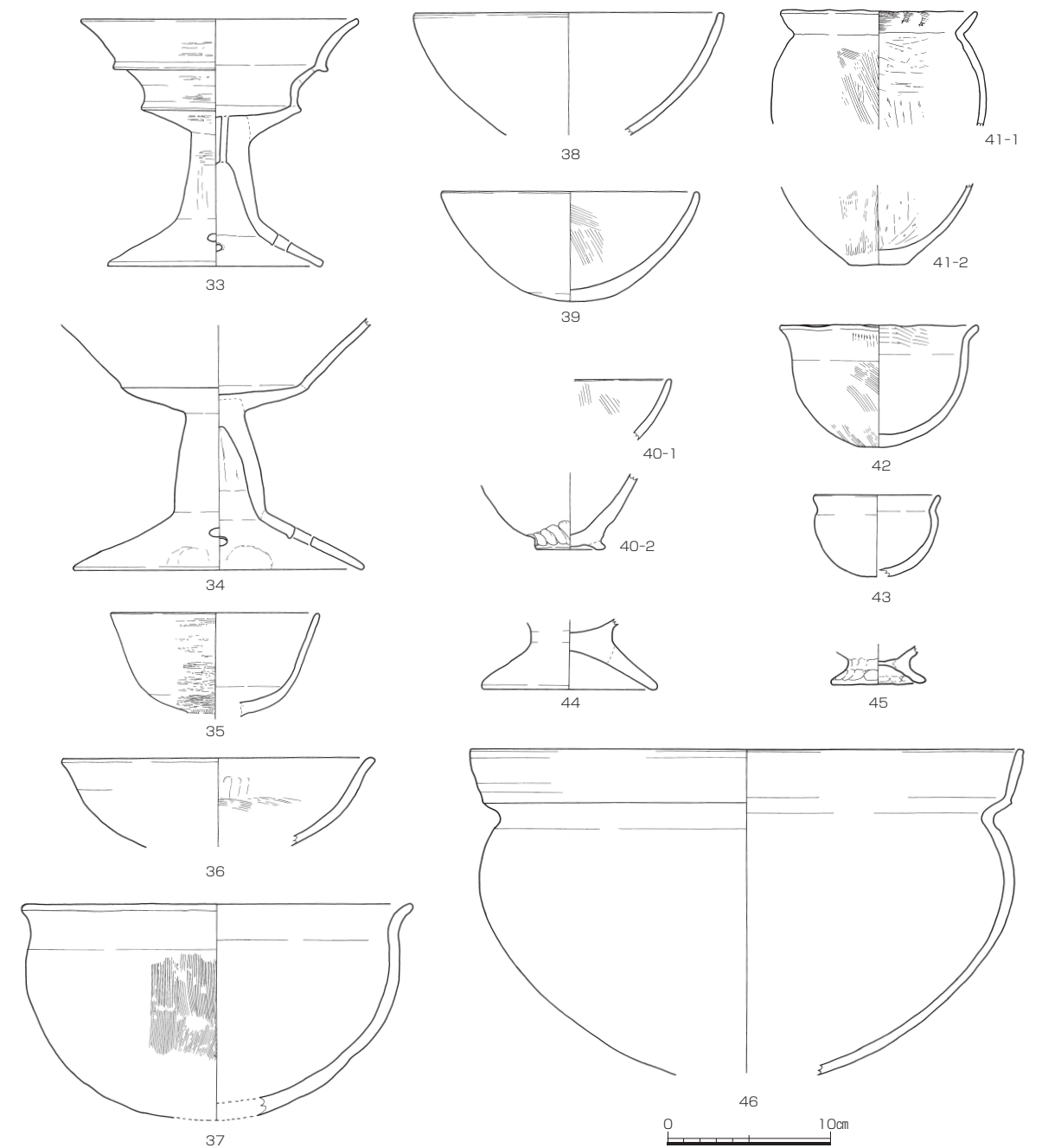
図46 土器だまり 1 出土遺物(2) (縮尺1/4)

調査の記録



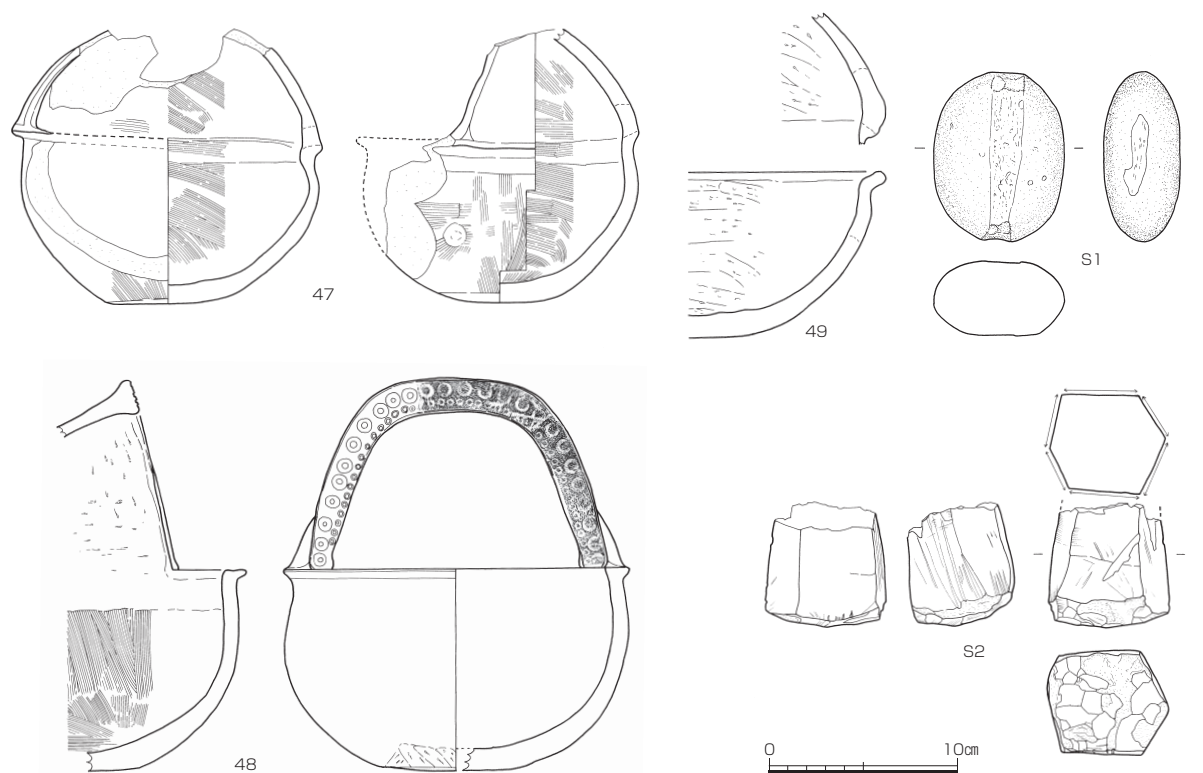
| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |    |    |            | 特 徴                                | 胎 土      | 色 調：内/外   |
|------|-------|---------------------|----|----|------------|------------------------------------|----------|-----------|
|      |       | 口径                  | 底径 | 器高 | 計測部残存度     |                                    |          |           |
| 19   | 土師器 甕 | 16.1                | —  | —  | 1/2        | 口縁歪み、内：篋ケズリ、外：縦位ハケメ、磨減             | 細砂/角閃石   | 淡橙褐/橙褐～黄褐 |
| 20   | 土師器 甕 | 16                  | —  | —  | 1/4        | 口：横ナデ、磨減                           | 微砂/細砂多   | 明橙        |
| 21   | 土師器 甕 | 15                  | —  | —  | 1/5+       | 外：ハケメ(縦・横)、内外：表面剥離顕著、外：黒斑、口径不安定、磨減 | 微～細砂/角閃石 | 明橙褐       |
| 22   | 土師器 甕 | 14.3                | —  | —  | 1/4        | 内：篋ケズリ、外：ハケメ、口外・頸内：剥離痕多、磨減、口外：黒斑   | 微～細砂/角閃石 | 暗橙褐～灰橙褐   |
| 23   | 土師器 甕 | 14                  | —  | —  | 3/4        | 外：ハケメ(縦・横)、磨減                      | 微～細砂/角閃石 | 橙褐～淡灰褐    |
| 24   | 土師器 甕 | 14.3                | —  | —  | 1/3+1/4    | 内：篋ケズリ、口～肩部外：横ナデ                   | 微～細砂/角閃石 | 淡橙灰褐      |
| 25   | 土師器 甕 | 12.8～14             | —  | —  | 口1/1、胴1/4  | 口：歪み大、磨減、灰色強い、焼成不良？                | 微～細砂/角閃石 | 淡(橙)灰     |
| 26   | 土師器 甕 | 14.2                | —  | —  | 口1/2、胴1/3  | 内：篋ケズリ、口：強い横ナデ、歪み                  | 微～細砂/角閃石 | 淡橙～淡黄褐    |
| 27   | 土師器 甕 | 13.2～13.7           | —  | —  | 口1/1、胴1/4+ | 内：篋ケズリ、磨減                          | 微～細砂/角閃石 | 淡黄褐       |
| 28   | 土師器 甕 | 12.6                | —  | —  | —          | 内：篋ケズリ、外：ハケメ(縦・横)・煤、口外：黒斑、磨減       | 微～細砂/角閃石 | 淡橙白～淡灰褐   |
| 29   | 土師器 甕 | 13.6                | —  | —  | 1/5+       | 内：篋ケズリ、外：ハケメ(縦)、口径不安定              | 微～細砂/角閃石 | 淡黄褐       |
| 30   | 土師器 甕 | 〈13.45〉             | —  | —  | 口1/1、胴1/4  | 内：篋ケズリ、外：横ハケメ僅少・肩部に線刻10数条、磨減       | 細砂/角閃石   | 淡橙褐       |
| 31   | 土師器 甕 | —                   | —  | —  | —          | 内：篋ケズリ、外：下半ハケメ(横・縦)・黒斑             | 微～細砂/角閃石 | 橙褐～淡灰褐    |
| 32   | 土師器 甕 | —                   | —  | 20 | —          | 内下半：篋ケズリ、外：上半はタタキ・下半は被熱・磨減・表面劣化    | 微砂/細～粗砂  | 茶褐        |

図47 土器だまり 1 出土遺物(3) (縮尺1/4)



| 遺物<br>番号 | 器 種      | 法量：cm・（推定値）・－は1/6以下 |       |        |             | 特 徴                                 | 胎 土      | 色 調：内/外    |
|----------|----------|---------------------|-------|--------|-------------|-------------------------------------|----------|------------|
|          |          | 口径                  | 底径    | 器高     | 計測部残存度      |                                     |          |            |
| 33       | 土師器 高杯   | 15.1                | 13.1  | 15.2   | 1/5～1/1(脚柱) | 外：篋ミガキ(横位・細い)、丁寧な仕上がり、磨滅            | 微砂       | 橙褐～暗橙褐     |
| 34       | 土師器 高杯   | —                   | 17.9  | —      | 1/2～1/1(脚柱) | 脚堀内外：粘土補修痕、円孔4か所、脚頭部接合面に刻み目、磨滅      | 細砂多/角閃石多 | 暗灰～橙褐      |
| 35       | 土師器 高杯   | 12.8                | —     | —      | 口－、受部1/2    | 丁寧な仕上がり、外：篋ミガキ(浅く細い)・脚柱接合付近：ハケメ     | 微砂/細砂    | 黄褐         |
| 36       | 土師器 高杯   | 19.2                | —     | —      | 1/4         | 内下半：ハケメ+ナデ、内上半：縦位の工具痕、外：調整不明・黒斑     | 微砂/細砂少   | 橙褐(断)暗灰    |
| 37       | 土師器 鉢    | 24                  | —     | (13.1) | 口1/2、胴3/4   | 内：剥離痕多(特に底部)、外底：被熱変色・剥落顕著、外上半：剥離痕   | 微砂       | 明黄褐/暗灰～黄褐  |
| 38       | 土師器 鉢    | 19.1                | —     | —      | 1/4         | 外下半：篋ケズリ痕、磨滅                        | 微砂       | 明黄褐/暗橙褐    |
| 39       | 土師器 鉢    | 15.8                | 5～5.4 | 6.8    | 口1/2、底1/1   | 内：ナデ+ハケメ、外：ナデ？・黒斑、口：剥離痕、磨滅          | 微砂       | 明橙褐/暗灰～淡灰褐 |
| 40-1     | 土師器 小形鉢  | (12)                | —     | —      | —           | 内：ハケメ僅少+ナデ、外：押圧・亀裂多、口径不明確           | 微砂       | 淡橙褐(断)黒灰   |
| 40-2     | 土師器 小形鉢  | —                   | 4.4   | —      | 1/1         | 外：ナデ・亀裂・下端に押圧(深)、外底：ナデ・周辺に黒斑、磨滅、歪み大 | 微砂       | 淡黄灰(断)黒灰   |
| 41-1     | 土師器 小形鉢  | (12)                | —     | —      | —           | 内：篋ケズリ、外：浅いハケメ痕、口：ハケメ+押圧、口径不明確      | 微砂       | 明橙褐        |
| 41-2     | 土師器 小形鉢  | —                   | 3.4   | —      | 1/2         | 内：篋ケズリ、外：浅いハケメ痕                     | 微砂       | 明橙褐        |
| 42       | 土師器 鉢    | 11.1～12             | 2.4   | 7.5    | 1/1         | 内：ナデ、外：ハケメ+ナデ・黒斑、口：内外ハケメ、内：種子圧痕？    | 微砂       | 明橙褐        |
| 43       | 土師器 小形鉢  | 7.8                 | —     | (5)    | —           | 磨滅、底部欠損で不明                          | 微砂       | 明橙褐～淡橙白    |
| 44       | 土師器 脚台   | —                   | 10.8  | —      | 2/3         | 磨滅、内：強いナデ、外：剥離                      | 微砂       | 橙褐～黄褐      |
| 45       | 土師器 製塩土器 | —                   | 5.8   | —      | 1/2         | 内：剥離、外：押圧・ナデ、底外：煤、全体被熱変色            | 細砂       | 暗赤褐        |
| 46       | 土師器 鉢    | 34                  | —     | (20)   | 1/3         | 磨滅、外：黒斑                             | 細砂       | 橙褐～淡灰褐     |

図48 土器だまりり 1 出土遺物(4) (縮尺1/4)



| 遺物番号 | 器種            | 法量：cm・(推定値)・－は1/6以下 |     |      |                        | 特 徴                                                                         | 胎 土           | 色調：内/外         |
|------|---------------|---------------------|-----|------|------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|---------------|----------------|
|      |               | 口径                  | 底径  | 器高   | 計測部残存度                 |                                                                             |               |                |
| 47   | 土師器<br>手焙り形土器 | 横幅・奥行<br>(15)～16.5  | 6.7 | (15) | 前面側1/2、<br>蓋頂部欠損       | 内外：ハケメ・ナデ、底部ナデ、鉢外：補修痕・黒斑、うろこ状の剥離痕多、<br>開口部の肥厚はなく丸く収束                        | 微砂/細砂         | 灰褐/暗褐～<br>暗橙褐  |
| 48   | 土師器<br>手焙り形土器 | 横幅18.4              | 7   | 20.8 | 開口部2/3、蓋部<br>1/5、鉢部1/2 | 開口部：拡張・竹管文(大小2段)、内：鉢部ハケ・蓋部ケズリ、外：剥離(大)<br>顕著・鉢下端ケズリ・底周辺に黒斑(剥離面に及ぶ)・被熱、背面側欠損大 | 微砂/細砂・<br>雲母？ | 黄褐/淡黄～<br>淡橙白  |
| 49   | 土師器<br>手焙り形土器 | －                   | 7   | －    | 底2/3、他は－               | 鉢内：ケズリ、鉢外：ナデ・剥離痕大・下半～底に黒斑、蓋内：ケズリ、蓋<br>外：ナデ・剥離痕大・黒斑、開口部は肥厚せず小さな面を有す・被熱       | 細砂            | 暗黄褐/暗褐<br>～淡橙白 |

| 遺物番号 | 器種 | (残存)長：cm | (残存)最大幅：cm | (残存)最大厚：cm | 重量：g  | 残存状況 | 石 材 | 特 徴                             |
|------|----|----------|------------|------------|-------|------|-----|---------------------------------|
| S 1  | 石錘 | 4        | 10         | 6.9        | 381.1 | 1/1  | 安山岩 | 長軸方向に敲打による溝が巡る(上下端は打欠き)、側面にも敲打痕 |
| S 2  | 砥石 | (5.4)    | 6.4        | 6.3        | 281.4 | 一部   | 流紋岩 | 6角柱を呈す、6面とも研磨面、下面には成形痕残る        |

図49 土器だまり 1 出土遺物(5) (縮尺1/4)

1、砥石 1 が認められた。

全体的に甕の比率が高いこと、搬入土器が多くみられることが特徴である。なかでも甕では山陰系（図46－19～31）のものが吉備系のものと同程度含まれること、手焙り形土器では特徴や胎土の異なる個体がみられることが注意される。

本土器だまりの時期は、出土遺物より古墳時代初頭と位置づけられる。

### 第 3 節 古代の遺構・遺物

#### 1. 概要

古代の遺構として、A地点で溝 9 条、耕作痕と考えられる小溝群を検出した。他の地点では当該期の遺構は検出されなかった。溝の検出面は＜5 層＞・＜5 層下面＞、小溝群は＜5 層＞である。なお、遺構の時期比定について、遺構出土遺物が飛鳥時代の所産であること、遺物の出土はないが、飛鳥時代の遺物を包含している溝と軸

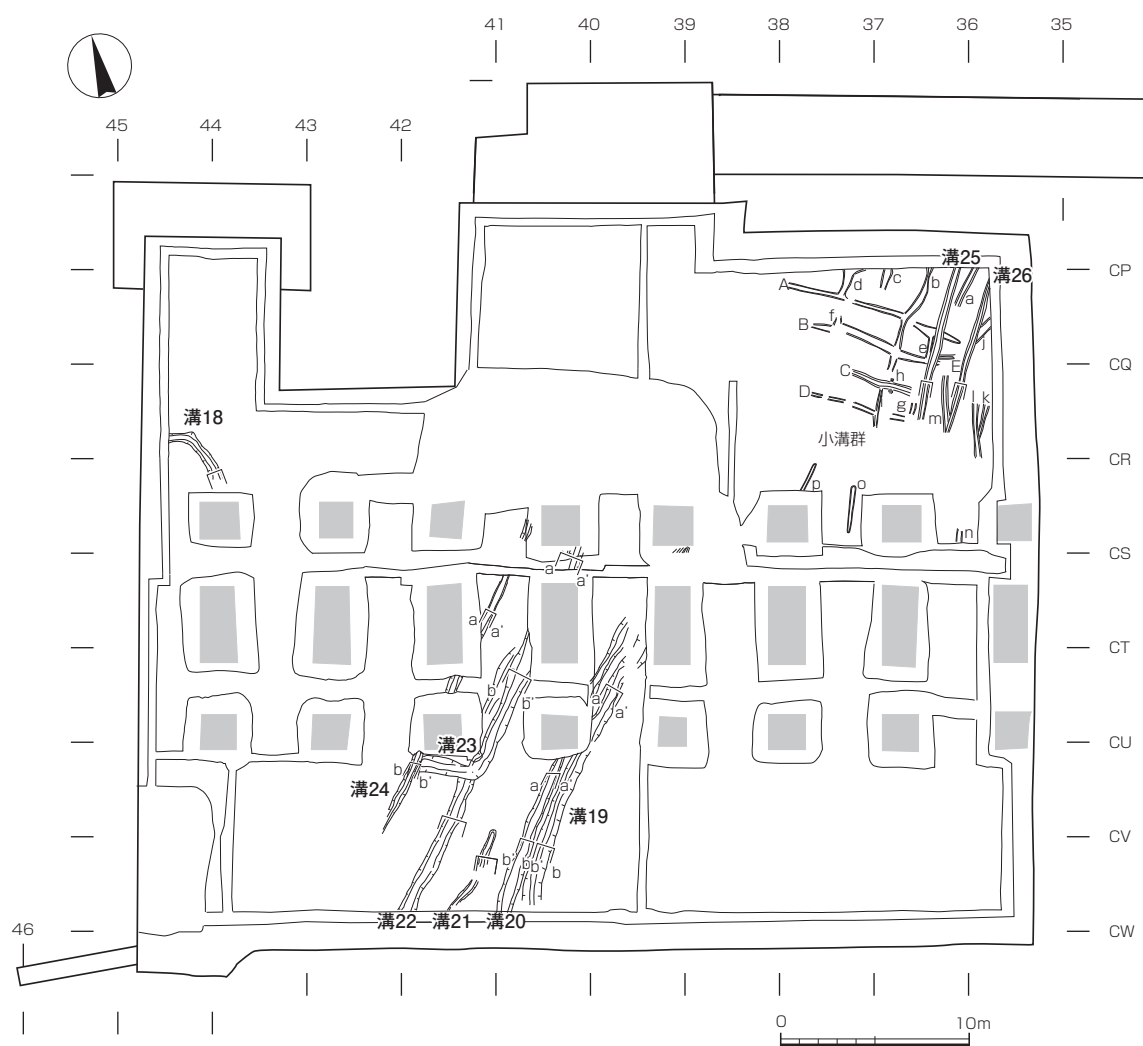


図50 古代の遺構全体図（縮尺1/400）

線の方位を共有する溝については、高い関係性を有すると考えられることから、同時期の遺構であると推定し、古代でも飛鳥時代に位置づけて報告する。

溝はA地点南半中央部で北東－南西方向に主軸方向を揃える6条（溝19～24）、北東部で北東－南西方向に主軸線を揃えて平行する2条（溝25・26）と、西辺中央で曲線的に掘削された1条（溝18）がある。小溝群は地形の低いA地点北東部で検出した。南半中央部の溝群の主軸方向はN40°～45°Eである。耕作痕と考えられる小溝群の向きもこれらの溝群と共通する。また、主軸方向N35°～40°Eに掘削された溝25・26は1.5～1.8mの間隔で平行する溝であり、道の側溝の可能性もある。これらの溝の軸線の方位は、正方位から時計回りに約15°回転した軸におおむね合うとされる鹿田地区の中世の地割とは異なっている。これらの遺構の志向する方角が土地の区画と有意な関係性にあるとすれば、中世以前の土地区画の原理を探るうえで有用なデータとなる。

当該期の遺構は、鹿田地区北半の第1・2次調査地点で住居等が、第23次調査地点で溝があるが、周辺調査区では第9・11次調査で水田畦畔がわずかに検出されているのみであった。本調査地点で検出した耕作痕と考えられる小溝群により、鹿田遺跡の南部が当該期には耕作地として利用されていたことを示唆する新たな資料が得られたといえる。

## 2. 溝

### 溝18 (図50・51、図版14)

A地点北西部、CQ・CR44区に位置する。屈曲点を挟み、西半は東西、東半は北西－南東方向を基調とする。調査区内で長さ約3.5mを検出した。西端は調査区外へと延びる。攪乱に向かう南東端は、攪乱以南では検出されず、消失しているか収束しているものとみられる。検出層は<5層下面>で、検出上面の標高は1.02～1.08m、底面高は0.82～0.92mで、深さは0.16～0.21mである。底面高の傾斜は、北西から南東方向に下っている。幅は0.59mで、断面形はボウル状を呈する。

埋土のうち、1層は灰や焼土塊を含む淡黒灰色土で、土器を包含し、2層は灰褐色砂質土で、ブロックを含む。遺物は土師器碗・高杯、製塩土器が出土した。出土遺物から、飛鳥時代に属すると考えられる。

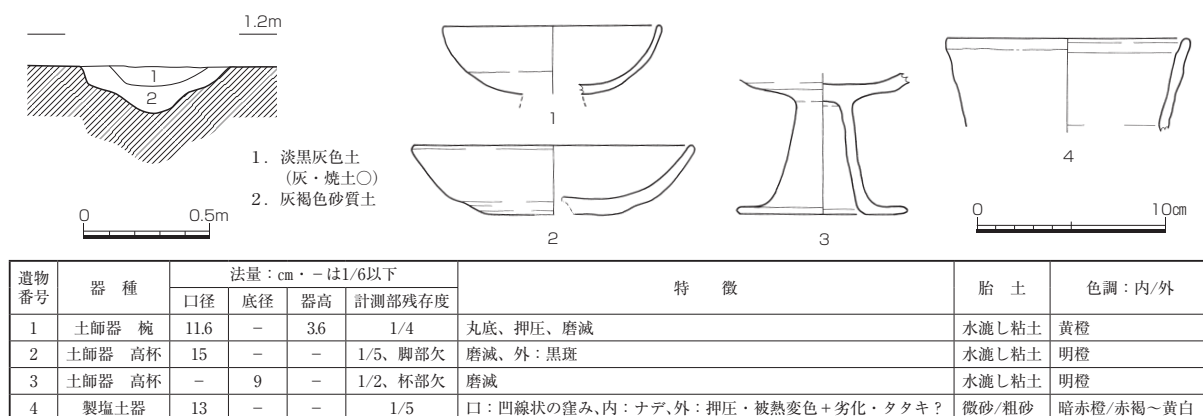


図51 溝18・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

### 溝19 (図50・52・53、図版14・36)

A地点南半中央部、CR39～CV40区に位置する。溝の軸線方向はN40°Eである。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の関係にある二条の溝が再掘削により並行している状況が観察されている。ここでは古段階を溝19a、新段階を溝19bとして報告する。

西側を並行する溝20に切られる。調査区内で長さ約21mを検出した。北側は攪乱以北への延びは確認されず、南側は調査区外へと延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.93～1.17m、底面高は0.56～0.78mで、深さは0.16～0.48mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.68mで、断面形は碗状、逆台形を呈する。

a-a'断面では溝19aは2層、溝19bは3層に分層され、b-b'断面では溝19aは3層、溝19bは1層に分層される。灰褐色の色調を基調とした埋土で、砂質を帯びる部分はあるが、粘性を示す埋土はない。溝19aはレンズ状の堆積状況を示す。溝19bはa-a'断面の2層がブロック状の堆積である可能性もあるが、基本的にはレンズ状の堆積状況であると考えられる。

遺物は須恵器脚付長頸壺 (図53-1)、須恵器大甕片 (同図-2) が溝底部から法面にかけての範囲にまとまって出土した。脚付長頸壺は脚

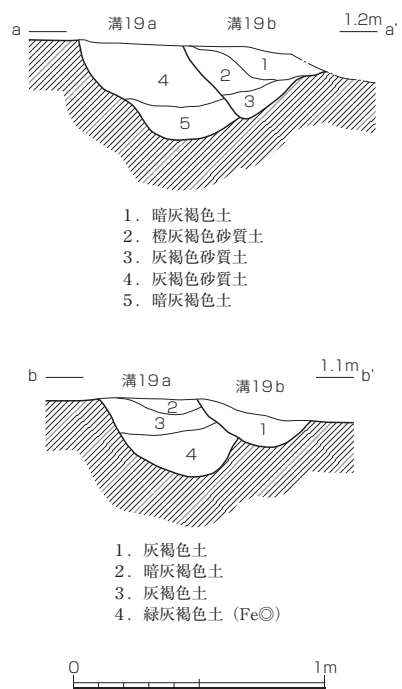


図52 溝19断面 (縮尺1/30)

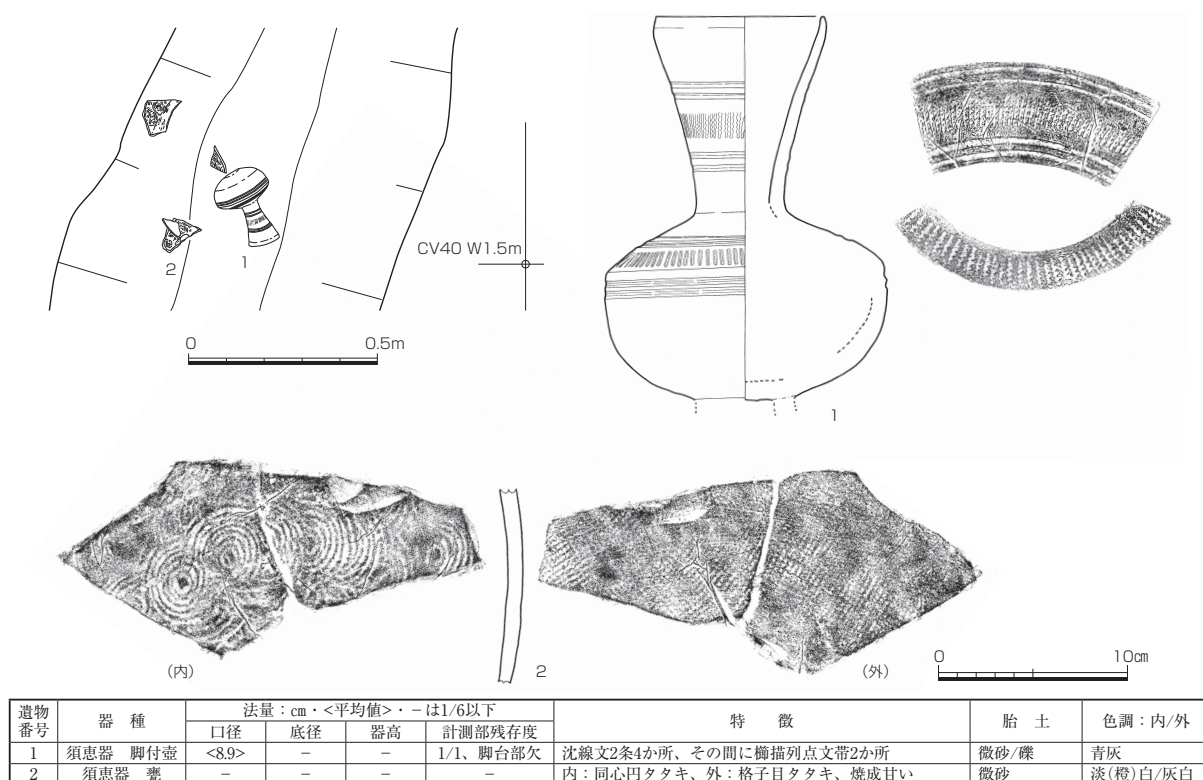


図53 溝19遺物出土状況・出土遺物（縮尺1/4・1/20）

部を欠くものの、それ以上の部位はほぼ完形である。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

#### 溝20（図50・54）

A地点南半中央部、CS39～CV40区に位置する。溝の軸線方向はN39°Eである。東側を並行する溝19を切る。調査区内で長さ約18mを検出した。北側は攪乱以北への伸びは確認されず、南側は調査区外へと延びる。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の関係にある二条の溝が再掘削により並行している状況が観察されている。ここでは古段階を溝20a、新段階を溝20bとして報告する。

検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.91～1.17m、底面高は0.66～0.89mで、深さは0.17～0.36mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.53～0.63mで、断面形は20a、20bともに碗状、逆台形を呈する。埋土は溝20aは3層、溝20bは2層に分層される。灰褐色の色調を基調とし、過半の層でブロックの包含がみられる。各層ともレンズ状の堆積を示す。

遺物は土師器高杯・甕が出土した。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

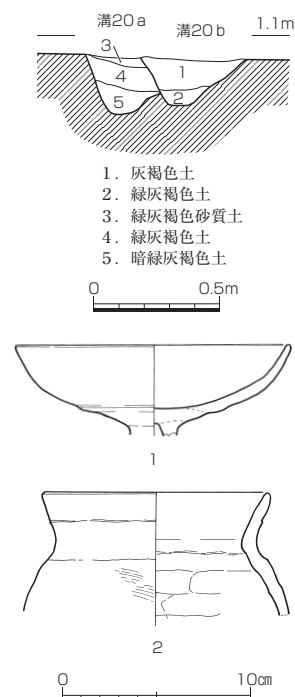


図54 溝20断面・出土遺物（縮尺1/4・1/30）

## 溝21 (図50・55)

A地点南半中央部、CU・CV41区に位置する。溝の軸線方向はN39°Eである。調査区内で長さ約5mを検出した。浅い溝であり、北側は消失しているものとみられる。南側は調査区外へ延びる。検出層は<5層下面>で、検出上面の標高は0.99~1.05m、底面高は0.88~0.99mで、深さは0.23mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.4mで、断面形はボウル状を呈する。

埋土は3層に分層される。褐色系の砂質土で構成され、色調の明暗や微砂の包含で分層される。

遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代に属すると推測される。

## 溝22 (図50・56、図版15)

A地点南半中央部、CS40~CV41区に位置する。溝の軸線方向はN37°Eである。調査区内で長さ約17mを検出した。東に並行する溝24に切られる。北側は攪乱で消失している。南側は調査区外へ延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.9~1.07m、底面高は0.71~0.78mで、深さは0.26~0.3mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.53~0.69mで、断面形はボウル状、逆台形を呈する。

埋土は4層に分層される。灰褐色を基調とする埋土で、一部は砂質を帯びる。1・3層にはブロックが包含される。

遺物は古墳時代初頭の土師器小片少量が出土したが、混入と考えられる。溝の走行方向から飛鳥時代に属すると推測される。

## 溝23 (図50・57、図版15)

A地点南半中央部、CR40~CU41区に位置する。屈曲点を挟んで、北北東-南南西方向、東西方向に走行する。溝の軸線方向は、北北東-南南西方向がN40°E、東西方向が溝の軸線方向はN110°Eである。調査区内で長さ約17mを検出した。西に並行する溝23を切る。北側は攪乱で消失している。西側は溝24に切られ、それ以西は検出されていない。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.97~1.19m、底面高は0.64~0.99mで、深さは0.16~0.37mである。底面高の傾斜は北東から南西方向に下がっている。幅は0.75~1.13mで、断面形は碗状を呈する。

a-a'断面では埋土は4層に分層される。灰褐色~褐色の砂質土で、2層には砂ブロックの包含がみられる。1・3・4層はレンズ状に堆積するが、2層は3層を切り込む形となっている。b-b'断面では埋土は9層に分層される。2・3層以外は灰褐色~茶褐色の砂質土でブロックを包含するものが多い。2層は炭を包含する灰褐色土である。3層は灰褐色砂で、レベルではa-a'断面で砂ブロックを包含する2層に対応するものとみられる。

遺物は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器小片が出土している。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

## 溝24 (図50・58、図版15)

A地点南半中央部、CR40~CU42区に位置する。溝の軸線方向はN41°Eである。東西に延びる溝23を切る。調査区内で長さ約19

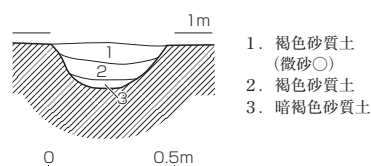


図55 溝21断面 (縮尺1/30)

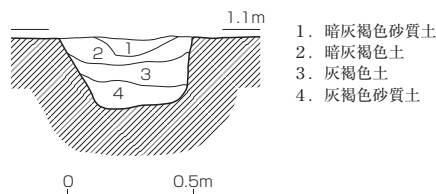


図56 溝22断面 (縮尺1/30)

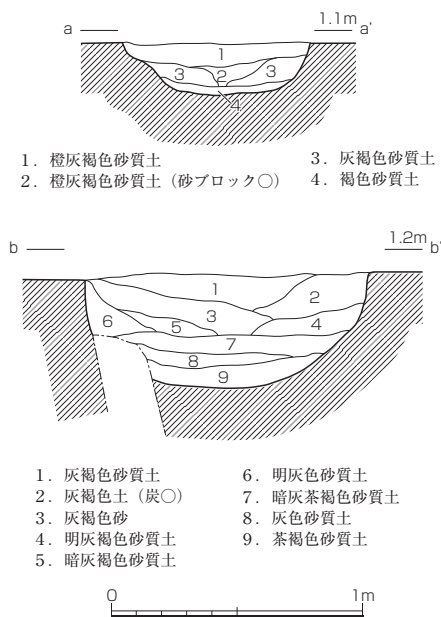


図57 溝23断面 (縮尺1/30)

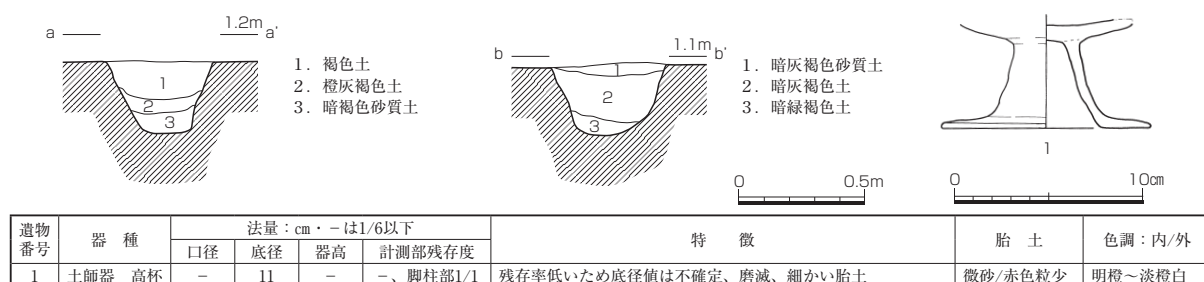


図58 溝24断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

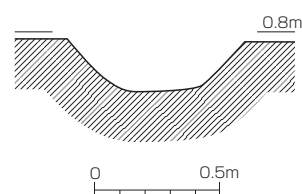
mを検出した。検出範囲の北側は攪乱、南側は上層遺構により消失している。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.01~1.12m、底面高は0.7~0.84mで、深さは0.17~0.38mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.4~0.52mで、断面形は椀状、逆台形を呈する。埋土は3層に分層される。各層の厚さに差があるが、いずれもレンズ状堆積を示す。褐色~灰褐色土が主体でブロックを含む。

遺物は土師器高杯が出土した。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

#### 溝25 (図50・59、図版15)

A地点北東、CP・CQ36区に位置する。<5層>で検出した。溝の軸線方向はN35°Eで、調査区内で長さ約8.3mが確認された。北側は調査区外へと延びるが、C地点では確認されなかった。南側は深さを減じて消失する。他遺構との関係では、小溝群を切り、東の溝26とは1.5~1.8mの間隔で平行する。検出面の標高は0.78m、底面高0.57m、深さ0.21mである。底面高は南南西から北北東に下がる。幅は約0.7mで、断面形はボウル状を呈する。

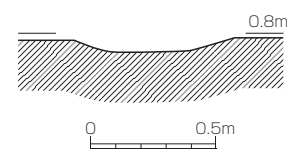
遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代の所産と推測する。

図59 溝25断面  
(縮尺1/30)

#### 溝26 (図50・60、図版15)

A地点北東、CP35、CP・CQ36区に位置する。<5層>で検出した。溝の軸線方向はN40°Eで、調査区内で約8.3mが確認された。北側は調査区外へと延びるが、C地点では確認されなかった。南側は深さを減じて消失する。小溝群を切り、溝25と平行する。検出面の標高は0.79mで、底面高0.72m、深さ0.06mで、底面高は南南西から北北東に下がる。幅は約0.6mで、断面形は皿状を呈する。

遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代の所産と推測する。

図60 溝26断面  
(縮尺1/30)

### 3. 耕作痕 (図50、図版15)

A地点北東、CP~CR36~38区において、21条で構成される小溝群を検出した。検出層は<5層>である。交差して十字状になる溝もあるが、報告の便宜上、まずは直線的な個別の溝として命名し、説明する (図50)。

小溝群の検出面の標高は0.65~0.9m、底面高は0.53~0.84m、深さは0.02~0.13mで、断面形は椀状か皿状を呈する。検出標高・底面高には幅があり、底面高約0.75mを目安に上位・下位の小溝群に分離すると、上位は小溝E・k・l~n・o・p、下位は小溝A~D・a~jとなる。これに溝の軸線方向、溝の間隔を加味すると、底面高の高い上位群からは小溝l~n (N11°~19°E、間隔約1.6m)、下位群からはA~D (N56°~60°W、間隔約1.3~1.5m)、a~d (N33°~41°E、間隔約1.5~1.7m)、e~i (N20°~27°E、間隔約1.4~1.7m) が有機的な関係をもつと考えられる小溝群として抽出される。

これらのうち、下位群に属する小溝A~D・a~d・e~iについては、東西・南北方向に、ほぼ等間隔で平

行に掘削された各群が交差した状態を捉えて検出している。群同士の関係性は高く、同時期の所産であるとみれば、規則的に配置された溝で格子状の区画を作出したものであり、周囲に柱穴や土坑等の遺構が配されないことなども考えあわせると、耕作にともなう溝と考えられる。

遺物は出土していない。先述した飛鳥時代の溝群の軸線方向との関連から、本小溝群の時期についても飛鳥時代と推定しておきたい。

## 第4節 中世前半の遺構・遺物

### 1. 概要

中世前半の遺構として、掘立柱建物1棟、柱穴列2列、ピット229基、井戸4基、土坑3基、溝15条を検出した。検出層は<4層>、<5層>であるが、本来はすべて<4層>に帰属する。本調査区では、調査区東半の36～38・39ライン間が南北方向に延びる低位部となっている。こうした地形は近世の作為による可能性も否定できないが、北に隣接する第9・11次調査地点では34～39ラインの位置に21×28mの大規模な池状遺構もあり、本調査地点も併せてみると、中世前半の時期には39ライン以東に南北に延びる低地帯が広がっていた可能性がある(図133)。一方、A地点南西部やE地点では弥生時代以来の安定した微高地にあたっている。

遺構の配置にはこうした地形環境が反映されているとも考えられ、A地点東半部の低位部の遺構分布は希薄である。さらに、38～41ライン間には大形の溝を含む複数の南北溝が掘削されている。これらの溝の方位は現在の鹿田地区の地割を反映した構内座標の南北軸にほぼ合致している。このうちの2条では、西に向かって東西方向の溝を派生させており、A地点南西部に方形区画を形成している。この区画の内部では総柱の掘立柱建物のほか、多数のピットが検出された。これらのピットは建物として把握するには至らなかったものの、礎石をのこすものもあり、本来は建物の柱穴が多いものと考えられる。さらにA地点南辺西側には方形縦板組井戸枠を内包する2基を含む計4基の井戸が築かれている。溝で囲まれた空間、建物・高い密度のピット群、複数の井戸の存在から、この区画は鹿田遺跡の他調査地点でも確認されている屋敷地の一つであると考えられる。

B・C地点で確認された東西方向の溝29・30の2条は、行先を延長復元すれば、約1.5～2mの間隔で平行する溝となり、側溝をもつ道の可能性も射程に入る。後述するが、この地点での近世の土坑配置が土地区画を反映するならば、D地点の柱穴列1もあわせた調査区北辺を通る東西方向のラインが近世にも続く区画線の表示と考えられる。これに交わる南北区画線をみると、この区画線の北側に位置する第9次調査地点では、大型溝や近世土坑の配置に表示される中世以降の南北方向の区画線が29・30ラインに位置するのに対し、本調査地点の南北方向の区画線は38・39ラインにあって第9次調査のものには正対せず、約50m弱のずれがみられる。(野崎)

### 2. 掘立柱建物・柱穴列・ピット群

掘立柱建物1 (図62・63、図版17・39、表1・2)

CU・CV43・44区に分布するP1～P6で構成される。検出レベルは標高1.04m～1.22mで<5層>に対応する。

柱穴の規模は、直径0.41～0.63m、底面の高さは標高0.5～0.9mで、深さは0.15～0.59mを示す。6基中5基に礎石が残る。各柱穴間の距離は1.9～2.0mである。本建物の構造は、P1・P2・P4の列が建物西辺を、これに直交するP4～P6の列が建物南辺を構成すると判断した。さらにP2・P5の列は前述の西辺に直交することから、総柱建物の可能性が考えられる。本建物1は東西4.0m、南北3.9mの規模を有する二間×二間の総柱建物に復元される。東西に軸をとり、軸方向はE16.5°Sを示す。

遺物はP1・P2・P5から土器小片が少量出土した。中世前半の吉備系土師器碗が含まれており、本遺構の

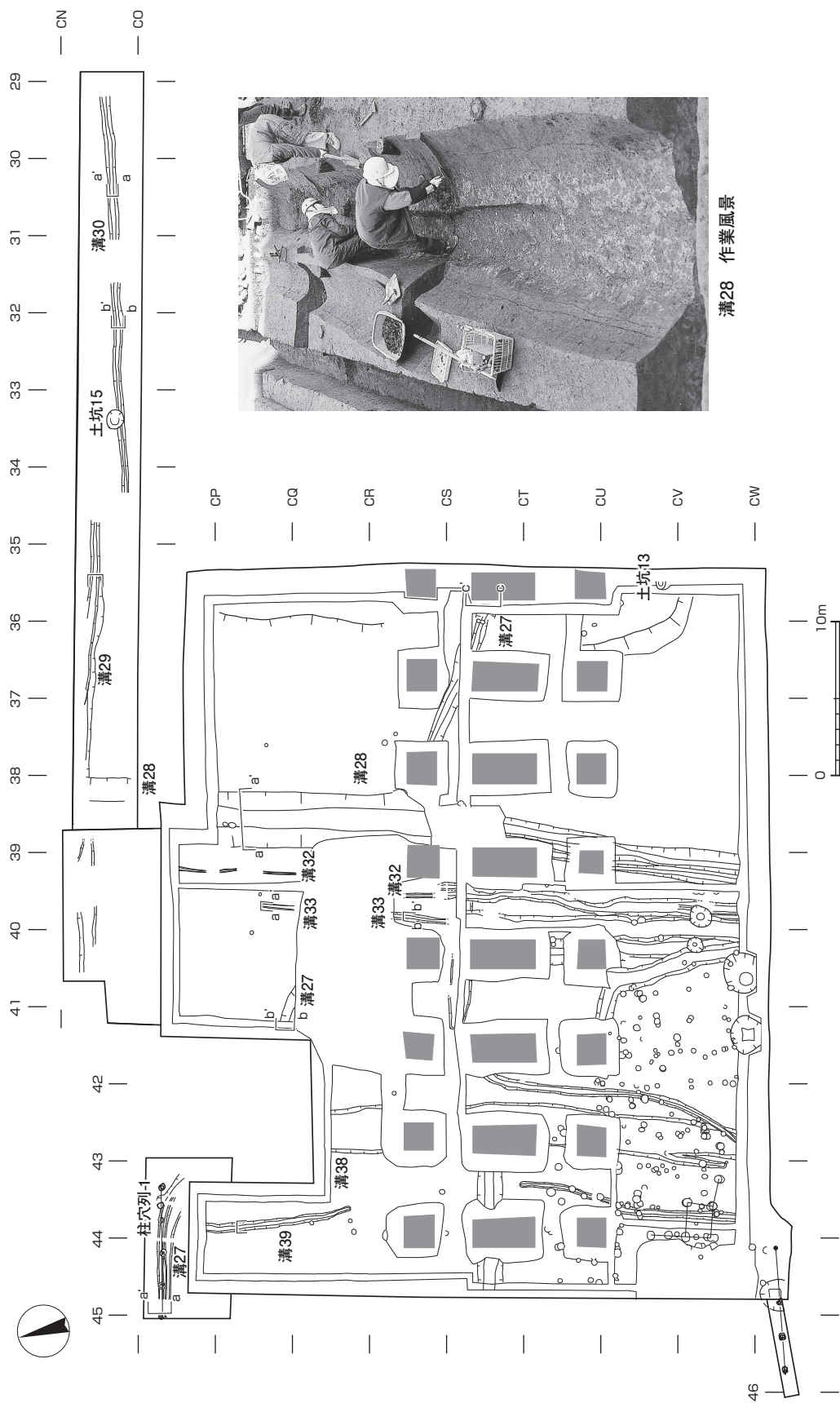


図61 中世前半の遺構全体図（縮尺1/400）

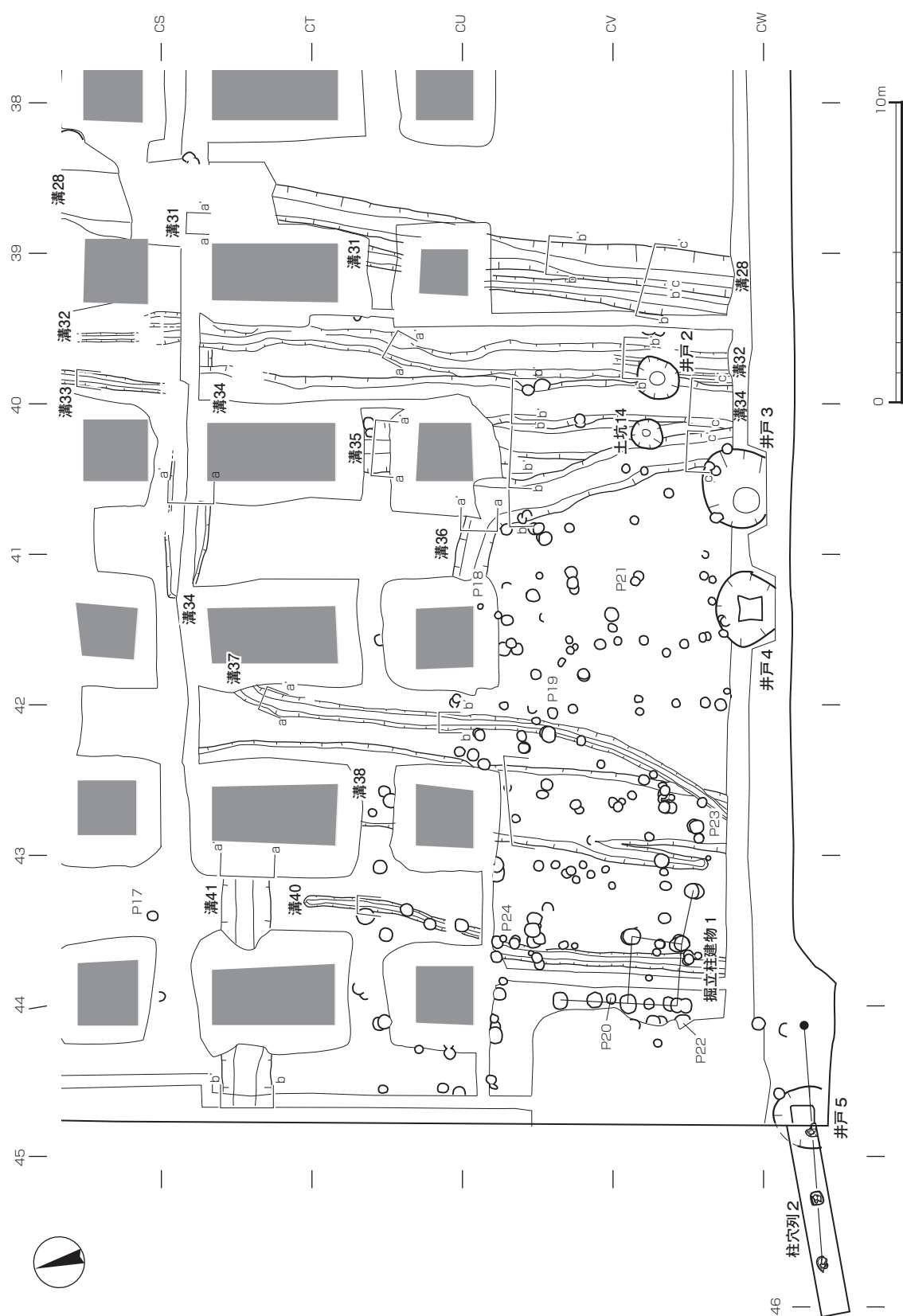


図62 中世前半の遺構：調査区南西（縮尺1/200）

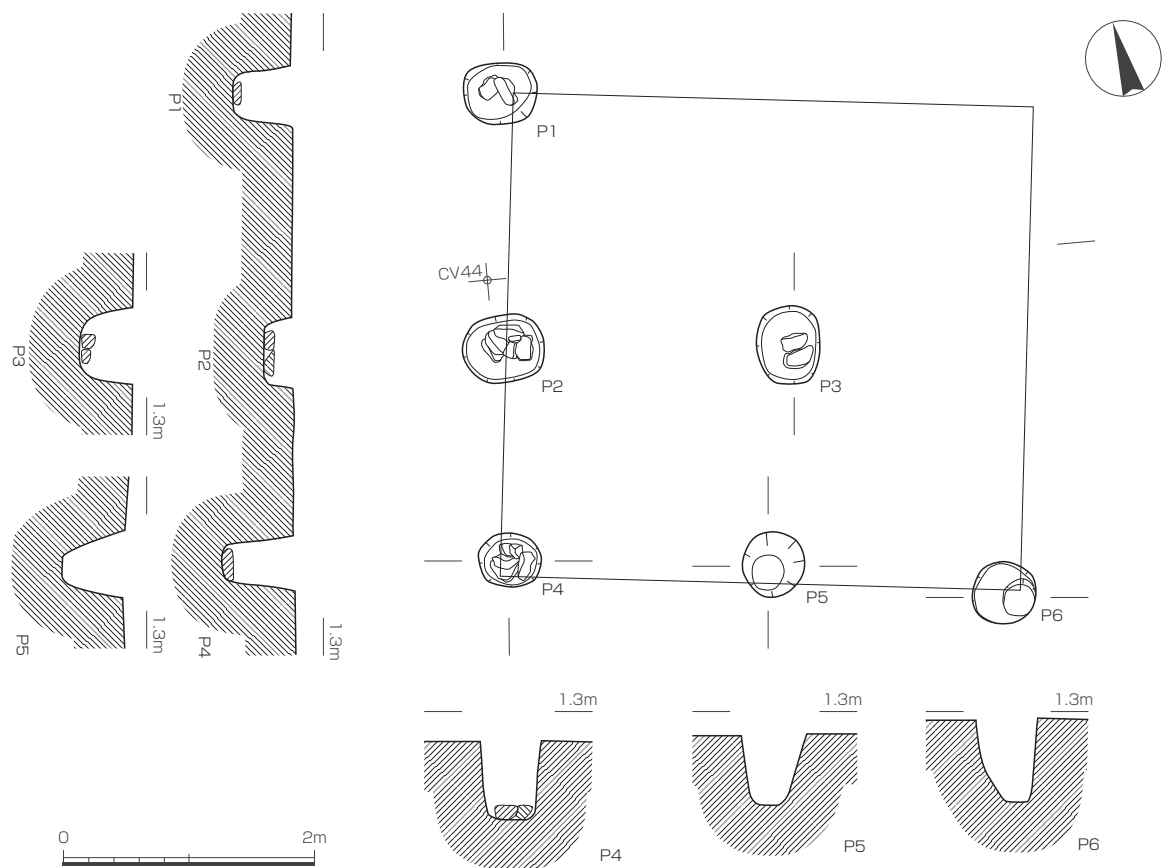


図63 掘立柱建物 1（縮尺1/60）

時期を示す。礎石はP 1～P 4とP 6に入れられており、そのうち6点（図63－S 4～9）を図示した。礎石は大きさで3種に分けられ、P 2のように大型石が1点入るもの、P 3のように大小多数が入るもの、P 1のように小ぶりの石を、面を揃えて入れたものがあり、各ピットで異なる。P 3は使用時ではなく廃棄後の状況を示す可能性もあろう。いずれも加工により平坦面を作出、あるいは平坦なものを選んでおり、被熱痕跡が認められる。

柱穴列 1（図61・65、図版17・39、表 1・2）

D地点、CO43・44区に分布するP 7～P12で構成される。検出レベルは標高0.99～1.18mで、＜4層＞に対応する。柱穴列 1の軸方向はE14.5° Sを示す。P 7～10の各間隔と、P10・12の間隔はいずれも2.0mを測る。後者の間にあるP11のみ、他とは異なる間隔を示す。柱穴の規模は直径0.35～0.5m、底面のレベルは標高0.51～0.85mで、深さ0.15～0.48mを示す。6基のうち2基に礎石が残っている。礎石のないP 7～P10の断面観察から、いずれも一度埋まった後に柱を打ち込んだことがわかる。それらの柱痕は直径が12～18cmと細く、杭が想定される。遺物はP 7～9・11・16からごく少量の土器片が出土した。中世前半の土器を含む。

表 1 掘立柱建物・柱穴列構成柱穴一覧

| 遺構名   | 番号  | 上面高(m) | 下面高(m) | 径(m)       | 深さ(m) | 礎石       |
|-------|-----|--------|--------|------------|-------|----------|
| 建物 1  | P1  | 1.09   | 0.64   | 0.55×0.46  | 0.45  | ○ S7・8   |
|       | P2  | 1.05   | 0.9    | 0.63×0.52  | 0.15  | ○ S4     |
|       | P3  | 1.22   | 0.8    | 0.51×0.58  | 0.43  | ○ -      |
|       | P4  | 1.04   | 0.51   | 0.37×0.41  | 0.53  | ○ S5・6・9 |
|       | P5  | 1.13   | 0.66   | 0.48×0.50  | 0.48  | ×        |
|       | P6  | 1.21   | 0.61   | 0.48×0.46  | 0.6   | ○ -      |
| 柱穴列 1 | P7  | 1.18   | 0.72   | 0.45×0.4   | 0.46  | ×        |
|       | P8  | 1.07   | 0.63   | 0.5×0.45   | 0.45  | ×        |
|       | P9  | 1.02   | 0.72   | 0.45×0.35  | 0.3   | ×        |
|       | P10 | 1.02   | 0.85   | 0.4×0.4    | 0.15  | ○ S13    |
|       | P11 | 0.99   | 0.51   | 0.45×0.43  | 0.48  | ○ -      |
|       | P12 | 1.03   | 0.56   | 0.35×0.35  | 0.47  | ×        |
| 柱穴列 2 | P13 | 1.07   | 0.87   | 0.5×(0.3)  | 0.28  | ○ S11    |
|       | P14 | 1.11   | 0.9    | 0.43×0.45  | 0.3   | ○ S10    |
|       | P15 | 1.06   | 0.7    | (0.4)      | 0.35  | ○        |
|       | P16 | 1.12   | -0.03  | 0.6×(0.45) | 0.28  | ○ S12    |

調査の記録



|     | 遺構名    | ピット番号 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | 石材      | 備考                 |
|-----|--------|-------|--------|-------|--------|-------|---------|--------------------|
| S4  | 掘立柱建物1 | P2    | 30.5   | 24.8  | 13     | 11780 | 流紋岩質凝灰岩 | 6片接合、一部欠損          |
| S5  | 掘立柱建物1 | P3    | 25.1   | 19.7  | 11.5   | 9910  | 石英斑岩    | 上面平坦に加工、石切痕あり、被熱あり |
| S6  | 掘立柱建物1 | P3    | 21     | 17.3  | 11     | 6720  | 花崗岩     | 被熱あり               |
| S7  | 掘立柱建物1 | P1    | 19.2   | 9.5   | 6.9    | 2098  | 花崗岩     | 全面割れ面              |
| S8  | 掘立柱建物1 | P1    | 10.3   | 14    | 5.1    | 816   | 花崗岩     | 加工により一部平坦          |
| S9  | 掘立柱建物1 | P3    | 9      | 8.3   | 5.6    | 595   | 流紋岩     | 加工により一部平坦、被熱あり     |
| S10 | 柱穴列2   | P14   | 13.3   | 10.3  | 7.7    | 2670  | 流紋岩質凝灰岩 | 被熱後、加工し平坦面作出       |
| S11 | 柱穴列2   | P13   | 31.7   | 19.2  | 9      | 6640  | 石英斑岩    | 図の上面は平坦            |
| S12 | 柱穴列2   | P16   | 24.5   | 16.1  | 8.1    | 4110  | 石英斑岩    | 被熱後、加工し平坦面作出       |
| S13 | 柱穴列1   | P10   | 12     | 18.6  | 9.7    | 4760  | 凝灰角礫岩   | 2片接合、煤あり、被熱痕は二次的   |

図64 掘立柱建物・柱穴列出土礎石（縮尺1/6）

表2 未掲載礎石一覧

| 遺構名    | ピット番号 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重量 (g) |                 |
|--------|-------|---------|--------|---------|--------|-----------------|
| 掘立柱建物1 | P3    | 12.3    | 19.4   | 8.9     | 4131   | 加工により一部平坦       |
| 掘立柱建物1 | P3    | 20      | 15.6   | 8.4     | 5350   | 被熱あり、加工により平坦面作出 |
| 掘立柱建物1 | P3    | 19      | 10.8   | 7.7     | 1312   | 加工により平坦面作出      |
| 掘立柱建物1 | P3    | 20.4    | 12.6   | 5.9     | 2790   | 被熱あり            |
| 掘立柱建物1 | P3    | 12.8    | 6.5    | 5.7     | 740    | 加工により平坦面作出      |
| 柱穴列1   | P12   | 15.3    | 12.1   | 8.8     | 1690   | 加工により一部平坦       |
| 柱穴列2   | P13   | 36      | 17.7   | 14      | 1406   | 加工により一部平坦       |
| 柱穴列2   | P14   | 25.8    | 18.7   | 12.6    | 7350   | 加工により一部平坦、被熱あり  |
| 柱穴列2   | P14   | 15.6    | 14.5   | 6.8     | 2600   | 被熱あり、加工により平坦面作出 |
| 柱穴列2   | P14   | 19.5    | 29.1   | 10.5    | 8860   | 被熱あり、加工により平坦面作出 |

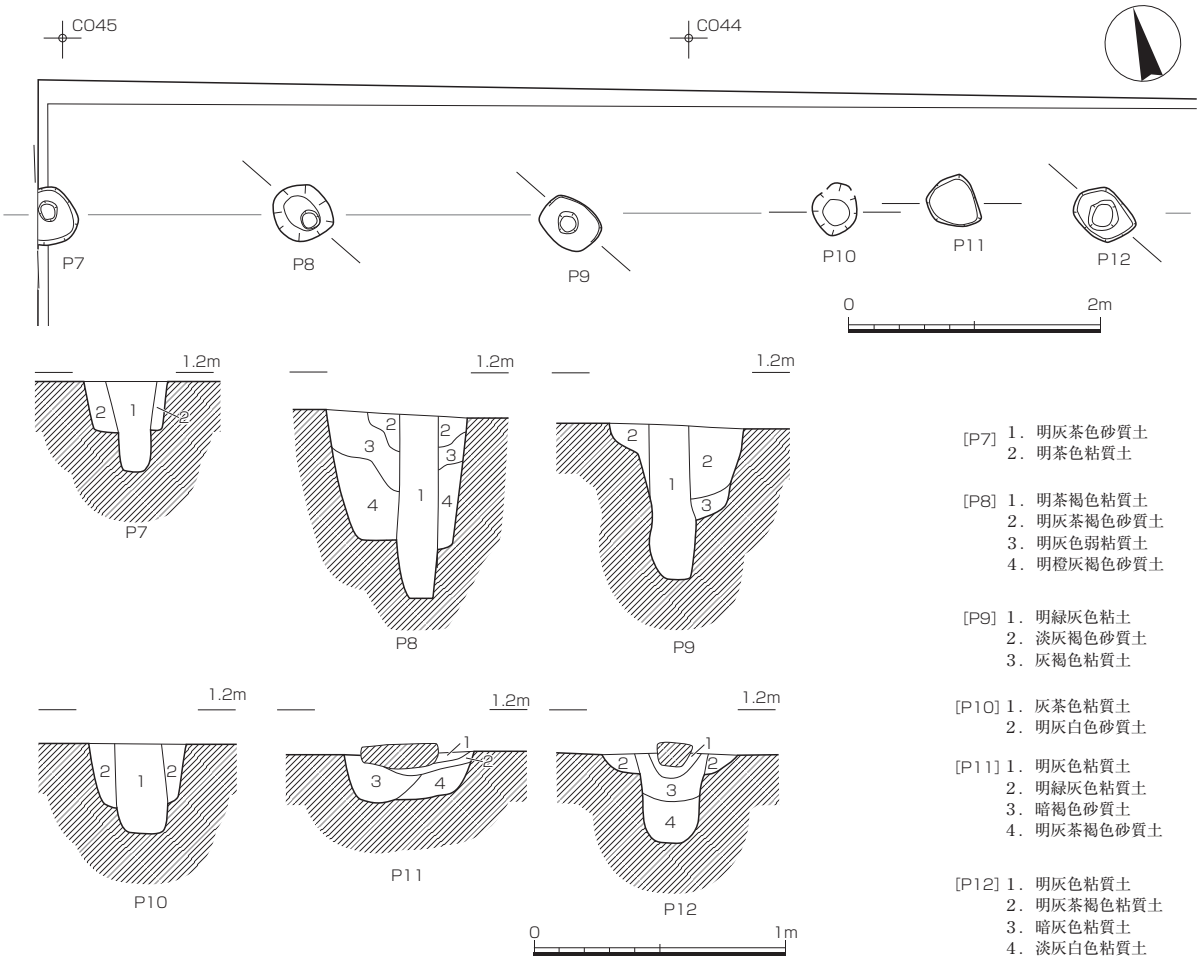


図65 柱穴列1 (縮尺1/30・1/60)

柱穴列1はCOライン南1.5mの位置で、COラインに並行している。COラインより北を東西に走行する溝30に並行する柵列と考えられる。元はP11・12のように礎石を用いたものから、杭を打ち込むものに改修した可能性もあろう。また溝と柱穴列1との間に道の存在も窺える。層位と溝30との関係から掘立柱建物1より新しいが、詳細な時期は不明である。

柱穴列2 (図62・66、図版17・39、表1・2)

E地点、CW44・45区に分布するP13~P16で構成される。検出レベルは標高1.06~1.12mで<5>層に対応する。4基の柱穴がおよそ2.0m間隔で一列に並ぶ。軸方向はE13°Sを示す。柱穴の規模は、直径0.43~0.6m、底面の高さは標高-0.03~0.9mで深さ0.2~0.35mを測る(表1)。西から3基(P13~P15)は2mを測る間隔と、底

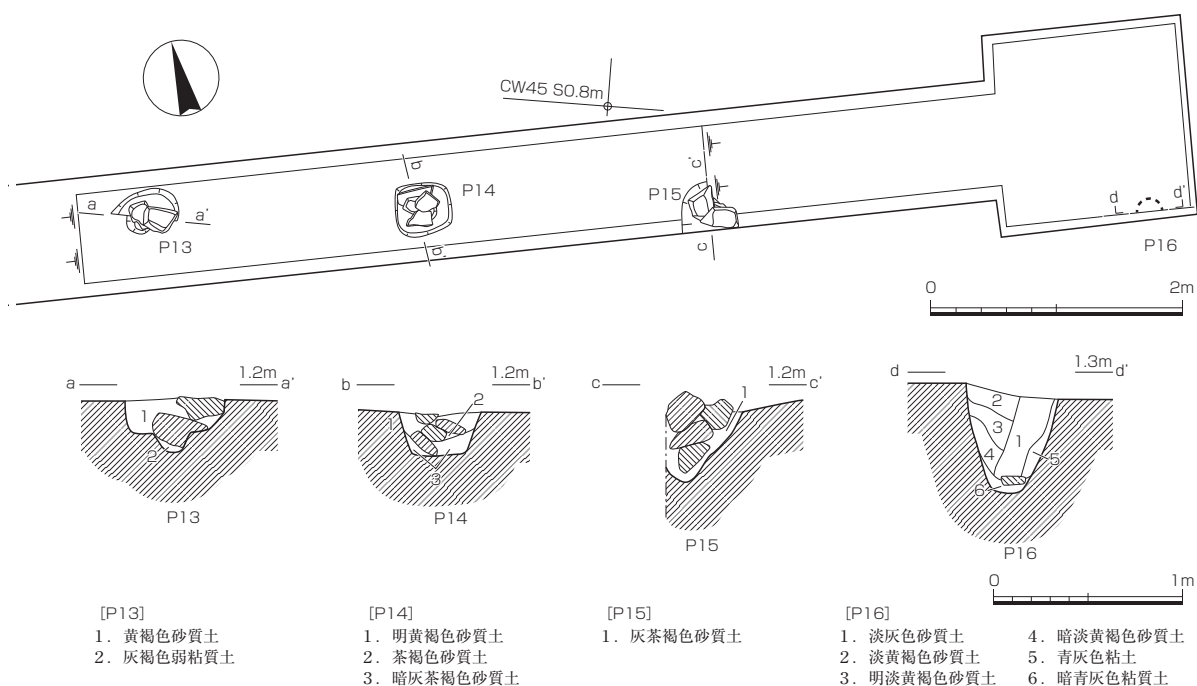


図66 柱穴列2 (縮尺1/40・1/60)

面レベルが近似し、共通性が高い。最も東に位置するP16はP15との間隔3.4mを測り、他の3基とは異なる。礎石の出土状況では前者は複数の礎石が重なり合って出土したのに対し、後者では柱痕の底面に1石が出土した。

柱穴列2は狭小な範囲での確認であり、建物の一边を示す可能性もあるが断定はできない。同一軸上にあるものの前述したような違いから、P13～P15とP16とは別の構造物の可能性も考えられる。

遺物はいずれのピットからもごく少量の土器片が出土した。中世前半の土器を含む。柱穴列2の時期は、P15と井戸5との切り合い関係から、井戸5の埋没後～中世前半の中で考えられる。

#### ピット群 (図61・62・67)

上記のほかに本調査で検出された中世のピットは204基を数える。＜4層＞、＜5層＞上面の調査で検出されたものが大半を占める。その分布をみると調査区の南西部に集中しており、CTライン以南、39ライン以西に全体の

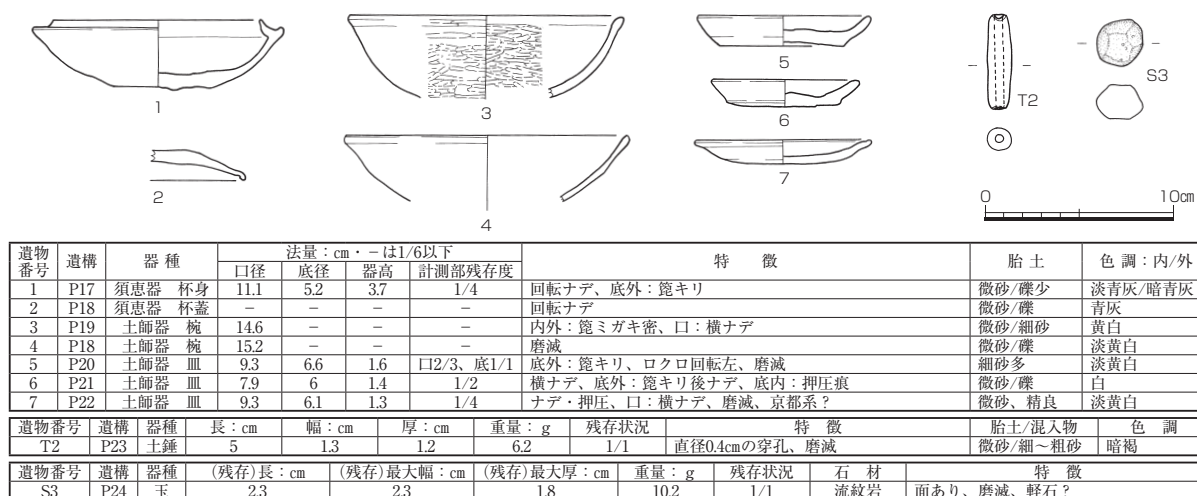


図67 ピット出土遺物 (縮尺1/4)

9割近くが分布する。これらのピットはその形状から柱穴と判断されるものが多い。これらから出土した遺物を図67に掲載した。11～12世紀代の遺物が集中する。そのなかで同1はCR43区のP17から出土し、飛鳥時代に比定される。このピットは集中域のピット群と異なり、東西方向の溝41より北に位置する。近隣に同時期の溝18があり、飛鳥時代の遺構との関連が窺われる。

(岩崎志保)

### 3. 井戸

#### 井戸2 (図62・68・69、図版18・37)

A地点南側中央、CV39区に位置する。＜4層＞で検出した。検出面の標高は1.11m、底面高は-0.85mで、深さは1.96mである。重複している溝34よりも検出高が低く、溝34に先行すると推測される。

平面形は、上面、底面ともに楕円形を呈する。規模は、上面で長軸長1.53m、短軸長1.37m、底面で長軸長0.5m、短軸長0.44mである。掘り方ラインは標高0.3m付近に明瞭な屈曲点があり、断面形は逆台形の下半部が屈曲点から上半部に向かって開き、全体としてはY字形を呈する。

埋土は14層に分層される。土色・土質・包含物を指標に三群に大別する。一群は1～4層が該当する。橙色がかかる灰褐色土で、特に1・2層では鉄分の沈着が顕著にみられる。1・3・4層では焼土塊や炭化粒の包含がわずかにみられる。各層の断面形と堆積順序をみると、縁辺から中心に向かって下がる土層の単位が南北から交互に積み重なっている。二群は5～12層が該当する。黒灰色の色調を基調とする砂質土である。各層とも包含物が多くみられるという共通性がある。5・10・11・12層には焼土塊・炭化粒が包含される。なかでも井戸中心部に形成されたすり鉢状の窪みの最深部に堆積する5層では、焼土粒とともにわずかに灰状の炭化物が認められた。また、10層では焼土塊・炭化粒の包含が特に顕著であった。焼土塊・炭化物の包含状況から、5・10層では焼成を伴う祭祀が執り行われていたことが推測される。5層と10～12層の層群間には6～9層が堆積する。このうち、6・7・9層では粒径約2～10cmの大型ブロックの包含がみられる。また、8層では粗砂と灰が約2cmの厚さで互層状となっており、層断面形がレンズ状を呈している。三群は13・14層が該当する。暗褐色～黒褐色の暗い色調を呈する粘土・粘質土で、上方の埋土とは土質の差異で截然と分層される。13層には大形土器片が含まれる。掘り方の屈曲点は13層の下面に位置しているが、土質とは積極的に関係づけられない。

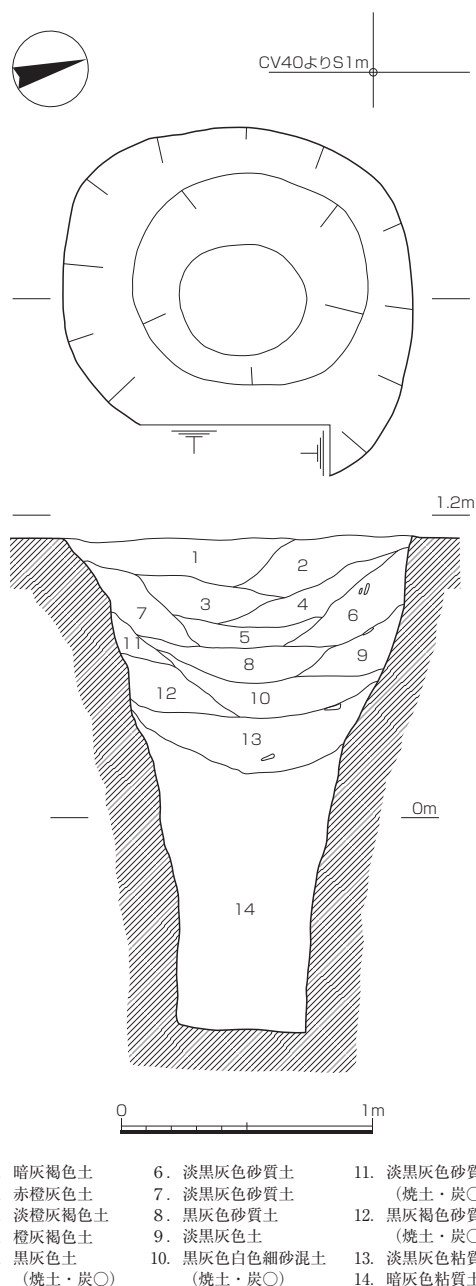
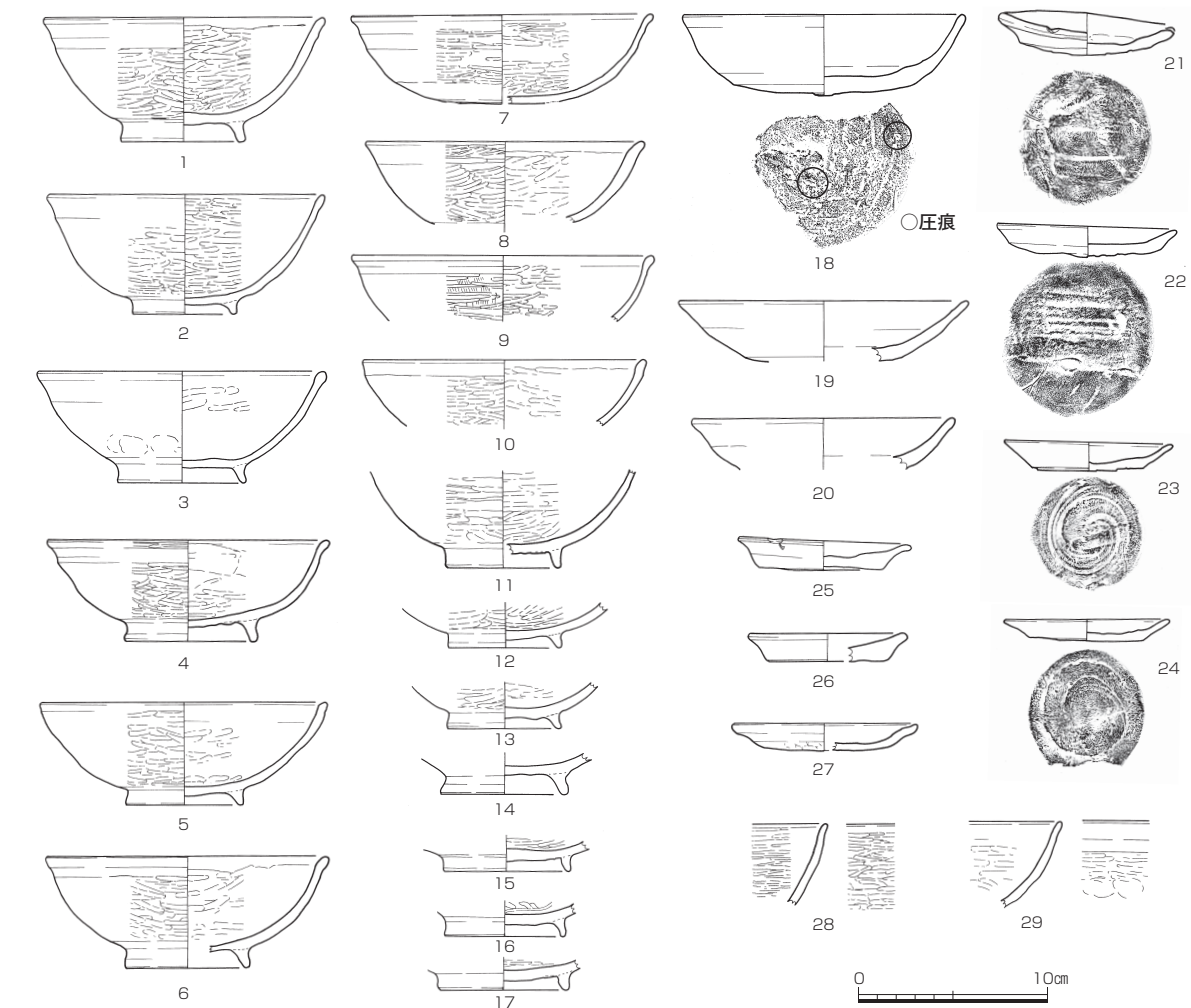


図68 井戸2 (縮尺1/30)

調査の記録



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |         |         |            | 特 徴                                      | 胎 土     | 色 調：内/外   |
|----------|-------|---------------------|---------|---------|------------|------------------------------------------|---------|-----------|
|          |       | 口径                  | 底径      | 器高      | 計測部残存度     |                                          |         |           |
| 1        | 土師器 碗 | 14.8                | 6.6     | 6.6     | □1/4、高台1/1 | 内外：篋ミガキ(外は分割)、高台：厚手・高め、厚手の深碗、煤           | 微砂/礫    | にぶい灰白     |
| 2        | 土師器 碗 | 14.7                | 5.5     | 6.4     | □－、高台1/1   | 内外：篋ミガキ・磨滅・煤等で暗色化、深碗、高台断面△形、11に類似        | 微砂/礫    | 淡灰白～淡灰褐   |
| 3        | 土師器 碗 | 15.2                | 6.8     | 5.9     | □1/4、高台1/1 | 内外：磨滅で篋ミガキ不明瞭、薄手、内：重焼きの変色(黒色化)           | 微砂      | 白         |
| 4        | 土師器 碗 | 15                  | <7>     | 5.4     | □1/2、高台1/1 | 内：工具ナデ・底に篋ミガキ・煤、外：篋ミガキ、高台：厚手・高め          | 微砂      | 白～淡(灰)白   |
| 5        | 土師器 碗 | 15.3～16             | 6.3     | 5.7     | □－、高台1/1   | 内外：篋ミガキ・薄い煤、内：磨滅、高台：厚手・断面△、底内：押圧         | 微砂      | にぶい淡灰白    |
| 6        | 土師器 碗 | 15                  | 7       | 6       | 1/4        | 内外：篋ミガキ、内：磨滅、高台：高め、器壁厚：底部薄く不均質           | 微砂/石英礫多 | 白         |
| 7        | 土師器 碗 | <15.9>              | －       | －       | 1/4        | 内外：篋ミガキ・高台内以外黒色(外：墨か漆?点在、高台剥離面黒色)        | 微砂      | 暗褐、高台内：灰白 |
| 8        | 土師器 碗 | 14.8                | －       | －       | 1/2        | 内外：篋ミガキ(外は分割)、口：分厚い作り、体部浅め               | 微砂/石英礫  | 白         |
| 9        | 土師器 碗 | 16                  | －       | －       | －          | 内外：篋ミガキ・煤で黒色化(内：墨か漆?)、外：布目痕?、7に類似        | 微砂      | 白、一部暗褐    |
| 10       | 土師器 碗 | 15                  | －       | －       | 1/4        | 内外：篋ミガキ・煤少、5と類似                          | 微砂      | 淡灰白       |
| 11       | 土師器 碗 | －                   | 6.2     | －       | 1/2        | 内外：篋ミガキ、丁寧な仕上がり、胎土均質                     | 微砂      | 白         |
| 12       | 土師器 碗 | －                   | <5.9>   | －       | 1/1        | 内外：篋ミガキ密・被熱で暗色化、高台：厚手・内に工具痕、11に類似        | 微砂/礫    | 暗灰褐       |
| 13       | 土師器 碗 | －                   | 6～6.5   | －       | 1/1        | 内外：篋ミガキ・被熱で暗色化、高台：厚手・内に工具痕、1・12に類似       | 微砂/礫    | にぶい暗灰     |
| 14       | 土師器 碗 | －                   | 6.4～6.8 | －       | 1/1        | 磨滅、外：被熱で表面劣化・暗色化、高台：厚手、11に類似             | 微砂/礫多   | 暗灰～淡灰白    |
| 15       | 土師器 碗 | －                   | 6.8     | －       | 1/1        | 内：押圧・篋ミガキ密、高台：横ナデ                        | 微砂/粗砂   | 淡(黄)白     |
| 16       | 土師器 碗 | －                   | 6.4     | －       | 3/4        | 内：篋ミガキ、高台：薄手・内に亀裂                        | 微砂      | 白         |
| 17       | 土師器 碗 | －                   | 7       | －       | 1/1        | 内：篋ミガキ、高台：△形気味、厚手、被熱で暗色化                 | 微砂/礫    | 淡灰～暗灰褐    |
| 18       | 土師器 杯 | 15                  | 9.6     | 4.3     | □－、底1/4    | 横ナデ、底外：篋キリ・ロクロ回転・モミ圧痕と植物痕、底部厚手           | 微砂/赤色粒  | にぶい灰褐     |
| 19       | 土師器 杯 | 15.4                | 8.4     | －       | □－、底1/4    | 横ナデ、底外：篋キリ後ナデ(シャープ)、細かい胎土                | 微砂/赤色粒多 | 明橙褐       |
| 20       | 土師器 杯 | 14                  | －       | －       | 1/4        | 横ナデ、厚手、外：口縁に煤少、細かい胎土                     | 微砂/赤色粒  | 暗灰褐       |
| 21       | 土師器 皿 | <9.35>              | <6.8>   | 1.2～2.4 | 1/1        | 底外：板目痕、底内：一部に深い凹み、口：打欠き(幅6mm)1か所、重み      | 微砂多     | にぶい暗灰     |
| 22       | 土師器 皿 | <9.55>              | 8       | 1.3～1.8 | □1/2、底1/1  | 横ナデ、底外：板目痕、厚手、きめ細かい胎土                    | 微砂/赤色粒  | 淡橙褐       |
| 23       | 土師器 皿 | 9                   | 6       | 1.5～1.6 | □1/3、底1/1  | 底外：篋キリ後板目痕・ロクロ回転左、口：煤少、薄手、細かい胎土          | 微砂/赤色粒多 | 明橙褐       |
| 24       | 土師器 皿 | 9                   | <6.1>   | 1.1～1.6 | □1/2、底3/4  | 横ナデ、底外：篋キリ・ロクロ回転左、底内：押圧、重み、薄手            | 微砂/赤色粒  | 淡橙褐       |
| 25       | 土師器 皿 | 9.2                 | 7.9     | 1.3～1.8 | □2/3、底1/1  | 底外：篋キリ後板目痕、底内：凹み、口：打欠(幅9mm)+線刻(長5mm)・灯心痕 | 微砂/赤色粒  | 灰(褐)白～乳灰  |
| 26       | 土師器 皿 | 8.6                 | 6.4     | 1.5     | □－、底1/5    | 横ナデ、底外：ナデ、厚手                             | 微砂多     | 白、一部黒色化   |
| 27       | 土師器 皿 | 9.8                 | 6.4     | 1.4     | 1/3        | 横ナデ、外下半～底：押圧、細かい胎土、器壁均一、京都系?             | 微砂、均一   | 白         |
| 28       | 瓦 器 碗 | －                   | －       | －       | －          | 内外：篋ミガキ密、炭素吸着未確認、細かい胎土、和泉型?              | 精良      | 淡灰白       |
| 29       | 瓦 器 碗 | －                   | －       | －       | －          | 内外：篋ミガキ、被熱で表面劣化・白色化、和泉型                  | 微砂、均一   | 黒灰～淡灰白    |

図69 井戸2出土遺物(縮尺1/4)

遺物は土師質土器碗・杯・皿のほか、瓦器片が出土した。

本井戸の時期は、出土遺物から中世前半（11世紀後半）に位置づけられる。

### 井戸3（図62・70・71、図版19・37）

A地点南辺中央、CV・CW40区に位置する。南辺は調査区外にあたり、検出できなかった。＜4 a層＞で検出した。北東から東辺の一部は溝35に重複しているが、土層のうえでの先後関係は確認できていない。検出面の標高は1.27m、底面高は-1.18mで、深さは2.45mである。

平面形は、上面で楕円形、底面で隅丸方形を呈する。底面の中心からみると、上面は北東方向に大きく張り出す形状となっている。規模は、上面で長軸長2.72m、短軸長2.62m、底面で長さ1.04m、幅0.96mをはかる。断面形はY字形で、下半の筒部では東側のわずかな範囲をのぞき、底部から約0.8mの高さまでオーバーハングしている。

埋土は17層に分層される。土色・土質・包含物のほか、各層の堆積状況をあわせ、四群に大別する。一群は1～6層が該当する。多くの層で色調が赤～橙色がかり、ブロックを包含するという特徴がある。堆積状況やブロックの粒径を指標に、1・2層、3～6層の2小群に細分する。1・2層は層厚約0.15～0.2m、包含するブロックは粒径約10cm前後である。一方、3～6層は、層厚0.1m前後の厚みで、レンズ状堆積が連

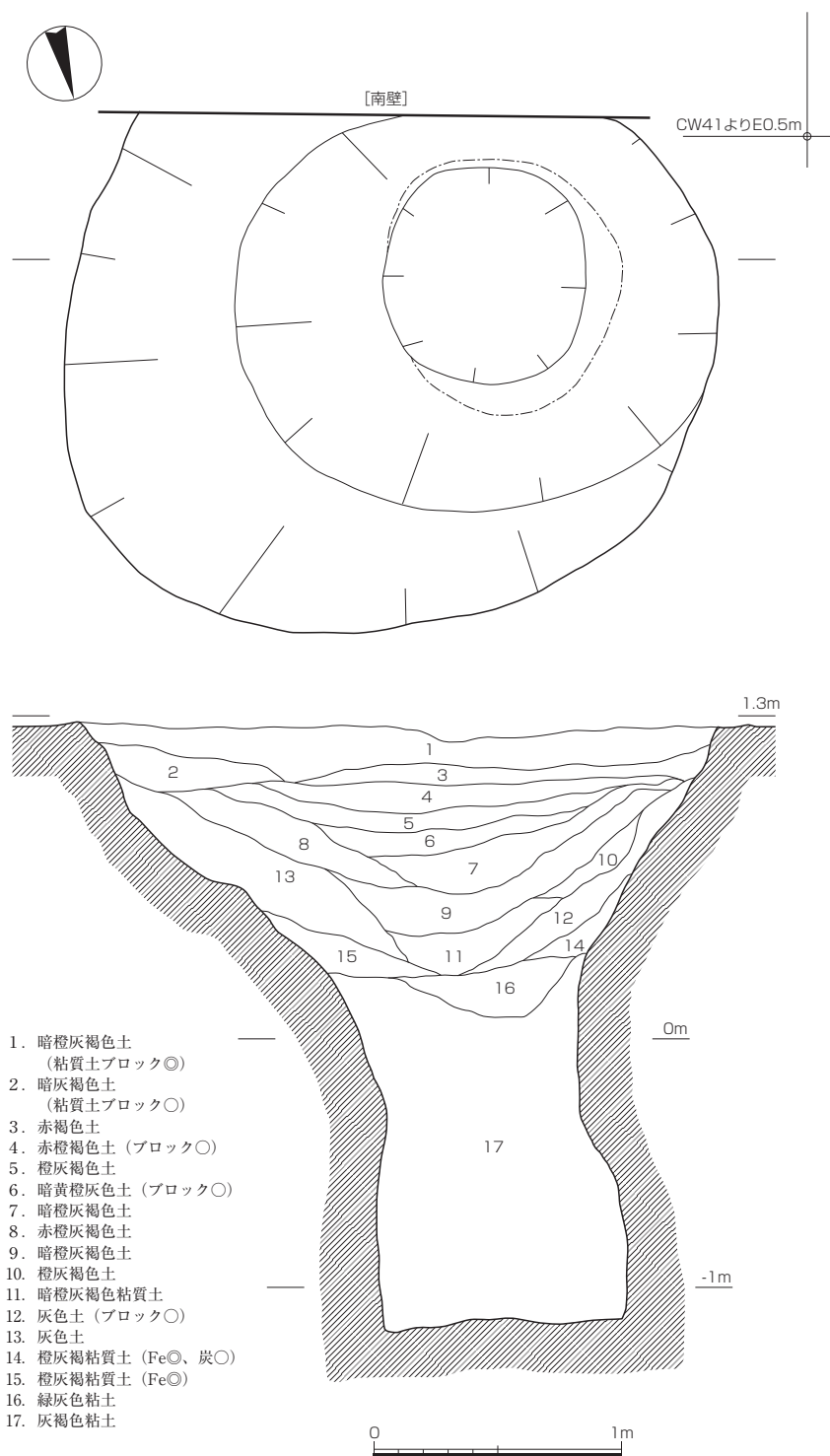
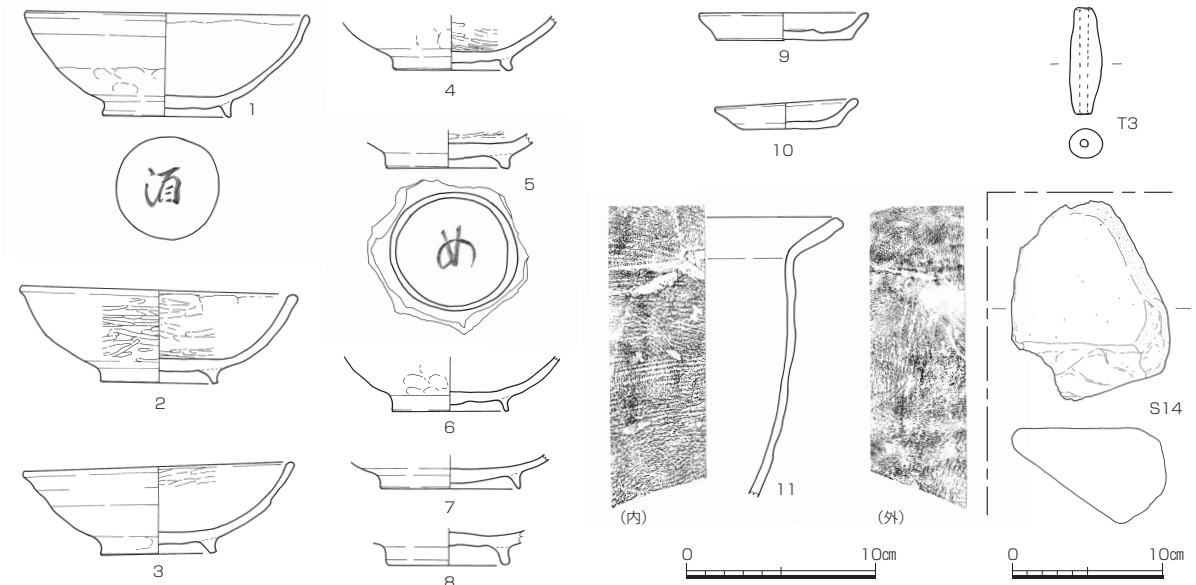


図70 井戸3（縮尺1/30）



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |            |            |            | 特 徴                               | 胎 土                 | 色 調：内/外        |         |
|----------|-------|---------------------|------------|------------|------------|-----------------------------------|---------------------|----------------|---------|
|          |       | 口径                  | 底径         | 器高         | 計測部残存度     |                                   |                     |                |         |
| 1        | 土師器 碗 | 15～15.7             | <6.85>     | <5.55>     | 1/1        | 押圧・ナデ、外下半に布目痕と亀裂、高台内：墨書(「酒」)・窺キリ痕 | 微砂                  | 淡黄白/白          |         |
| 2        | 土師器 碗 | 14.8                | <6.2>      | 4.7～5.4    | □1/2、高台1/1 | 内外：窺ミガキ(粗)                        | 微砂/礫少               | 淡黄白            |         |
| 3        | 土師器 碗 | <14.35>             | 6.2        | 4.5～4.9    | 1/1        | 内外下半：押圧、内：窺ミガキ痕、一部変色で黄色化          | 微砂                  | 淡黄白            |         |
| 4        | 土師器 碗 | －                   | <6.25>     | －          | 1/1        | 内：窺ミガキ少・底部押圧・米粒状の墨点有、内外：煤         | 微砂                  | 白、黒褐           |         |
| 5        | 土師器 碗 | －                   | 6.2～6.6    | －          | 1/1        | 内：窺ミガキ・粒状の墨点在、高台内：墨書(「女」)、内外：煤    | 微砂                  | 淡黄白、暗褐         |         |
| 6        | 土師器 碗 | －                   | 6.1        | －          | 1/2        | 内外：磨滅・押圧、高台内：押圧痕が円を描く、高台：薄手       | 微砂                  | 白              |         |
| 7        | 土師器 碗 | －                   | 7.4        | －          | 1/3        | 内：丁寧なナデ・墨と赤褐色顔料付着、外：ナデ            | 微砂                  | 淡黄白            |         |
| 8        | 土師器 碗 | －                   | 6.6        | －          | 1/2        | 内：平滑・煤、高台内：押圧、厚手                  | 微砂多                 | にぶい灰白          |         |
| 9        | 土師器 皿 | 9                   | 7.2        | 1.5        | □1/2、底3/4  | 横ナデ、底外：窺キリ・ロクロ左回転・板目痕             | 微砂/赤色粒              | 明茶             |         |
| 10       | 土師器 皿 | <7.7>               | 5.6        | 1.2～1.6    | 1/1        | 磨滅、底外：窺キリ・ロクロ左回転、底内：押圧、硬質感        | 微砂多/礫               | 淡黄白            |         |
| 11       | 土師器 鍋 | －                   | －          | －          | －          | 内：ハケメ・煤少、外：ハケ後押圧・煤多               | 細砂                  | 暗褐/黒褐色         |         |
| 遺物番号     | 器種    | (残存)長：cm            | (残存)幅：cm   | (残存)厚：cm   | 重量：g       | 残存状況                              | 特 徴                 | 胎 土            | 色 調     |
| T3       | 土鍾    | 5.8                 | 1.7        | 1.7        | 14         | 1/1                               | 直径0.4cmの穿孔、ナデ、磨滅、黒斑 | 微砂             | 白、一部明褐色 |
| 遺物番号     | 器種    | (残存)長：cm            | (残存)最大幅：cm | (残存)最大厚：cm | 重量：g       | 残存状況                              | 石 材                 | 特 徴            |         |
| S14      | 被熱礫   | 12.8                | 10.3       | 6          | 765.3      | 1/1                               | 流紋岩質凝灰岩             | 炭化・木質付着部や変色部あり |         |

図71 井戸3出土遺物（縮尺1/4）

続的に堆積し、包含されるブロックの粒径は約1～3cm前後である。二群は7～11層が該当する。赤～橙色がかる灰～灰褐色土で、ブロック等の包含物はみられない。9・10層からは中世土器片が出土した。井戸中心部のすり鉢状の窪みに堆積する。8・9層下面と13層の層理面では8・9・13層の交点以下、10・12層の層理面でも上方で傾斜変換し、急な傾斜となっているため、この窪みは人為的な再掘削によって形成されたものの可能性もある。その場合、9層出土の土器は、井戸で執り行われた何らかの祭祀に伴うものとも考えられる。三群は12～15層が該当する。灰～橙灰褐色粘質土である。橙色を帯びる14・15層では鉄分の沈着が著しい。また12層でみられるブロックは粒径約3～5cmをはかる。各層の断面形状は外縁から中心部に流れ込んだ流入土であることが推測される。ブロックを包含する層が少ないこと、包含されるブロックの粒径が小さいことも流入土との推測の証左となろう。四群は16・17層が該当する。灰～灰褐色の粘土で、三群までの埋土とは色調・土質ともに截然と分離される。

遺物は土師質土器碗・皿・鍋、土鍾のほか、被熱礫が出土した。土師質土器碗のうち2点には底部外面に墨書があり、完形で出土した1は「酒」、5は「女」と判読される。

本井戸の時期は、出土遺物から中世前半（12世紀中頃）に位置づけられる。

井戸4（図62・72～75、図版20・21・37・40）

A地点南辺中央西寄り、CV・CW41区に位置する。南辺は調査区外にあたり、検出できなかった。また、井戸

北半部には、南側溝を掘削しており、その部分は失われている。＜4層＞で検出した。検出面の標高は1.23m、底面高は-1.08mで、深さは2.31mである。

井戸の中心部には方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置されている。平面形については、上面では東辺、北辺は弧状の掘り方であること、法面で確認された傾斜変換線も同様に弧状のラインをなすことから、西辺南側が直線的になるものの、おおむね円形となることが想定される。底面は内包した木枠に沿い、方形を呈すると推測される。規模は、上面で東西2.34m、南北1.98m以上、底面は木枠の抜き取り作業のため、平面的な確認ができなかったが、断面等の情報を総合すると、東西0.9m前後、南北0.9～1.0m前後の規模が推定される。

埋土は19層に分層される。土色・土質・包含物および木枠との関係を指標に六群に大別する。一群は1層で、

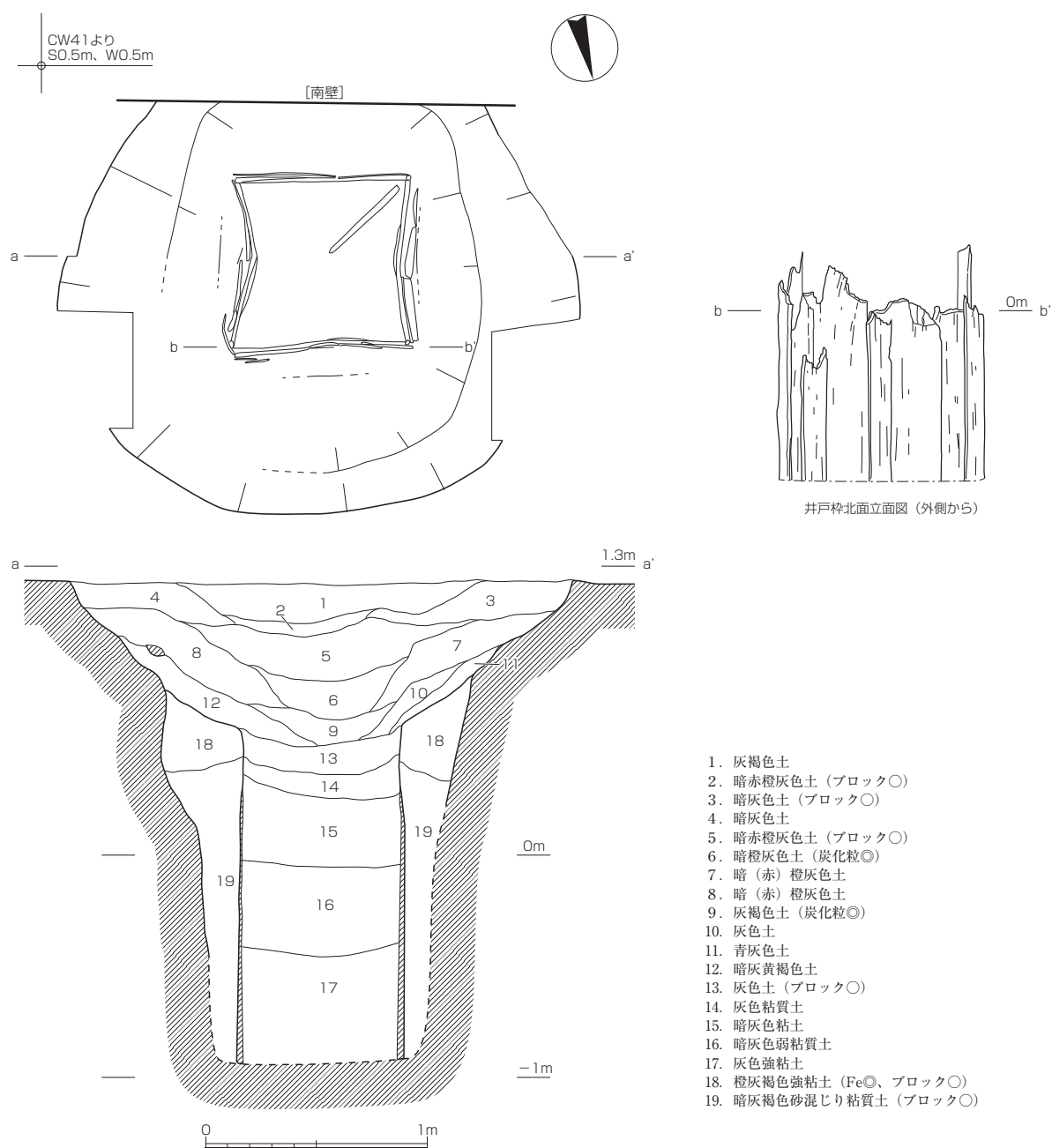


図72 井戸4（縮尺1/30）

土器小片を含む灰褐色土である。井戸がほとんど埋没した後、最後にのこった窪みに流入した自然堆積層である。二群は2～5層が該当する。土色は暗灰～暗灰褐色土を基調としており、2・5層では鉄分の沈着の影響もあり赤～橙色を帯びる。ブロックの包含は2・3・5層にみられており、人為的な埋め戻し土の可能性もある。三群は6～8層が該当する。赤～橙色を帯びた灰褐色土を基調とする。7・8層は皿状に開く法面に沿って、外縁から中央部にむけて緩やかに下る傾斜で堆積する。その上面は6層との層理面から角度を変え、井戸中央部にボウル状の窪みを形成している。この窪みに堆積する6層には炭化粒の包含が顕著にみられ、土器小片を含んでいる。四群は9～12層が該当する。本群の堆積構造も三群と同じで、皿状に開く法面に沿って10・11層、12層が堆積し、井戸中央部にボウル状の窪みが形成されている。この窪みに堆積する9層には炭化粒が多く包含されている。こうした構造が連続する二層群に認められることから、井戸中央部に窪みを作り、そこで焼成行為を伴う祭祀が複数回にわたって執り行われたことを想定したい。五群は井戸枠内の埋土である。13層は暗黄褐色土ブロックを含む灰色土、14層以下は灰色を基調とする粘土・粘質土が堆積する。このうち16層から土器の包含が認められるようになり、最下層の17層では完形の土師質土器碗を含む多くの土器が出土した。六群は井戸枠の裏込め土で、18・19層が該当する。直交する南北断面でも、18層に対応する裏込め土上半、19層に対応する裏込め土下半には、土質・土色・包含物などの要素において東西断面と同じ内容が観察された。

井戸中央には、方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置される。四隅に柱はなく、横棧は二段確認された。上下二段の横棧の間は、全てのコーナーで角材を支持材として縦位に嵌めこむ構造となっている。発掘時には、南西の

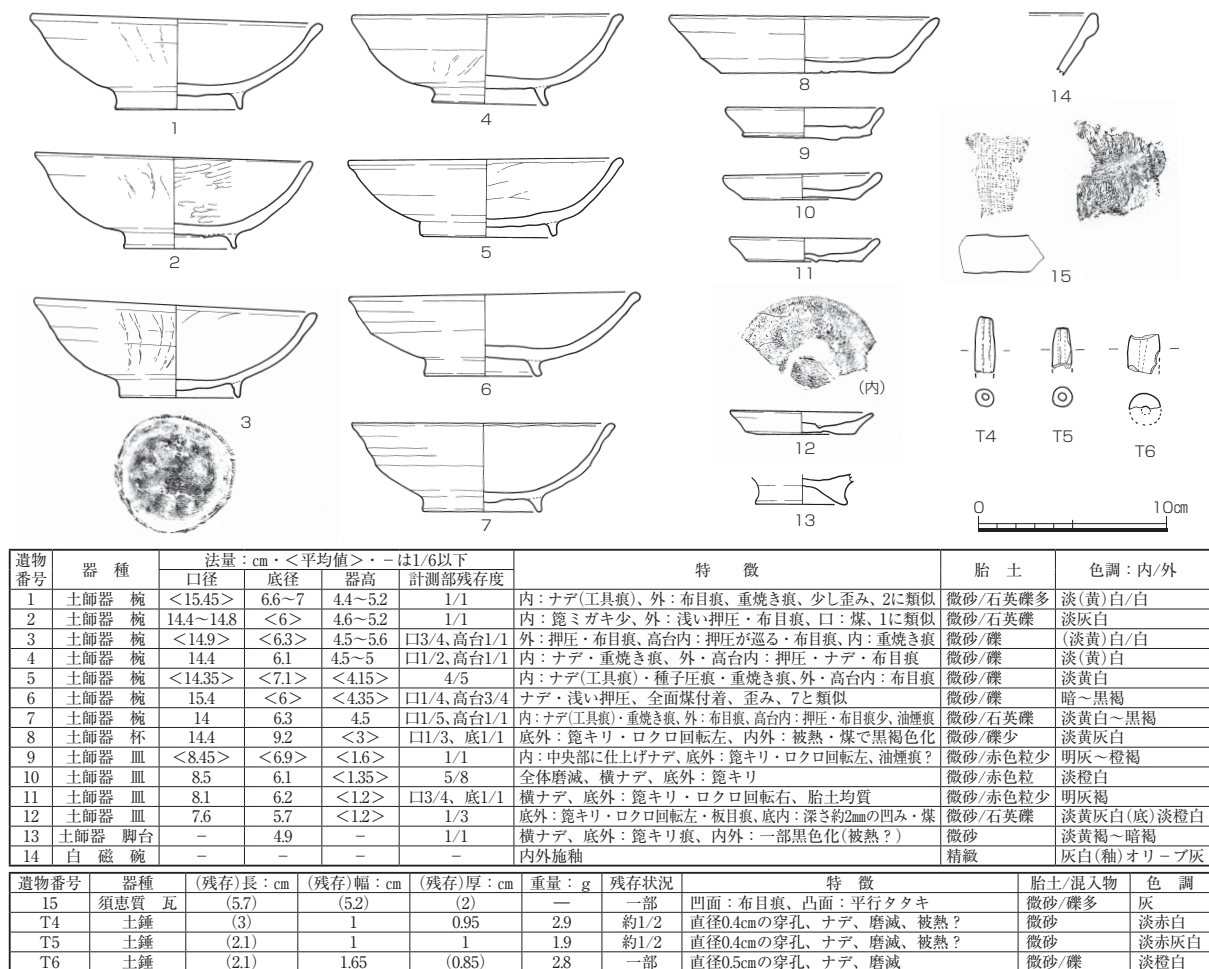


図73 井戸4出土遺物(1) (縮尺1/4)

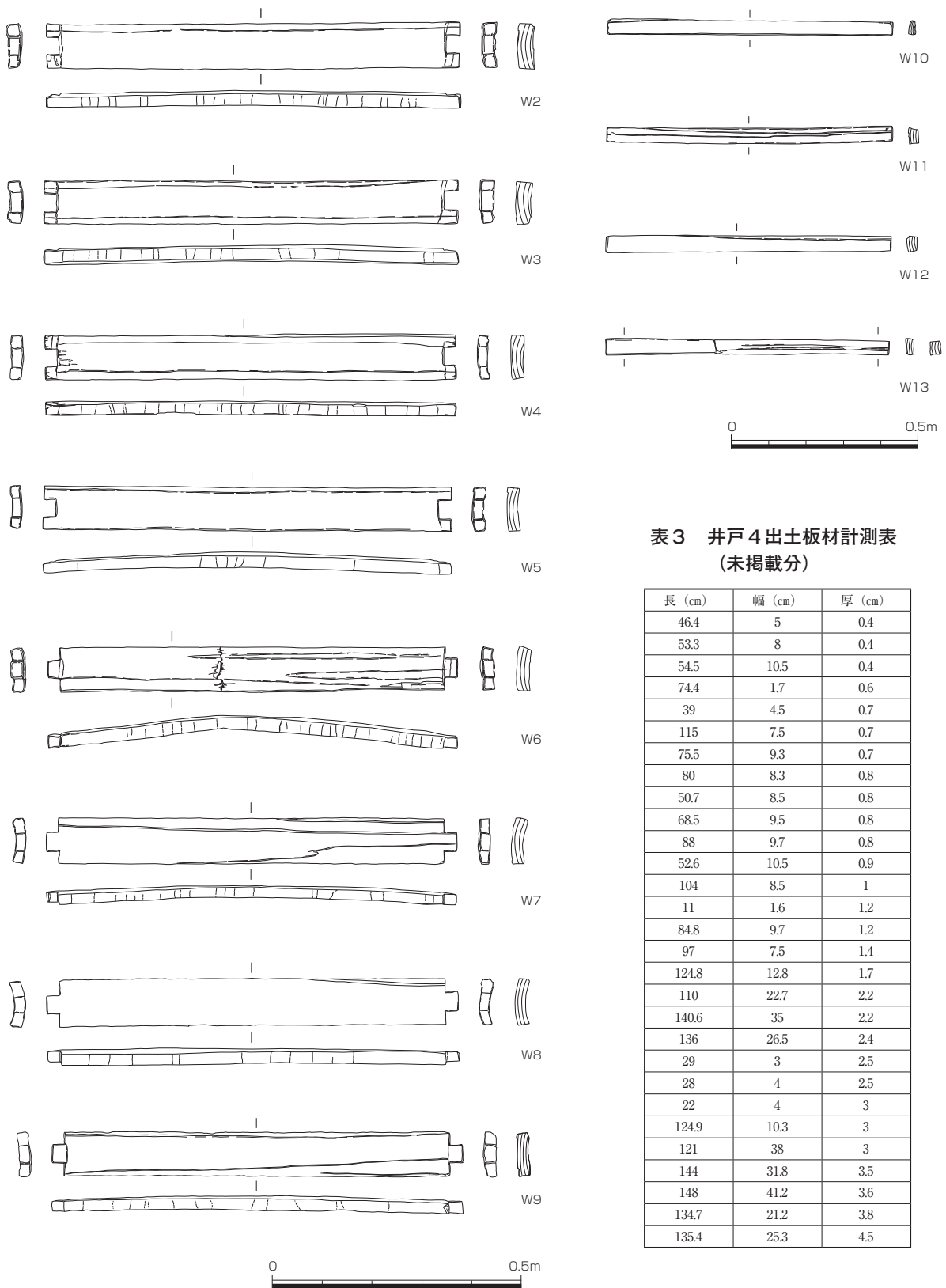
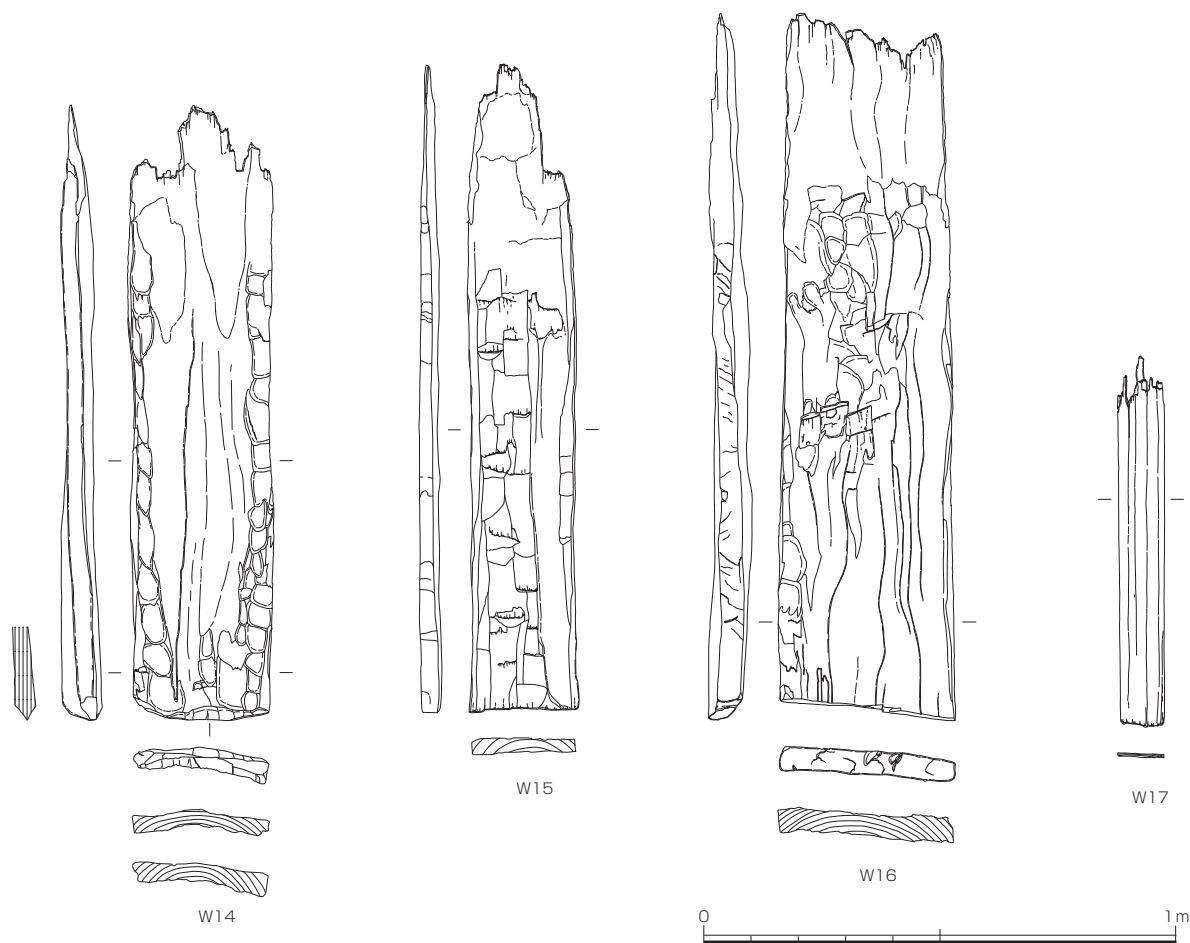


図74 井戸4出土遺物(2) (縮尺1/12・1/16)

角材は外れて内側に倒れこんでいた。縦位に立てて使用された板材は、幅広のものを一辺に数枚用い、隣り合う板材の木端同士を重ねながら立て並べ、細い板材は外側から隙間を塞ぐように用いられる。

遺物は土師質土器碗・杯・皿のほか、白磁碗、瓦、土錘が出土した。その他に井戸枠構成材を取り上げた。井戸枠構成材のうち、横棧は両端凸部、両端凹部に加工した直方体の角材を三枚組にし、直角に接合している。横棧の凸部、凹部にはのこぎりによる切削痕がみられる。仕口間の長さはすべてほぼ76cmとなっており、枠を組み上げた際に歪みのでない寸法になっている。板材は33枚を取り上げている。厚手のものには、手斧等の工具によるはつきり痕が周縁部に確認されるもの、部分的に施されるものがある。はつきり痕が部分的や周縁に確認されるも



| 番号  | 器 種            | 残存長 (cm) | 残存幅 (cm) | 厚 (cm) | 特 徴                                  |
|-----|----------------|----------|----------|--------|--------------------------------------|
| W2  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 83       | 9.2      | 3.1    | 両木口に平ほぞ切り出し、木端にはつきり痕                 |
| W3  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 83       | 8.9      | 3.3    | 両木口に平ほぞ切り出し、一部のこぎり痕、木端にはつきり痕         |
| W4  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 82.5     | 9.4      | 2.6    | 両木口に平ほぞ切り出し、木端にはつきり痕                 |
| W5  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 82.2     | 8.9      | 2.4    | 両木口に平ほぞ切り出し、一部のこぎり痕、木端にはつきり痕         |
| W6  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 82.3     | 9.2      | 2.7    | 中間部で折れる、両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、木端にはつきり痕 |
| W7  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 82.3     | 9.3      | 2.5    | 両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、木端にはつきり痕         |
| W8  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 82.5     | 9.4      | 2.2    | 両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、木端にはつきり痕         |
| W9  | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 82.3     | 9        | 2.5    | 両木口に平ほぞ造り出し、木端にはつきり痕                 |
| W10 | 井戸枠・支保材 (縦位)   | 76.3     | 4.2      | 1.9    | 割り裂き製材、両木口にのこぎり痕                     |
| W11 | 井戸枠・支保材 (縦位)   | 76.5     | 4.2      | 2.6    | 割り裂き製材、両木口にのこぎり痕                     |
| W12 | 井戸枠・支保材 (縦位)   | 76.2     | 4.6      | 2.8    | 割り裂き製材、両木口にのこぎり痕                     |
| W13 | 井戸枠・支保材 (縦位)   | 76.1     | 4.5      | 2.8    | 割り裂き製材、両木口にのこぎり痕                     |
| W14 | 井戸枠・板          | 130.4    | 30.6     | 5.1    | 打ち割り後、木表縁辺部、木端、木口は手斧ではつきり            |
| W15 | 井戸枠・板          | 137.5    | 23.1     | 3.4    | 打ち割り後、木表、木端は手斧ではつきり                  |
| W16 | 井戸枠・板          | 143.5    | 35.5     | 5.5    | 打ち割り後、木表、木端、木口は手斧ではつきり               |
| W17 | 井戸枠・板          | 78.2     | 9.8      | 0.7    | 打ち割り製材                               |

図75 井戸4出土遺物(3) (縮尺1/16)

のでは、表裏面とも割り裂き痕がのこされたままである。平滑に仕上げられている木口、木端には手斧等の工具によるはつきり痕が観察できる。W14では、井戸掘り方底面に当たる木口の断面が鋭角になるよう、木表・木裏の両面から手斧で切削している。

本井戸の時期は出土遺物から中世前半（12世紀中頃）と位置づけられる。

#### 井戸5（図76～80、図版22・23・41）

A地点南西隅、CW44区に位置する。調査地点西側は矢板で区画されており、A地点では全体のおよそ2／3を検出した。調査区外に位置した未調査部分は2002年に実施された周辺外構工事に伴う立会調査時（E地点）に

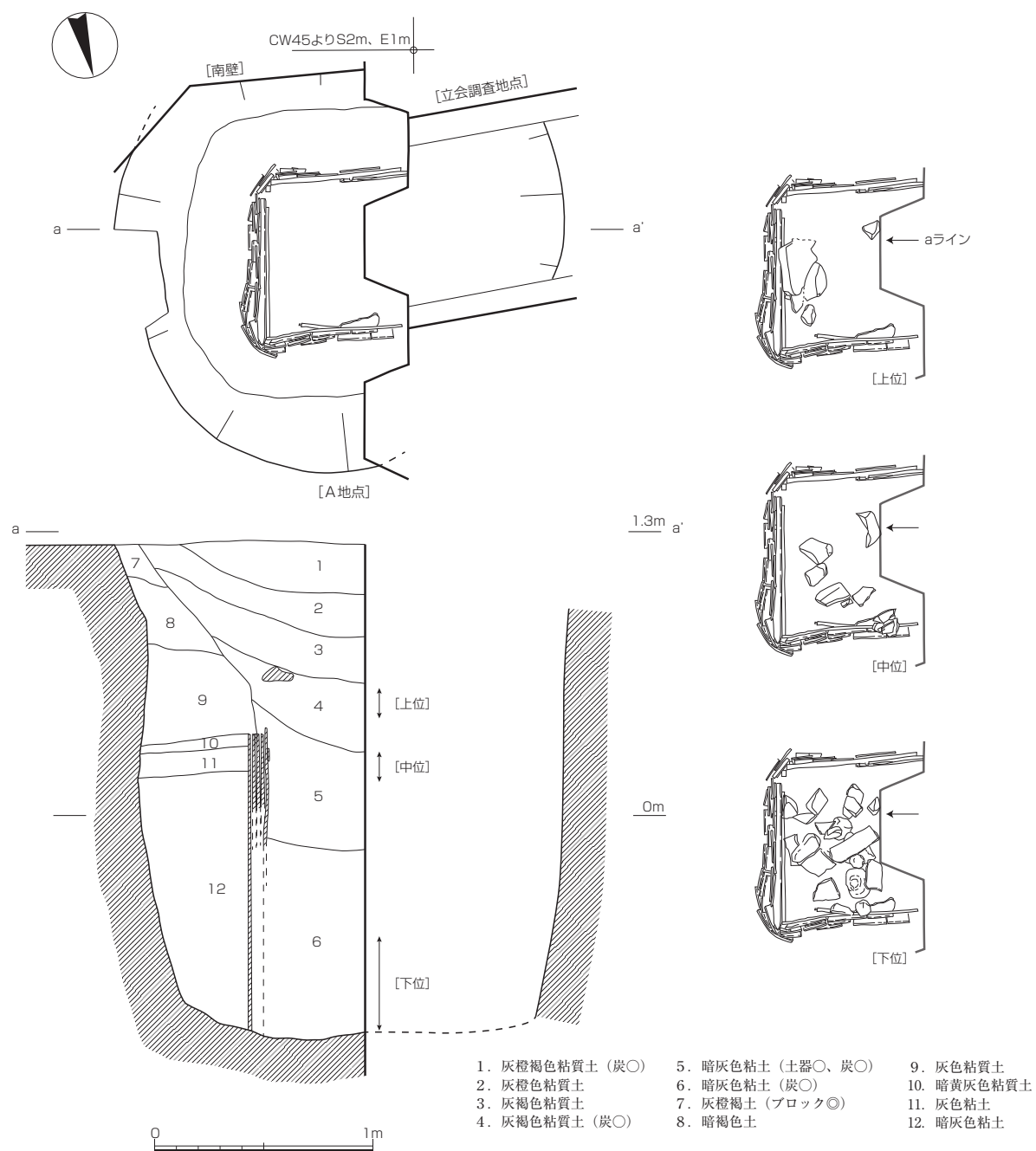


図76 井戸5（縮尺1/30）

表4 井戸5出土礫一覧

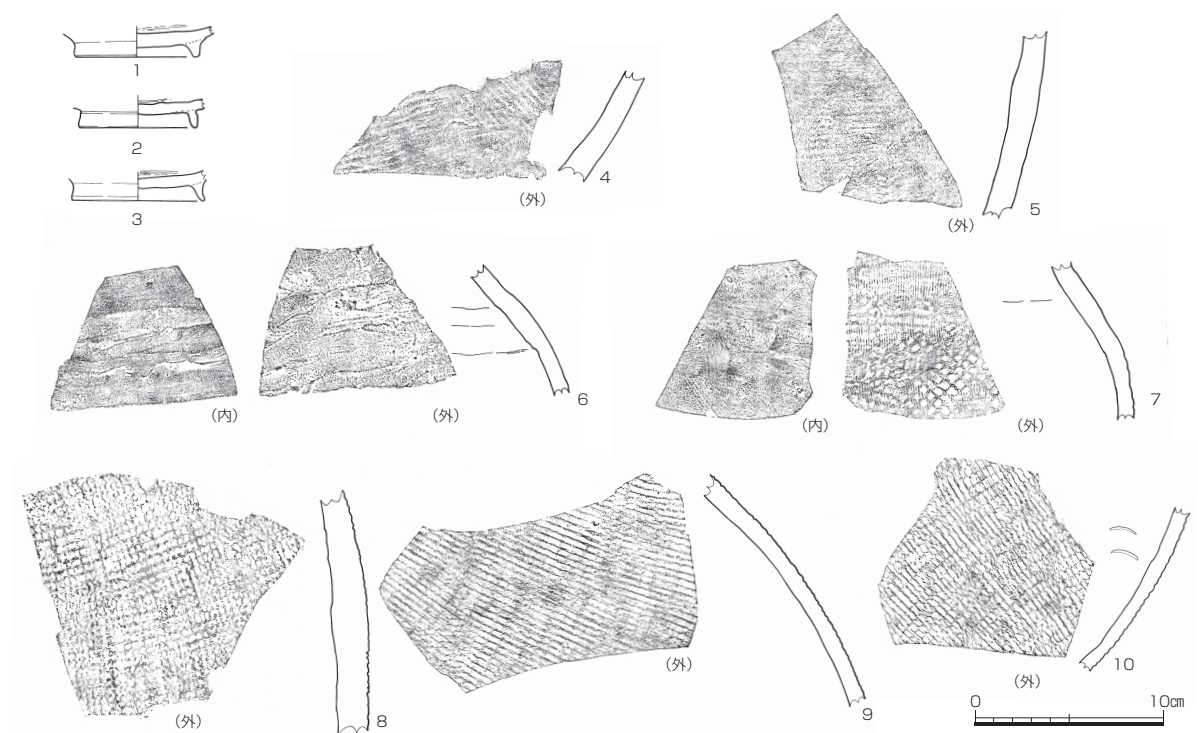
| 報告<br>番号 | 長さ：cm | 幅：cm | 厚さ：cm | 重量：g   | 石材        | 備考         | 出土レベル：m |       | 位置 |
|----------|-------|------|-------|--------|-----------|------------|---------|-------|----|
|          |       |      |       |        |           |            | 上面      | 下面    |    |
| 1        | 15    | 9    | 7.1   | 1140.2 | 中粒砂岩      | 円礫         | 0.67    | 0.53  | 上位 |
| 2        | 10.5  | 15.9 | 6.2   | 1147   | 凝灰角礫岩     |            | 0.6     | 0.47  |    |
| 3        | 14.1  | 19.6 | 9.3   | 4420   | 砂岩ホルンフェルス | 角礫・割石      | 0.61    | 0.46  |    |
| 4        | 14.8  | 22.8 | 6.6   | 3833   | 石英斑岩      | 円礫         | 0.55    | 0.37  |    |
| 5        | 8.7   | 4.8  | 4.8   | 475.4  | 砂岩ホルンフェルス | 円礫         | 0.2     | 0.12  | 中位 |
| 6        | 10.7  | 12.7 | 5.9   | 1057   | 花崗岩       | 角礫・割石・被熱   | 0.2     | 0.12  |    |
| 9        | 9.8   | 7.6  | 7.6   | 1061.7 | 泥質砂岩      | 円礫         | 0.13    | 0.04  |    |
| 10       | 17.7  | 10.7 | 6     | 1767   | 安山岩       | 円礫         | －       | －0.48 | 下位 |
| 11       | 19.6  | 8    | 5.6   | 1172   | 流紋岩質凝灰岩   | 円礫         | －       | －0.48 |    |
| 12       | 10    | 7.5  | 2     | 213    | カタクレイサイト  | 角礫・割石      | －       | －0.58 |    |
| 13       | 7.2   | 11.5 | 6.2   | 608.9  | 細粒花崗岩     | 角礫・割石・被熱   | －0.5    | －0.6  |    |
| 14       | 15    | 6.4  | 7     | 807.7  | 流紋岩質凝灰岩   | 円礫         | －0.55   | －0.65 |    |
| 15       | 13    | 24.3 | 6.9   | 2798   | 細粒閃緑岩     | 円礫         | －0.54   | －0.66 |    |
| 16       | 9.2   | 14.5 | 4     | 589.3  | 粘板岩       | 円礫・割石・被熱   | －0.65   | －     |    |
| 17       | 11.8  | 9.5  | 6     | 661    | 閃緑岩       | 角礫・割石      | －0.67   | －0.76 |    |
| 18       | 14.4  | 14.4 | 9.2   | 2098.3 | 花崗岩       | 円礫・割石・被熱？  | －0.68   | －0.79 |    |
| 19       | 16    | 10   | 8.8   | 1919.5 |           | 角礫・割石      | －0.75   | －0.77 |    |
| 20       | 13.2  | 11   | 4.2   | 717.2  | 泥岩        | 角礫・割石      | －0.75   | －0.78 |    |
| 21       | 7.3   | 6.5  | 5.4   | 284.1  | 細粒花崗岩     | 角礫・割石・被熱顕著 | －0.8    | －0.82 |    |
| 22       | 18.7  | 13.9 | 7.7   | 2242.6 | 細粒閃緑岩     | 角礫・割石      | －       | －0.9  |    |
| 23       | 16.6  | 13.2 | 8.4   | 1807.4 | 流紋岩       | 角礫・割石      | －0.85   | －0.95 |    |
| 24       | 18.8  | 14.2 | 7     | 1822.7 | 安山岩       | 角礫・割石・被熱顕著 | －       | －0.92 |    |
| 25       | 18.5  | 13   | 9.1   | 2345.6 | 細粒花崗岩     | 角礫・割石・被熱顕著 | －       | －0.93 |    |
| 26       | 11.8  | 11.3 | 10.5  | 1544.2 | 安山岩       | 角礫・割石・被熱   | －       | －0.95 |    |
| 27       | 17.5  | 11.6 | 9.3   | 1598   | 砂岩ホルンフェルス | 角礫・割石      | －       | －     |    |
| 28       | 12.3  | 5    | 3.5   | 229.1  | 流紋岩質凝灰岩   | 角礫・割石      | －       | －     |    |

において、幅約0.9mの管路内で検出され、北西側の一部が調査された。検出層は＜4層＞で、検出標高は1.24m、底面高は－1.03mで、深さは2.27mである。

井戸の中心部には方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置されている。平面形については、調査範囲外の部分もあるが、確認された掘り方ラインを総合すると、おおむね円形になると推定される。底面については、E地点は狭隘ななかでの調査となったため、底面の形状を確認できなかった。A地点では西側以外の三辺がのこる中央部の方形井戸枠に相似する底面ラインが確認されており、隅丸方形の平面形を呈すると考えられる。規模は、上面で東西2.06m、南北1.82m以上、底面で南北1.32m、東西0.9m以上をはかる。断面形はY字形を呈する。

埋土は12層に分層される。土質、包含物、および木枠との関係を考慮し、六群に大別する。一群は井戸上半の皿状部に堆積した1～3層が該当する。一部で橙色がかかる灰～灰褐色粘質土を基調とする。1層では炭の包含がみられるが、ほかに目立った包含物はない。またレンズ状の層が整合して堆積していることが本群の特徴である。二群は4層が該当する。皿状部と井戸枠部との変換点にまたがる灰褐色粘質土層である。礫、土器の包含が認められる。礫（上位群）は標高0.37～0.53m間に数個が重なった状態で確認された。E地点においても標高0.2～0.7m前後で数個の礫が重なって検出されており、井戸枠部と皿状部の変換点まで堆積が進行した段階で井戸内に礫が入れたことを示す。三群は5・6層が該当する。いずれも土器片・炭小片を包含する暗灰色粘土層であるが、層理面の下位、標高－0.2m付近において、層厚約3cmと薄く、側方展開の弱いレンズ状に堆積した炭層が確認できたため、その上下で二分した。5層上半部、6層下半部には礫が多く含まれる。

5層の礫（中位群）は、垂直分布では標高0.04～0.2mに分布している。平面的には、井戸枠内でも北辺から東辺にかけての周縁部に散在する。6層の礫（下位群）は、標高約－0.5～－1.0mの間に分布する。このなかでも、礫の下面レベルが、①約－0.5～－0.65m、②約－0.75～－0.8m、③約－0.9～－1.0mの範囲でまとまる①～③の3小群に分離される。下位群では、上半に円礫、下半に角礫が多い傾向にあり、下半の角礫の多くが割石である。



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |        |    |        | 特 徴                              | 胎 土    | 色 調：内/外  |
|----------|-------|---------------------|--------|----|--------|----------------------------------|--------|----------|
|          |       | 口径                  | 底径     | 器高 | 計測部残存度 |                                  |        |          |
| 1        | 土師器 碗 | －                   | <6.55> | －  | 1/1    | 内：篋ミガキ、底外：押圧・亀裂                  | 微砂     | 白        |
| 2        | 土師器 碗 | －                   | <6.3>  | －  | 1/1    | 内：篋ミガキ、底外：ナデ                     | 微砂     | 白        |
| 3        | 土師器 碗 | －                   | 6.5    | －  | －      | 内：篋ミガキ・煤or墨多、底外：ナデ・煤少            | 微砂     | 白        |
| 4        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・押圧、外：平行タタキ後ナデ、傾き不明瞭、5と同一個体？ | 微砂     | 淡灰(断)淡灰白 |
| 5        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・ケズリ痕少、外：平行タタキ後縦ナデ、傾き不明瞭     | 微砂     | 淡灰(断)淡灰白 |
| 6        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・一部ケズリ痕、外：ナデ、光沢(薄い自然釉？)      | 微砂・緻密  | 灰        |
| 7        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・下半工具痕、外：格子目タタキ後縦ハケ・硬質・光沢    | 微砂・緻密  | 青灰/暗青灰   |
| 8        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・ケズリ痕、外：格子目タタキ・沈線、傾き不明瞭      | 微砂/黒色粒 | 灰/灰～灰黒   |
| 9        | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：ナデ・押圧(雑)、外：格子目タタキ、傾き不明瞭        | 微砂     | 灰        |
| 10       | 須恵器 甕 | －                   | －      | －  | －      | 内：当て具痕、外：格子目タタキ、傾き不明瞭、やや瓦質、(断)白色 | 微砂/粗砂少 | 暗灰褐/灰黒   |

図77 井戸5出土遺物(1) (縮尺1/4)

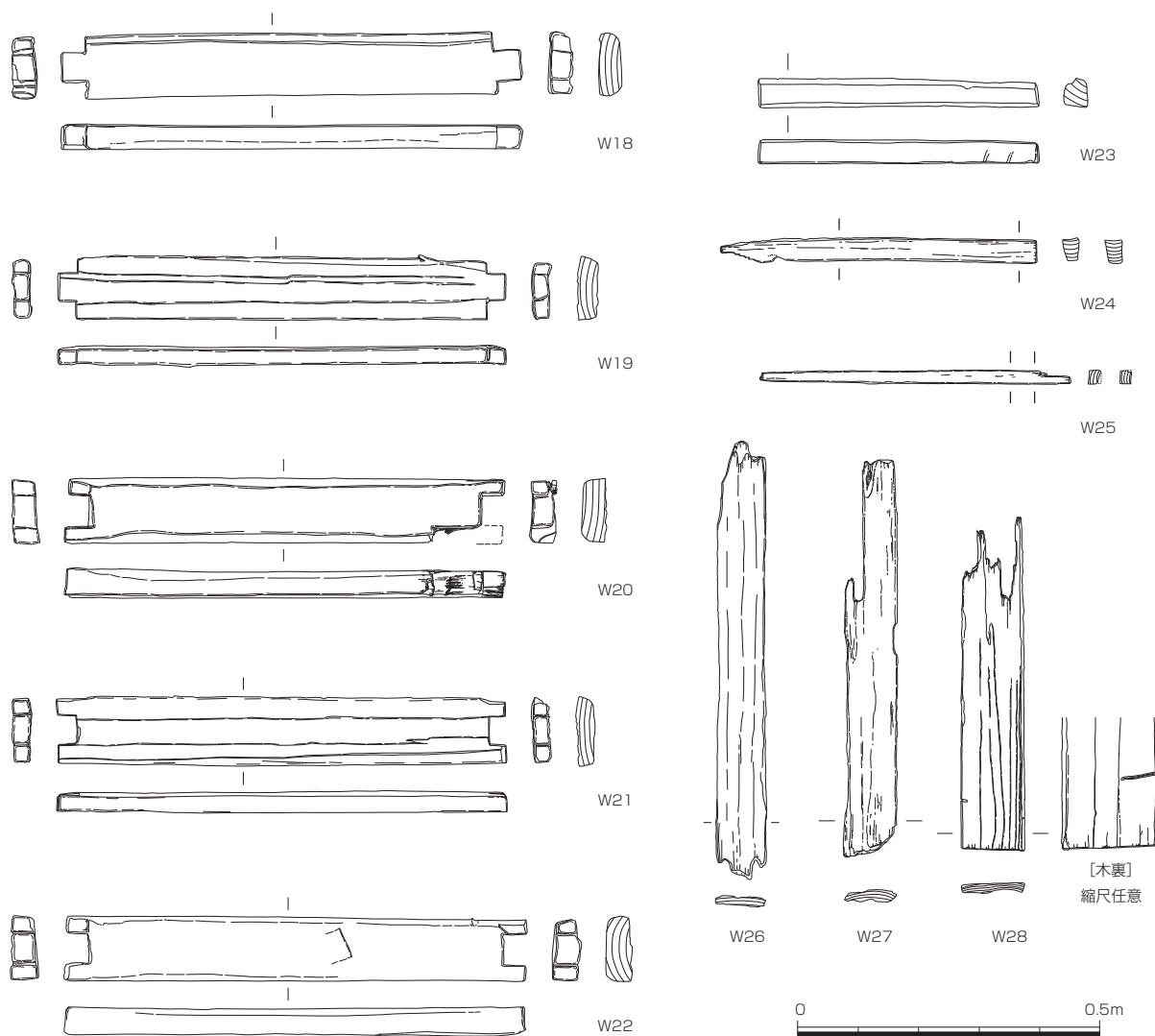
また、被熱痕を有するものも目立つ。

四群は7・8層が該当する。粒径2～5cmの白色土ブロックを多く含む灰橙褐色～暗褐色土である。井戸使用時には本群の形成する斜面が皿状部の法面となっていたこと、ブロックを多く含む土であることから、本群は人為的な埋土であると考えられる。五群は井戸枠の裏込め土で、9・10層が該当する。9層は皿状部と井戸枠部の変換点にあたる部分に堆積した灰色粘質土で、厚く堆積している。井戸枠の裏込め土となる10層は暗黄灰色粘質土で、層厚は約5cmと薄い。いずれも粒径2～7cmの黄色・白色土ブロックを含んでいる。六群は灰～暗灰色粘土で、11・12層が該当する。粒径3～7cmの青灰色土ブロックを含む。いずれも井戸枠の裏込め土である。

井戸中央には、方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置される。横棧は一段分のみが確認された。その代わりに、井戸枠の天端では、東辺・北辺で縦板材の内側に横板(図78-W26・27)が差し渡されている状況が確認されている。ほぞを作出した横棧に代わり、縦板の支保材として用いられたものと考えられる。隅柱は北東・南東隅にはなく、E地点で検出した西辺でも柱は確認されなかったため、当初から柱のない枠であったと考えられる。横棧で組まれた枠の外側には、縦位に立てた板材が使用されている。板材は二重、三重に重ねて立てられており、乱雑な配列状況である。三枚組のほぞを作出する角材を用いた横棧が一段分のみの使用であることも併せ、先述の井戸4に用いられた井戸枠と比較すると粗雑な作りの井戸枠であるといえよう。

遺物は土師質土器碗片、須恵器壺片・甕片が出土した。本井戸は他の井戸と比較して土器類の出土量が寡少である。また、A地点では井戸枠構成材を取り上げたが、E地点では井戸枠構成材の抜き取りによる法面崩壊のおそれがあること、工事が井戸枠まで及ばないことから、現地で埋め戻している。横桟についても西辺を除く三辺で一段分を取り上げた。

縦板として用いられた板材のうち、取り上げが可能だったA地点のものは82枚である。その法量は幅約8～15



| 番号  | 器種             | 残存長 (cm) | 残存幅 (cm) | 厚 (cm) | 特徴                      |
|-----|----------------|----------|----------|--------|-------------------------|
| W18 | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 76.3     | 10.2     | 3.8    | 両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕     |
| W19 | 井戸枠・横木 (平ほぞ凸形) | 73.9     | 10.4     | 3.4    | 両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕     |
| W20 | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 76.4     | 11.3     | 4.3    | 両木口に平ほぞ切り出し、一部のこぎり痕     |
| W21 | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 74.5     | 11.4     | 3      | 両木口に平ほぞ切り出し、一部のこぎり痕     |
| W22 | 井戸枠・横木 (平ほぞ凹形) | 76.4     | 10.6     | 4.3    | 両木口に平ほぞ切り出し、一部のこぎり痕     |
| W23 | 井戸枠・支保材 (縦位)   | 46.5     | 4.9      | 4      | 割り裂き製材、両木口にのこぎり痕        |
| W24 | 井戸枠・棒状加工材      | 52.4     | 3.9      | 2.9    | 表裏・木端の4面は面取り、片側木口欠損     |
| W25 | 井戸枠・棒状加工材      | 51.5     | 2.3      | 1.8    | 表裏・木端の4面は面取り、両木口欠損      |
| W26 | 井戸枠・板          | 72.4     | 8.2      | 1.4    | 割り裂き製材、木口に2か所の挟り        |
| W27 | 井戸枠・板          | 65.7     | 8.8      | 2      | 割り裂き製材、木口は斜め方向に切断、工具痕あり |
| W28 | 井戸枠・板          | 56.7     | 9.9      | 1.6    | 割り裂き製材、木裏に溝状のこぎり痕       |

図78 井戸5出土遺物(2) (縮尺1/12)

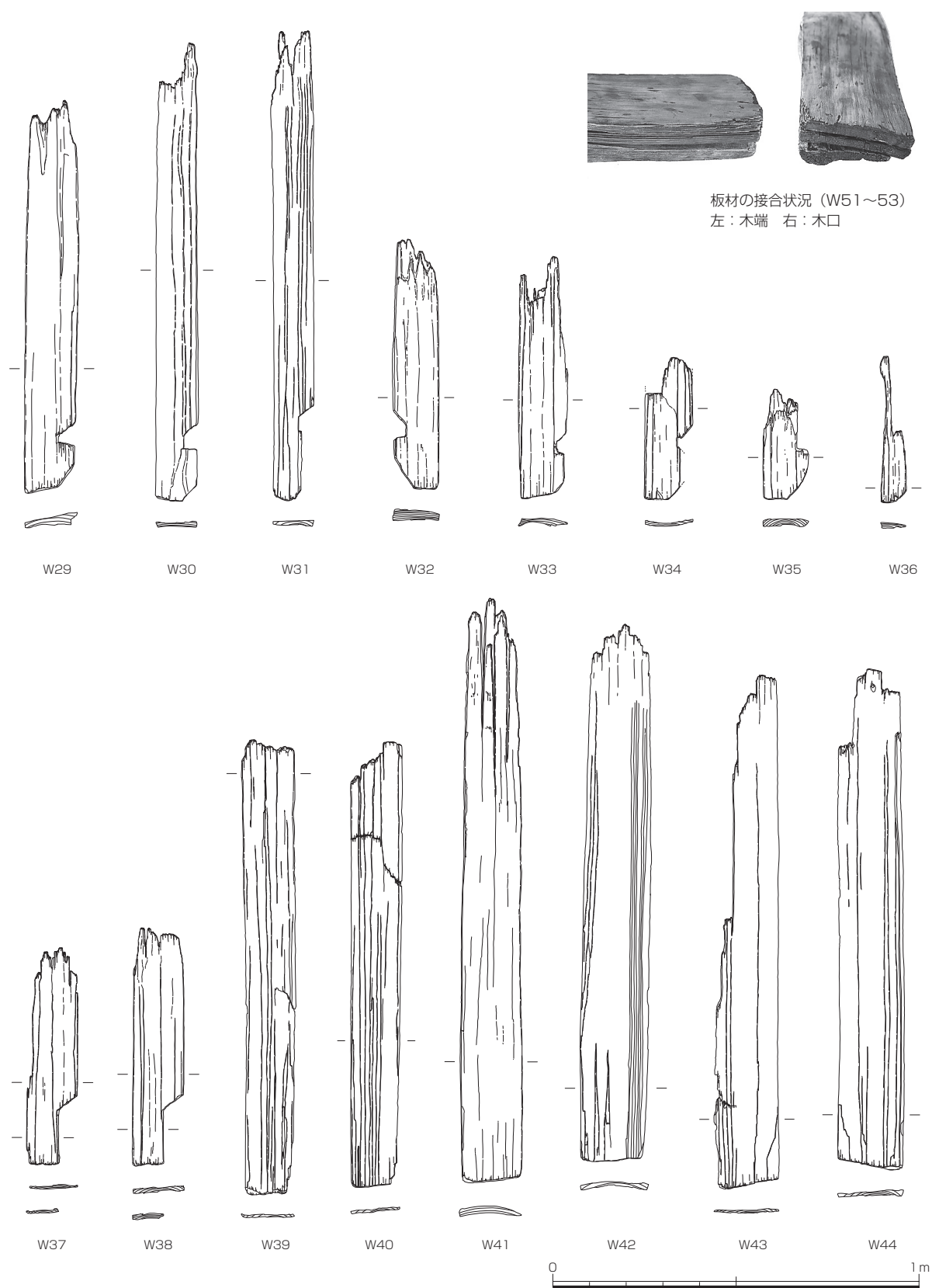
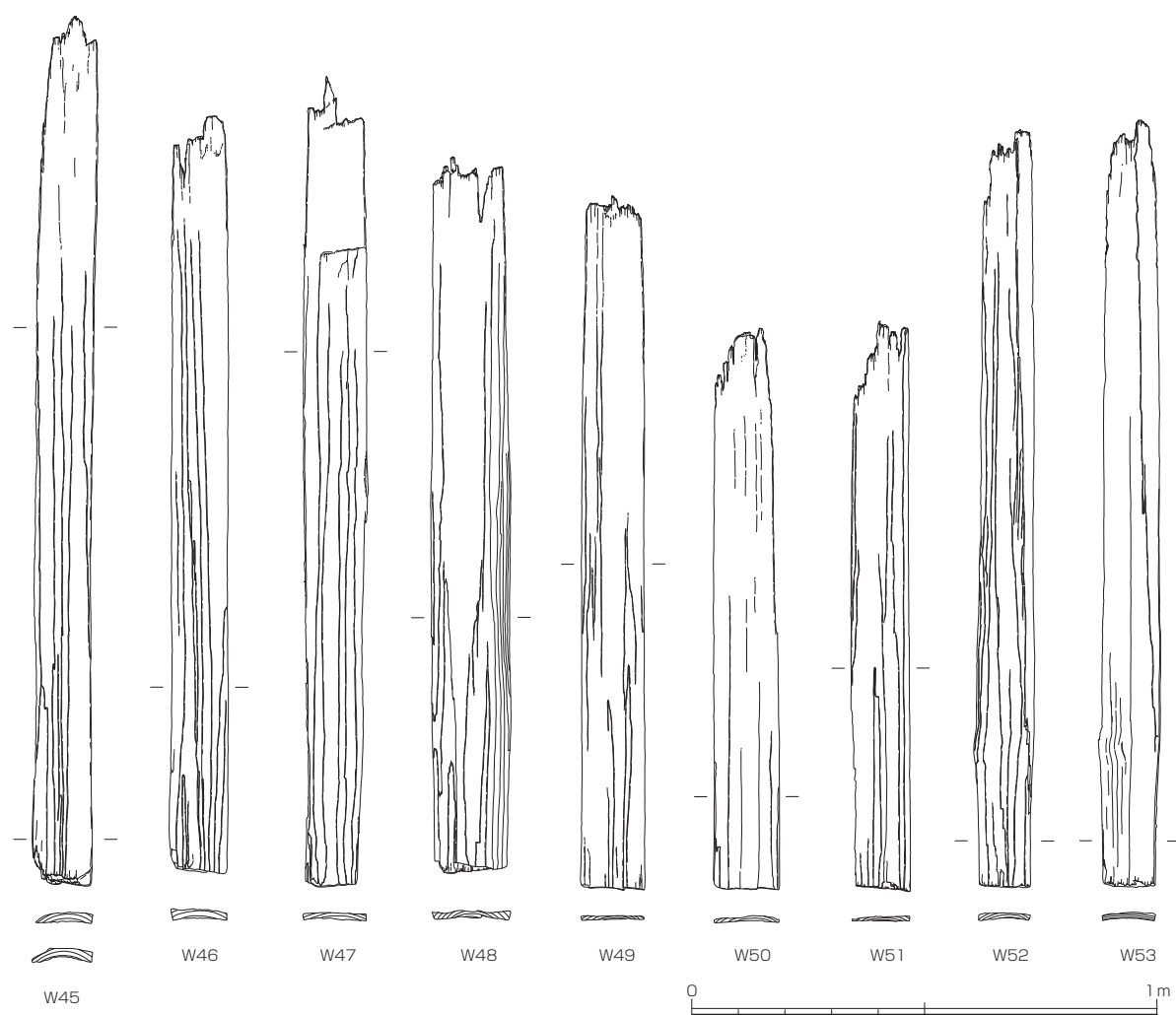


図79 井戸5出土遺物(3) (縮尺1/12)



| 番号  | 器種    | 残存長 (cm) | 残存幅 (cm) | 厚 (cm) | 特徴                                 |
|-----|-------|----------|----------|--------|------------------------------------|
| W29 | 井戸枠・板 | 107.4    | 14.3     | 3.2    | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W30 | 井戸枠・板 | 125      | 11.7     | 1.6    | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W31 | 井戸枠・板 | 128.2    | 11.6     | 1.5    | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W32 | 井戸枠・板 | 68.2     | 12.6     | 3.3    | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W33 | 井戸枠・板 | 66.1     | 13.6     | 2      | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W34 | 井戸枠・板 | 38.9     | 13       | 1.1    | 割り裂き製材、台形の切り欠き                     |
| W35 | 井戸枠・板 | 30.1     | 12.5     | 2.1    | 割り裂き製材、台形?の切り欠き                    |
| W36 | 井戸枠・板 | 40       | 6.9      | 1.5    | 割り裂き製材                             |
| W37 | 井戸枠・板 | 59.2     | 13.8     | 1      | 割り裂き製材、斜め方向に切り出し、工具痕あり、W38と接合      |
| W38 | 井戸枠・板 | 64.9     | 13.9     | 1.3    | 割り裂き製材、斜め方向に切り出し、工具痕あり、W37と接合      |
| W39 | 井戸枠・板 | 124.4    | 14.5     | 0.7    | 割り裂き製材、木口に工具による切断痕、W40と接合          |
| W40 | 井戸枠・板 | 121.7    | 14       | 0.7    | 割り裂き製材、木口に工具による切断痕、W39と接合          |
| W41 | 井戸枠・板 | 159.4    | 17       | 1.9    | 割り裂き製材、木口に工具による切断痕、W42と接合          |
| W42 | 井戸枠・板 | 146.8    | 18.5     | 1.8    | 割り裂き製材、木口に工具による切断痕、W41と接合          |
| W43 | 井戸枠・板 | 140.3    | 17.5     | 0.8    | 割り裂き製材、木口は木目に対して斜交、工具による切断痕、W44と接合 |
| W44 | 井戸枠・板 | 136.6    | 17.9     | 1.6    | 割り裂き製材、木口は木目に対して斜交、工具による切断痕、W43と接合 |
| W45 | 井戸枠・板 | 187      | 12.8     | 2.2    | 割り裂き製材、W46と接合                      |
| W46 | 井戸枠・板 | 162.8    | 12.6     | 2.4    | 割り裂き製材、W45と接合                      |
| W47 | 井戸枠・板 | 174.2    | 13.7     | 1.4    | 割り裂き製材、W48と接合                      |
| W48 | 井戸枠・板 | 154.2    | 17.2     | 2      | 割り裂き製材、W47と接合                      |
| W49 | 井戸枠・板 | 149.2    | 13.8     | 0.9    | 割り裂き製材、W49・50と接合                   |
| W50 | 井戸枠・板 | 120.6    | 14.2     | 1      | 割り裂き製材、W48・50と接合                   |
| W51 | 井戸枠・板 | 122.6    | 12.5     | 1      | 割り裂き製材、W48・49と接合                   |
| W52 | 井戸枠・板 | 162.8    | 12.7     | 1.5    | 割り裂き製材、W53と接合                      |
| W53 | 井戸枠・板 | 165.2    | 13.1     | 1.6    | 割り裂き製材、W52と接合                      |

図80 井戸5出土遺物(4) (縮尺1/12)

表5 井戸5出土板材計測表（未掲載分）

| 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) | 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) | 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) | 長 (cm) | 幅 (cm) | 厚 (cm) |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 42.3   | 6.4    | 0.6    | 41.8   | 5.1    | 1.1    | 62     | 8.4    | 1.5    | 128.1  | 16.9   | 1.8    |
| 44.8   | 7      | 0.6    | 24     | 6.9    | 1.1    | 47.1   | 10     | 1.5    | 63.9   | 11.9   | 2      |
| 54.1   | 6.3    | 0.7    | 64.9   | 10.9   | 1.1    | 53.8   | 11.6   | 1.5    | 171.7  | 17.1   | 2      |
| 58.1   | 11.2   | 0.7    | 132.3  | 14     | 1.1    | 148.9  | 10.1   | 1.6    | 60.2   | 11.6   | 2.1    |
| 40.8   | 6.8    | 0.8    | 48.9   | 6      | 1.2    | 125    | 11.7   | 1.6    | 58.2   | 12.7   | 2.1    |
| 68.7   | 9.7    | 0.8    | 21.6   | 8      | 1.2    | 145.5  | 13.6   | 1.6    | 138.5  | 11     | 2.2    |
| 27.1   | 7      | 0.9    | 56.7   | 9.8    | 1.2    | 151.7  | 18.3   | 1.6    | 70.8   | 12.6   | 2.2    |
| 44.2   | 10.9   | 0.9    | 30.2   | 14.7   | 1.2    | 166.1  | 12.1   | 1.7    | 96.3   | 10.1   | 2.3    |
| 48.9   | 13.3   | 0.9    | 141.6  | 11.3   | 1.3    | 30.8   | 12.2   | 1.7    | 68.5   | 8.3    | 2.4    |
| 31.4   | 3.5    | 1      | 175.7  | 13.7   | 1.3    | 46.8   | 6.1    | 1.8    | 14.6   | 3.5    | 2.5    |
| 69     | 8.4    | 1      | 42.9   | 7.5    | 1.4    | 48.4   | 10.8   | 1.8    | 51.7   | 12.2   | 2.6    |
| 51.3   | 8.6    | 1      | 47     | 7.5    | 1.4    | 50.1   | 12     | 1.8    | 61.8   | 22.8   | 3      |
| 68.2   | 11.4   | 1      | 55.9   | 12.8   | 1.4    | 145.5  | 13.8   | 1.8    |        |        |        |
| 51.8   | 12.7   | 1      | 41.4   | 14.5   | 1.4    | 162.2  | 14.6   | 1.8    |        |        |        |

cm、厚さは1～2cm程度が大半で、幅が16cmを超えるもの、厚さ3cmを超えるものは少ない（表5）。井戸枠に用いられた板材では、8組19枚が接合した（図79・80-W37～53）。いずれも木表、木裏に割り裂き痕が認められ、原材を打ち割って製材したものであった。また、端部の切り欠き痕の形状から、折置組の梁材を打ち割って製材したものが含まれていることが明らかになった（W29～34）。そのほか、木口に段差をつけるように切り出すもの（W37・38）、斜めに切り出すもの（W43・44）があり、いずれも建築材を再加工して井戸枠に転じたものと考えられる。

本井戸の時期は出土遺物から中世前半（12世紀）に位置づけられる。

## 4. 土坑

### 土坑13（図61・81・82、図版23・37）

A地点東辺南側、CU35区に位置する。＜5層＞で検出した。東側溝の東側で検出されており、土坑西半部を失っている。また、土坑中央部に近代以降の建物基礎杭が打ち込まれており、破壊をうけている。検出面の標高は1.02m、底面高は0.49mで、深さは0.53mである。

平面形は上面、底面ともに円形と推定される。規模は上面で径約0.96m、底面で径約0.44mである。断面形は椀形である。

埋土は3層に分層される。1層は淡黒灰色土で、灰を多く含むほか、焼土や暗黄褐色土ブロックを包含する。2層は黒灰色土で、土器大形片を多量に包含しており、その中には被熱痕のある礫も混じるが、灰や焼土の包含はみられない。2層上面や法面に被熱の痕跡が観察されなかったという調査時の所見を合わせると、こうした被熱痕のある礫が他所から本土坑に持ち込まれたと考えざるを得ない。3層は暗灰色粘質土で、黄褐色砂ブロックを含む。

1層では炭・灰・焼土、2層では土器がまとまって出土したことから、祭祀的な行為が執り行われたものと考えられる。

遺物は、土器がコンテナ2.5箱、礫が1箱分出土した。図化した土師質土器台付杯・杯・椀・鍋、須恵器椀・鉢といった土器

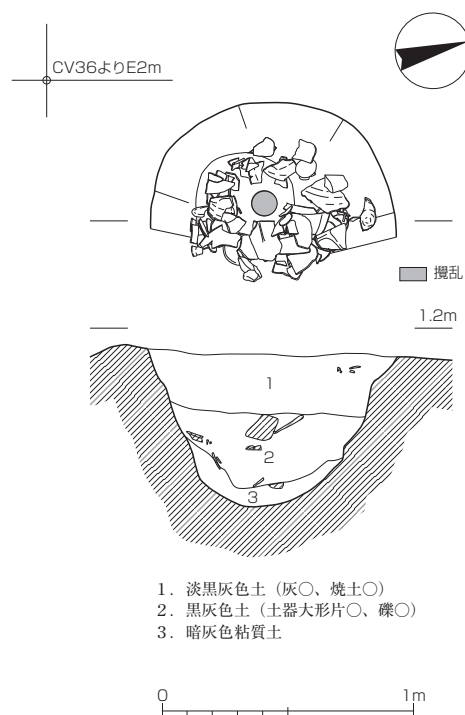


図81 土坑13（縮尺1/30）

[illegible]

圖82 土坑13出土遺物（縮尺1/4）

類のほか、被熱痕のある割石や円礫が出土している。含まれていた礫については、円礫が多数を占め、角礫も散見される。割れた痕跡をもつ礫もある。重量は多くが約0.5～1 kgで、大型のものでは約2.2kg、約3.3kgに及ぶ。

本土坑の時期は出土遺物から中世前半（11世紀後半）と位置づけられる。

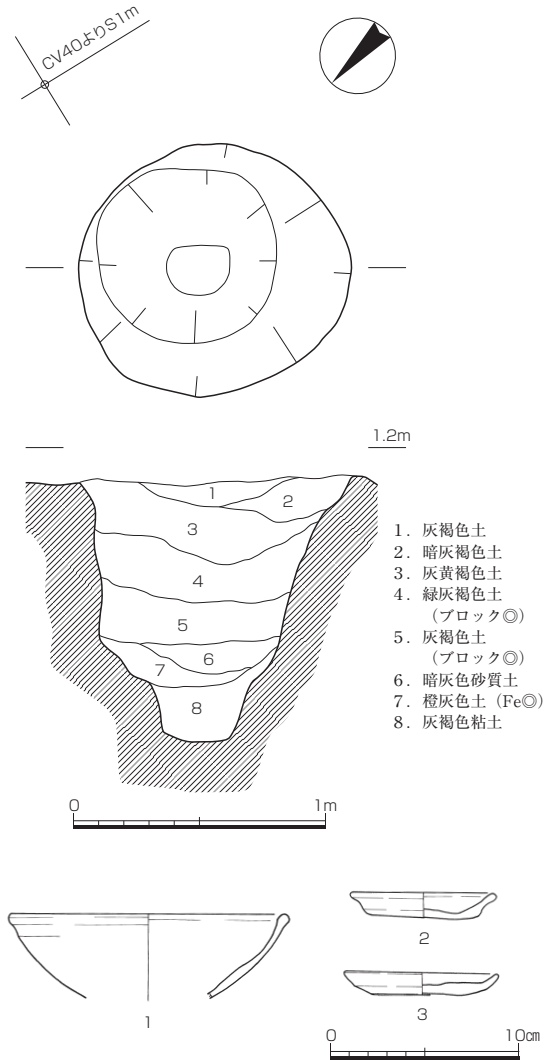
土坑14（図62・83、図版23）

A地点南辺中央、CV40区に位置する。＜5層＞で検出した。溝35・36の底面で検出されており、本土坑埋没後に溝群が掘削されたものと整理される。検出面の標高は1.08m、底面高は0.03mで、深さは1.05mである。

平面形については、上面は上層の遺構により破壊をうけており、残存部では不整な円形を呈する。底面は楕円形である。規模は上面で長軸長1.08m以上、短軸長1.0m以上、底面で長軸長0.25m、短軸長0.2mである。断面形は二段掘り状を呈する。直立～急傾斜の法面をなす箱形の掘り方の底面中央部に、径約0.2～0.25m、深さ約0.2～0.25mの規模で楕円形に掘り窪めた小穴が付随する。

埋土は8層に分層されるが、色調・土質・包含物等から四群に大別する。一群は1～3層で、褐色系の色調を呈する埋土である。鉄分の集積やブロックの包含がみられる。炭化物の包含はわずかである。二群は4・5層が該当する。灰色系の埋土で、ブロックを多く含む。三群は6・7層で、灰と砂が互層状をなす。鉄分の集積が非常に顕著であることやブロックの包含量が多いことも本群の特徴である。四群は8層で、粘性の強い灰褐色粘土層である。底面の小穴内の埋土であり、粘質のみられない埋土で構成される上方の3群とは土質の面でコントラストをなす。遺物は土師質土器が出土した。

本土坑の時期は出土遺物から中世前半（12世紀末～13世紀初）と考える。



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |    |        |           | 特 徴            | 胎 土    | 色調：内/外 |
|----------|-------|---------------------|----|--------|-----------|----------------|--------|--------|
|          |       | 口径                  | 底径 | 器高     | 計測部残存度    |                |        |        |
| 1        | 土師器 碗 | 15                  | －  | －      | 1/3       | 被熱による暗色化と表面劣化  | 微砂     | 白～暗褐   |
| 2        | 土師器 皿 | 8.2                 | 5  | <1.25> | 1/3       | 磨減、内底：重焼きによる変色 | 微砂/赤色粒 | 明橙     |
| 3        | 土師器 皿 | 7.8                 | 6  | 1.4    | □1/2、底1/1 | 磨減・劣化・一部被熱     | 微砂     | 灰黄白～暗褐 |

図83 土坑14・出土遺物（縮尺1/4・1/30）

土坑15（図61・84、図版23）

C地点中央部、CN33区に位置する。＜5層＞で検出した。検出面の標高は0.79m、底面高は0.18mで、深さは0.61mである。

平面形は上面では楕円形、底面も半分を失っているが楕円形を呈すると考えられる。規模は上面で長軸長1.25m、短軸長1.11m、底面では残存している長軸長が0.32mであり、約0.64mと復元しておく。短軸長は0.52mである。断面形は逆台形を重ねた二段掘りである。

埋土は8層に分層される。1・2層は埋没最終段階の浅いくぼみの埋土である。灰～灰褐色土で、鉄分、マンガンの凝集がみられる。3層は灰褐色土で鉄分、マンガンの凝集がみられる。断面では底面に凹凸が観察されており、4層堆積後、3層の堆積がはじまるまでに再掘削等の行為がなされたことが考えられる。4層はブロックを含む暗灰褐色土である。特に層下半部にブロックが多くみられる。5～7層は灰色系の色調で、砂と粘土が混ざり合った埋土で構成される。7層でブロックが多くみられることもあわせ、埋め戻し等の行為も想定される。8層は底部に堆積した暗灰色粘質土である。

遺物は中世土器片が出土した。本土坑の時期は出土遺物から中世前半に位置づけられる。

5. 溝

溝27 (図61・85、図版24)

A地点東半中央部から調査区中央の大きな攪乱を隔てたCQ41区を通り、D地点へと至る北西－南東方向に走行する溝で、他の中世溝とは走行方向を異にする。攪乱や調査範囲外区域を挟むが、走行方向、掘り方の形状、埋土、底面の標高などの要素から同一の溝と判断した。A地点では、平面的には1条と認識して掘削したが、断面では東壁で1条、中央部で2条が確認され、D地点では平面的にはほぼ同一の経路に掘削された新古の関係にある溝と確認された。古段階を溝27a、新段階を溝27bとする。調査区内では長さ約50mを検出した。c－c'断面では新古の関係が確認されず、A地点東半では、古段階の溝27aに完全に重複して溝27bが掘削されたと考えられる。また、D地点からb－b'断面間では、切り合いの位置関係から溝27aと溝27bは交差しているとみられる。検出面は<5層>で、検出上面の標高は0.9～1.2m、底面高は

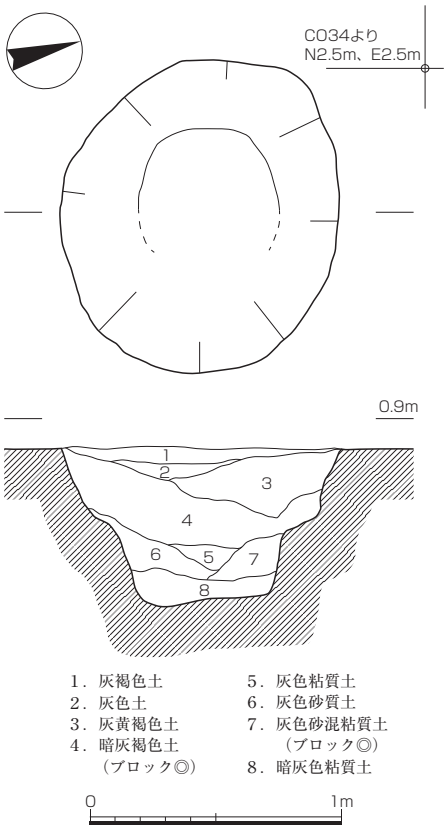
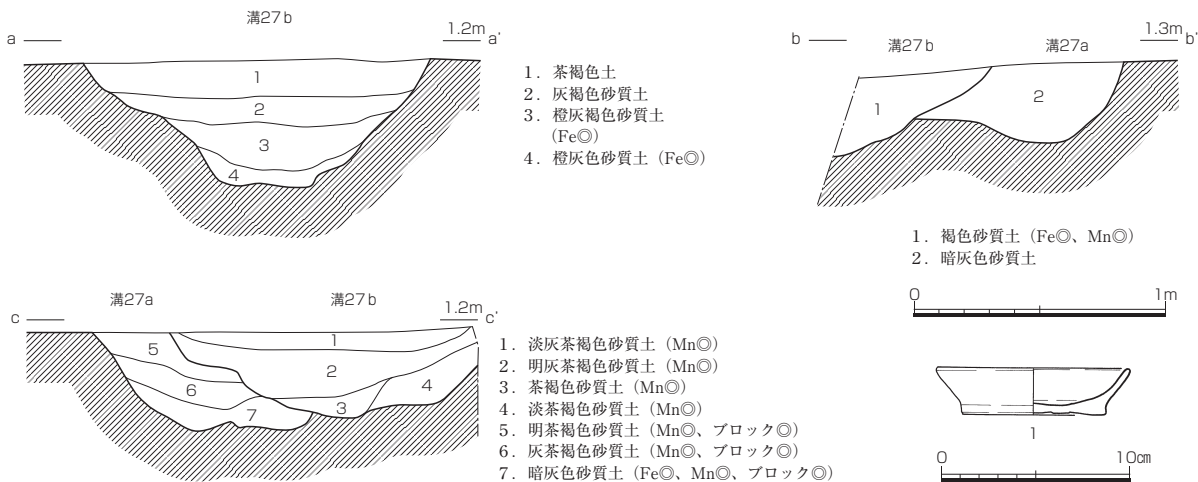


図84 土坑15 (縮尺1/30)



| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・<平均値>・－は1/6以下 |        |      |           | 特 徴                             | 胎 土     | 色調：内/外 |
|------|-------|---------------------|--------|------|-----------|---------------------------------|---------|--------|
|      |       | 口径                  | 底径     | 器高   | 計測部残存度    |                                 |         |        |
| 1    | 土師器 皿 | 10.1                | <7.65> | 2.45 | 口3/4、他1/1 | 横ナデ、外底：筥キリ、内底：一部押圧、口：煤(灯心痕?)、磨減 | 微砂/細～粗砂 | (黄)白   |

図85 溝27断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

0.32～0.81mで、深さは0.28～0.55mである。北西から南東方向に下がる傾斜を有する。幅は1.38mで、断面形は逆台形である。

埋土はa-a'断面では4層、c-c'断面では7層に分層される。a-a'断面は1層が暗黄褐色土ブロックを含む茶褐色土、2～4層は灰～灰褐色系の色調を呈する砂質土で、いずれも鉄分の沈着が認められ、3層では暗黄褐色土ブロックを含む。各層ともレンズ状に堆積する。c-c'断面は1～4層が溝27b、5～7層が溝27aの埋土にあたる。溝27bの埋土は、明暗のある茶褐色砂質土で、いずれもマンガンの凝集が顕著であり、2・3層ではブロックを含む。溝27aの埋土は、灰～茶褐色の色調を呈する砂質土で、いずれもマンガンの凝集が顕著であり、黄白色砂ブロックを多く包含する。記録したすべての断面で砂質を帯びる埋土が主体をなす。各層とも基本的にはレンズ状の堆積状況を示す。

遺物は古代末頃に属する土師器皿が出土した。本溝の下限は<4層>造成時である11世紀後半である。遺物や土層の時期を勘案し、本溝は古代・中世の境である11世紀中頃の時期のものと推定しておきたい。

#### 溝28 (図61・62・86・87、図版24・38)

A地点中央およびC地点西端、CN38～CV39区に位置する。南北方向に走行する。西を並行する溝31を切る。調査区内で長さ約45mを検出した。南北ともに調査区外へと延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.78～1.35m、底面高は-0.12～0.5mで、深さは0.39～0.9mである。南から北に下がる傾斜を有する。幅は約1.0～3.7m、断面形は溝幅の広い北半では二段、溝幅の狭い南半では逆台形からボウル状を呈する。

埋土は溝幅が広く、掘削深の大きいa-a'断面では12層、溝幅の狭いb-b'断面、c-c'断面では6層に分層される。

a-a'断面は土質により三群に大別する。一群は1・2層が該当する。灰褐色土で、鉄分の沈着がみられる。溝の最終的な埋没段階において、上面に形成されたたわみ状の窪みに堆積した土層と考えられる。二群は3～10層が該当する。灰色～灰褐色の色調を呈する粘質土で構成される。レンズ状の堆積層が主体だが、部分的に現れ

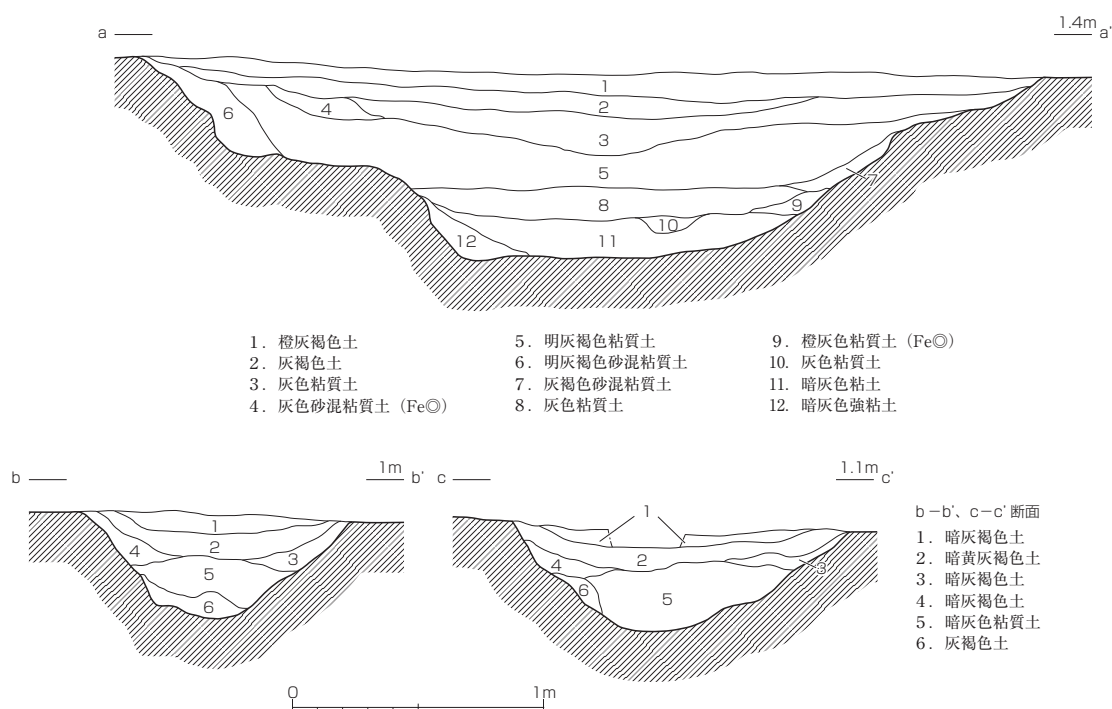
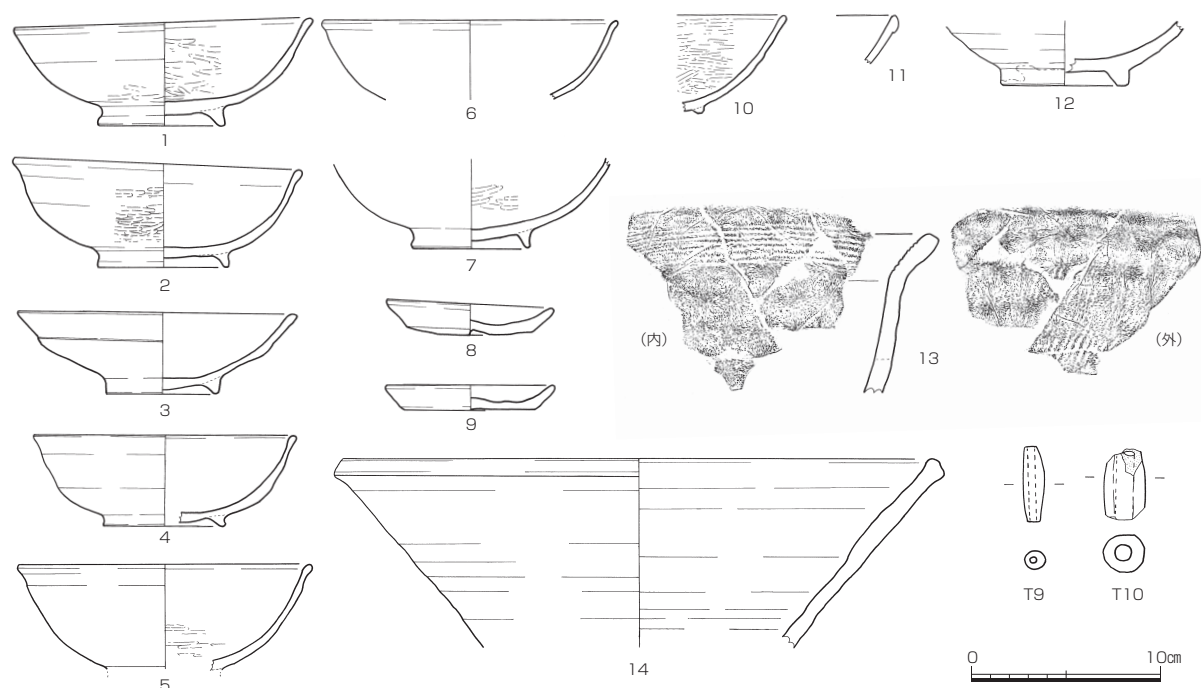


図86 溝28断面 (縮尺1/30)

# 調査の記録



| 遺物番号 | 器種      | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |        |         |            | 特 徴                          | 胎 土     | 色 調：内/外 |
|------|---------|---------------------|--------|---------|------------|------------------------------|---------|---------|
|      |         | 口径                  | 底径     | 器高      | 計測部残存度     |                              |         |         |
| 1    | 土師器 碗   | 15.3～15.8           | 6.7    | 5.2～5.8 | 3/4        | 内外：窺ミガキ、高台：断面三角形・歪み、器壁厚：不均一  | 微砂/細砂～礫 | 淡黄白/白   |
| 2    | 土師器 碗   | <15.3>              | <7.05> | 5.2～5.9 | 口5/6、高台1/1 | 外：窺ミガキ、内：磨減、高台：ナデ            | 微砂/細砂～礫 | 白～淡(黄)白 |
| 3    | 土師器 碗   | 14.8                | 5.9～6  | <4.3>   | 口1/2、高台1/1 | 磨減、口外：煤付着、底外：丸み、器壁厚：不均一      | 微砂/細～粗砂 | 淡灰白     |
| 4    | 土師器 碗   | 14                  | 6.4    | 4.8     | 口1/4、高台1/2 | 磨減顕著、調整不明                    | 微砂/粗砂～礫 | 白       |
| 5    | 土師器 碗   | 15.6                | －      | －       | 1/5        | 磨減                           | 微砂/礫少   | 淡黄白     |
| 6    | 土師器 碗   | 15.8                | －      | －       | 1/3        | 磨減                           | 微砂/礫・石英 | 白       |
| 7    | 土師器 碗   | －                   | －      | <6.25>  | 1/1        | 内：窺ミガキ、磨減、外：亀裂、底外：丸みライン・器壁厚い | 微砂/礫・石英 | 白       |
| 8    | 土師器 皿   | <8.95>              | 6.8    | 1.4～1.9 | 1/1        | 横ナデ、底外：窺キリ、ロクロ回転左            | 微砂/赤色粒  | 淡黄(橙)灰白 |
| 9    | 土師器 皿   | 9                   | 6.8    | <1.35>  | 1/2        | 磨減                           | 微砂、細かい  | 淡橙黄白    |
| 10   | 瓦 器 碗   | －                   | －      | －       | －          | 内：窺ミガキ密、外：押圧による凹凸、和泉型        | 微砂      | 暗灰/淡灰   |
| 11   | 白 磁 碗   | －                   | －      | －       | －          | 施釉                           | 精緻      | 白       |
| 12   | 白 磁 碗   | －                   | 6.8    | －       | 1/3        | 内外：施釉、高台：ケズリ出し・無釉、内：使用痕      | 精緻      | 白(釉)淡緑  |
| 13   | 土師器 鍋   | －                   | －      | －       | －          | 内外：粗いハケメ、外：押圧痕・煤付着、雲母？       | 微砂/細砂多  | 明橙褐/暗橙褐 |
| 14   | 須恵器 こね鉢 | 約31.5               | －      | －       | 1/5        | 回転ナデ、内：下半に磨り痕、東播系            | 微砂/細砂・礫 | 灰       |

| 遺物番号 | 器種 | (残存)長：cm | (残存)幅：cm | (残存)厚：cm | 重量：g | 残存状況 | 特 徴                | 胎土/混入物  | 色 調   |
|------|----|----------|----------|----------|------|------|--------------------|---------|-------|
| T9   | 土鉢 | 4        | 1.1      | 1        | 5.4  | 1/1  | 直径0.4cmの穿孔、磨減      | 微砂/粗砂～礫 | 淡(橙)白 |
| T10  | 土鉢 | (3.8)    | 2.3      | 2.1      | 13.2 | 一部   | 直径0.9cmの穿孔、ナデ、破損部大 | 微砂/礫少   | (淡黄)白 |

図87 溝28出土遺物（縮尺1/4）

る小規模な層である4・6・7層はいずれも砂が混じるという点が共通し、ブロック状の性格をもつ土層と評価したい。三群は底面に堆積する暗灰色粘土層（11・12層）である。灰色砂がラミナ状に入ることが観察されている。b-b'断面、c-c'断面は各層の断面形状により三群に大別する。一群はレンズ状の堆積層である1・2層が該当する。土色は暗灰褐色を基調とする土で、ブロックを包含する。二群は法面に沿って流れ込んだ形の断面形を呈する3・4層で、ブロックを含む暗灰褐色土である。三群は下半部に厚く堆積する5層とブロック状に入る6層で、灰色系の土色を呈する。土質について、5層は粘質を帯び、6層には粘質土ブロックの包含がみられるので、大局的には下半部は粘性のある土層によって埋没していると判断したい。

遺物は完形に近い碗・皿を含む土師質土器、須恵器、瓦器、白磁等が出土している。出土遺物から、中世前半（12世紀中頃）に属すると考えられる。

## 溝29（図61・88、図版25）

B・C地点北辺、CN34～38区に位置する。東西方向に走行する。C地点西端

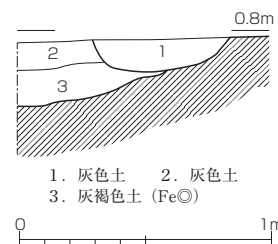


図88 溝29断面（縮尺1/30）

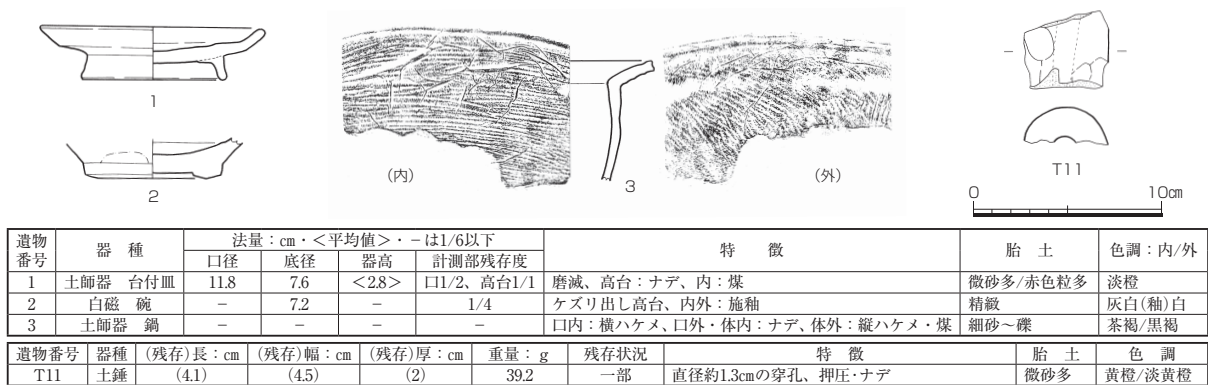


図89 溝29出土遺物（縮尺1/4）

では溝28に切られる。調査区内で長さ約30mを検出した。東端は35ライン付近以東では消失している。西端は調査区外へと延びる。切り合い関係を有して並行する2条の溝である。古段階を溝29 a、新段階を溝29 bとする。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.56～1.05m、底面高は0.45～0.66mで、深さは約0.1～0.4mである。東から西に傾斜する。幅は1.09mで、断面形は椀状を呈する。

埋土は3層に分層される。1層は溝29 bの埋土で、灰色土、2・3層は溝29 aの埋土で灰～灰褐色土である。溝29 aでは鉄分の沈着が認められる。

遺物は土師質土器および土錘が出土している。出土遺物および切り合い関係から、中世前半（12世紀代）に属すると考えられる。

溝30（図61・90、図版25）

C地点東半、CN29～34区に位置する。東西方向に走行する。土坑15に切られる。調査区内では長さ約26mを検出した。東端は調査区外に、西端は34ライン西側で消失する。検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.8m、底面高は約0.5～0.6mで、深さは約0.2～0.3mである。東から西に下がる傾斜を有する。幅は約0.5mで、断面形は椀状、箱状を呈する。

埋土は3層に分層される。いずれも色調に濃淡のみられる灰褐色土で、鉄分の沈着が認められる。3層にはブロックが包含される。

遺物は出土していない。走行方向から、中世前半に属すると推測される。

溝31（図61・62・91、図版25）

A地点中央、CS38～CV39区に位置する。南北方向に走行する。東に並行する溝28に切られる。調査区内では長さ約18mを検出した。北側は溝28によって失われ、南側は調査区外へと延びている。検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.8～1.0m、底面高は約0.4～0.8mで、深さは約0.1～0.45mである。北から南にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.8m以上、断面形は逆台形を呈する。

埋土は2～4層に分層される。土色は褐色～灰褐色を基調とし、土質は一部で砂質がみられる土である。過半の層でブロックの包含が認められ、b-b'断面3層で顕著である。

遺物は中世前半に属する土師質土器小片が出土している。出土遺物および切り合い関係から、中世前半（12世紀前半頃）に属すると考えられる。

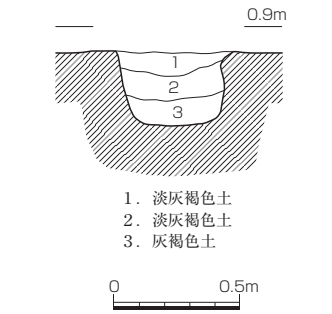


図90 溝30断面（縮尺1/30）

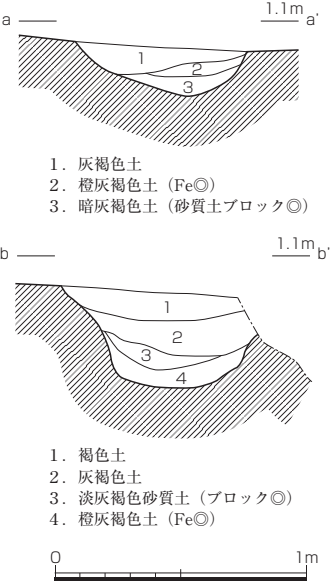


図91 溝31断面（縮尺1/30）

**溝32** (図61・62・92、図版25)

A地点中央、CO～CV39区に位置する。南北方向に走行する。CO～CP39区では断続的な検出となったが、調査区内では長さ約35mを検出した。北側はCN39区で消失、南側は調査区外へと延びる。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の関係にある二条の溝が切り合っている状況が観察されている。ここでは古段階を溝32a、新段階を溝32bとして報告する。

検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.95～1.1m、底面高は約0.8～1.0mで、深さは0.08～0.19mである。北から南にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.6～0.8m、断面形は皿状を呈する。

埋土は各1層で、溝32aでは灰褐色土、溝32bでは暗灰褐色土～砂質土が確認された。b-b'断面では溝32aの埋土に焼土塊の包含と鉄分の沈着が認められる。

遺物は出土していない。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

**溝33** (図61・62・93)

A地点北半中央、CP・CR39区に位置する。南北方向の溝で、攪乱により中間を分断されている。北側は消失、南側は東西側溝および建物基礎の攪乱で失われている。調査区内では長さ約14mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.89～1.02m、底面の標高は0.67～0.96mで、深さは0.06～0.11mである。南から北にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.2～0.45mで、断面形は碗状を呈する。

遺物は出土していない。溝の走行方向から、中世前半に属すると推測される。

**溝34** (図62・94、図版26)

A地点南半中央部、CS39～41、CT～CV39・40区に位置する。東西側溝や建物基礎の攪乱が入っているため、失われた部分も多いが、CS39・40区ではほぼ直角に折れる屈曲点をはさみ、東西方向、南北方向に走行する溝が鍵形を成している。東西方向西側は消失しているものの、南北方向南側は調査区外へと延びている。西側に並行する溝35を切り、調査区南辺付近で溝36に切られる関係にある。調査区内では長さ約26mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.04～1.28m、底面高は0.8～1.04mで、深さは0.07～0.34mである。東西部分は西から東、南北部分は北から南にむかって下がる傾斜を有するので、全体としては南に排水される勾配となっている。幅は約1.4～1.45mで、断面形は皿状を呈する。

埋土はa-a'断面では3層に、b-b'断面では2層に分層される。いずれの土層もレンズ状堆積を示す。灰褐色土を主体とする埋土で、砂ブロックの包含に加え、鉄分の沈着、マンガンの凝集がみられる。最下層の埋土は両断面で土質が異なっており、東西方向の流路にあたるa-a'断面では砂質

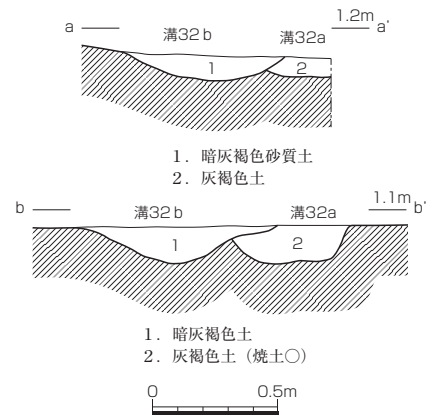


図92 溝32断面 (縮尺1/30)

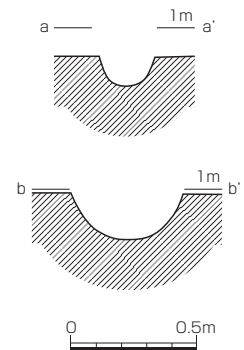


図93 溝33断面 (縮尺1/30)

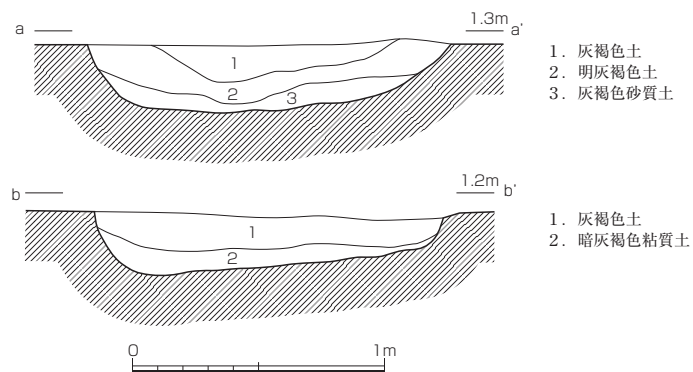
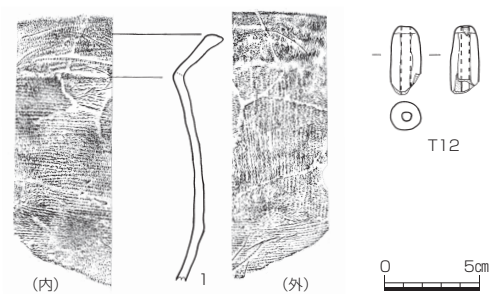


図94 溝34断面 (縮尺1/30)

土、南北方向の流路にあたる b－b' 断面では粘質土の堆積が観察されている。

遺物は土師質鍋、土錘が出土している。出土遺物および切り合い関係から中世前半（13世紀前半頃）に属すると推測される。



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・－は1/6以下 |          |          |        | 特 徴                         | 胎 土                             | 色調：内/外   |       |
|----------|-------|---------------|----------|----------|--------|-----------------------------|---------------------------------|----------|-------|
|          |       | 口径            | 底径       | 器高       | 計測部残存度 |                             |                                 |          |       |
| 1        | 土師器 鍋 | －             | －        | －        | －      | 内：横ハケ、外：上半縦ハケと押圧・下半横ハケ・煤付着多 | 微砂/細砂多                          | 灰褐/黒褐(煤) |       |
| 遺物番号     | 器種    | (残存)長：cm      | (残存)幅：cm | (残存)厚：cm | 重量：g   | 残存状況                        | 特 徴                             | 胎土/混入物   | 色 調   |
| T12      | 土錘    | 1.5           | (3.6)    | 1.6      | 8.2    | 一部                          | 直径0.5cmの穿孔、端面に長さ0.5cmの刻み目、押圧・ナデ | 微砂/細砂    | 淡(橙)白 |

図95 溝34出土遺物（縮尺1/4）

溝35（図62・96、図版26）

A地点南半中央部、CT・CU39・40区に位置する。南北方向の溝で建物基礎の攪乱により分断されるが、調査区内で長さ約8mを検出した。北側は攪乱によって失われる。南側は溝34、36に切られて失われている。建物基礎の攪乱北側では1条、南側では切り合い関係にある2条の溝として認識し記録したが、平面的な位置関係、断面形、底面のレベルから新古の関係にある有機的な関係性の高い2条の溝と考え、ここでは古段階を溝35a、新段階を溝35bとして報告する。

検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.02～1.22mで、底面高は0.92～0.98m、深さは0.05～0.3mである。比高は小さいが、南から北に下がる傾斜を有する。幅は1.7～1.88mで、断面形は皿状を呈する。

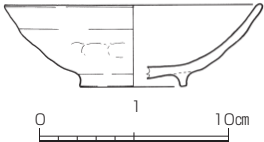
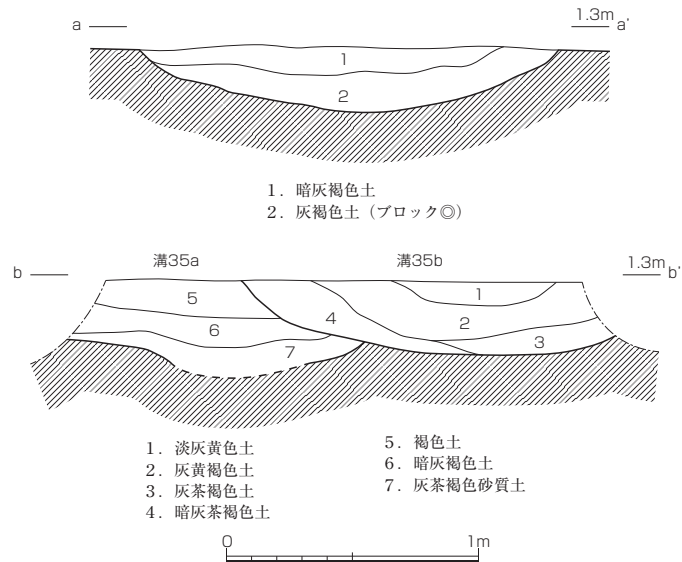
埋土は溝35aでは3層、溝35bでは2～4層に分層される。溝35aは褐色を基調とする土で構成され、全ての層にブロックの包含が認められる。溝35bはa－a'断面では灰褐色土、b－b'断面では上半が黄色を呈する土、

下半が灰茶褐色を呈する土となる。下半部の層でブロックの包含が顕著にみられる。

遺物は土師質土器碗が出土した。出土遺物から中世前半（13世紀前半）に属すると考えられる。

溝36（図62・97、図版27）

A地点南半中央部、CU40・41、CV40区に位置する。東に位置する溝35を切る。CU40区に位置する屈曲点をはさみ、おおむね南北方向、東西方向に走行する溝である。西側は建



| 遺物番号 | 器種    | 法量：cm・－は1/6以下 |     |     |          | 特 徴                            | 胎 土  | 色 調：内/外 |
|------|-------|---------------|-----|-----|----------|--------------------------------|------|---------|
|      |       | 口径            | 底径  | 器高  | 計測部残存度   |                                |      |         |
| 1    | 土師器 碗 | 13.6          | 5.6 | 4.4 | 口－、高台1/3 | 内：ナデ、外：押圧、磨減、口縁の残存率低いため口径値は不確定 | 微砂/礫 | 淡(黄)白   |

図96 溝35断面・出土遺物（縮尺1/4・1/30）

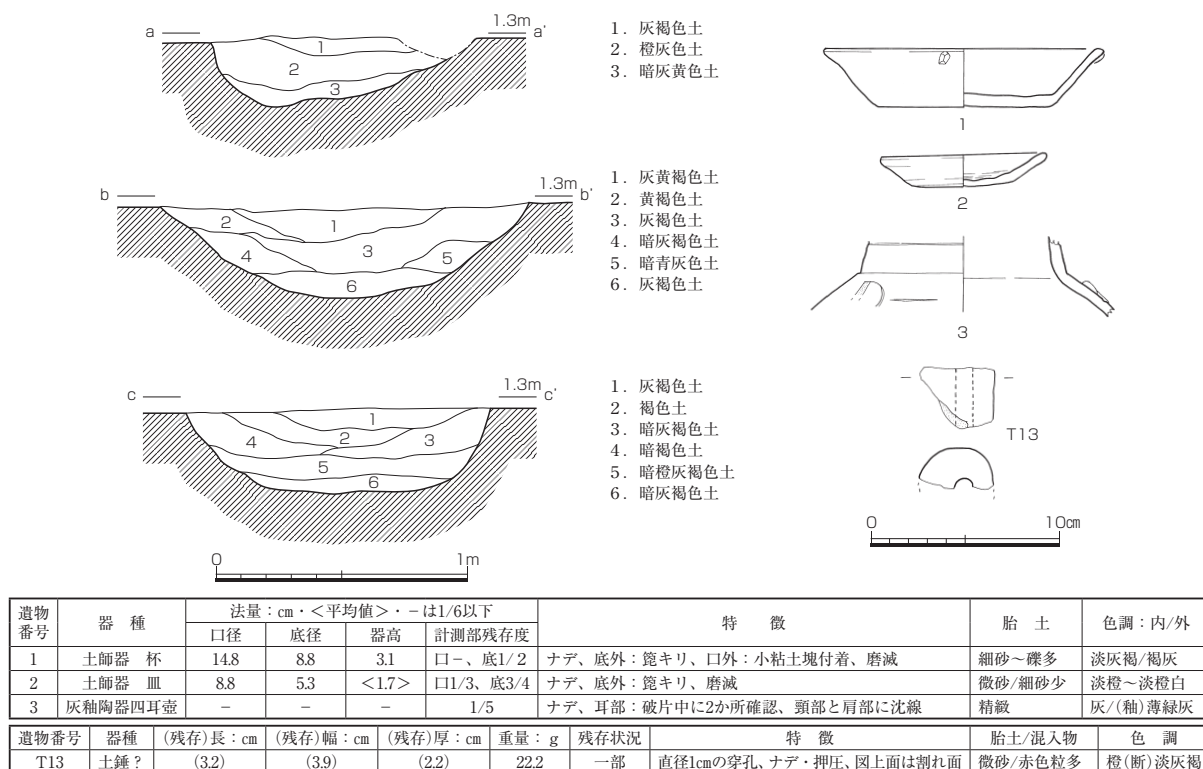


図97 溝36断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

物基礎の攪乱により失われている。南側は調査区外へと延びる。調査区内では約20mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.13~1.29m、底面高は0.89~1.01mで、深さは0.2~0.37mである。屈曲点の底面高がもっとも低くなる。幅は1.13~1.46mで、断面形はボウル状、椀状を呈する。

埋土は3~6層に分層される。土色は灰色を基調とし、黄色、橙色や褐色がかかる部分がある。ブロックを包含する層は少ない。色調の類似する細分層をまとめると、基本的にはレンズ状の堆積構造が連続したものとみることができる。

遺物は土師質土器、土錘が出土した。切り合い関係から中世前半(13世紀前半頃)に属すると推測される。

#### 溝37 (図62・98、図版28)

A地点南半西部、CS41~CV42区に位置する。南北方向を基調とするが、北端部では建物基礎の攪乱によって失われているため、確認された長さは短いものの、北北東方向へむかう屈曲が認められる。南側ではCV42区で南東方向へと屈曲し、西に位置する溝38を切り、調査区外へと延びる。調査区内では長さ約16mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.96~1.13m、底面高は0.88~0.95mで、深さは0.14~0.2mである。北北西から南南東へ下がる傾斜を有する。幅は約0.4~0.6mで、断面形は椀状を呈する。

埋土は2~3層に分層される。a-a'断面、b-b'断面とも上層は橙灰褐色土、下層は灰褐色砂質土で、いずれの層も鉄分の沈着が認められる。

遺物は中世土器小片が出土している。出土遺物および溝の走行方向から中世前半に属すると考えられる。

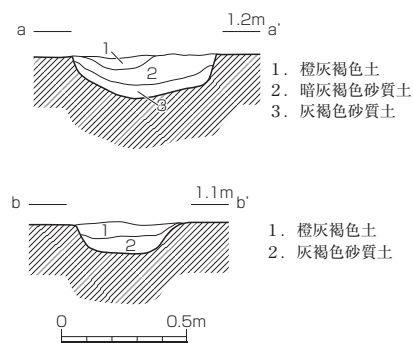


図98 溝37断面 (縮尺1/30)

**溝38** (図61・62・99、図版28)

A地点西部、43ラインに沿う南北方向の溝である。A地点中央部では建物基礎の攪乱により断続的に検出された。両端は南北とも調査区外へと延びる。CV43区北東角から浅く、細く並行する長さ約3.5mの溝がある。断面では切り合い関係にあることが確認されており、西側の細い溝を溝38a、東側の幅広の溝を溝38bとする。調査区内では長さ約26mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.92~1.12m、底面高は0.82~0.97mで、深さは0.07~0.22mである。北から南に下がる傾斜を有する。幅は約2.1~2.7m、断面形は皿状を呈する。

灰色土を基調とする埋土は溝38aでは2層、溝38bでは1層が確認される。溝38aの埋土にはブロックの包含が認められる。

遺物は中世前半に属する土師質土器小片が出土している。出土遺物および溝の走行方向から中世前半に属すると考えられる。

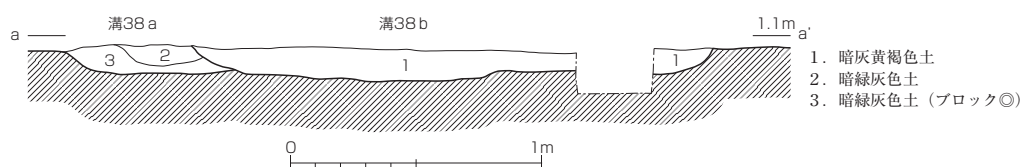


図99 溝38断面 (縮尺1/30)

**溝39** (図61・100)

A地点北西部、CO~CQ43区に位置する。南北方向を基調とする溝である。北側は調査区外へ延び、南側は底面の標高を上げ収束する。調査区内では長さ約10mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.04~1.09m、底面高は0.95~1.02mで、深さ0.05~0.11mである。南から北に下がる傾斜を有する。幅は約0.3~0.6mで、断面形は皿状を呈する。埋土は鉄分の沈着が認められる褐色土である。

遺物は混入品と判断される古墳時代初頭の土師器、須恵器の小片が出土している。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

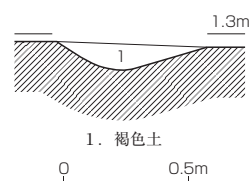


図100 溝39断面 (縮尺1/30)

**溝40** (図62・101)

A地点南西部、CS~CV43区に位置する。CT区で弱く蛇行するが、南北方向を基調とする溝である。北側は底面の標高を上げ収束する。南側は調査区外へと延びる。調査区内で長さ約14mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.02~1.1m、底面高は0.9~1.0mで、深さは0.09~0.12mである。高低差は小さく、流下方向は特定できない。幅は0.4~0.56mで、断面形はボール状を呈する。

埋土は鉄分の沈着が認められる褐色土である。

遺物は出土していない。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

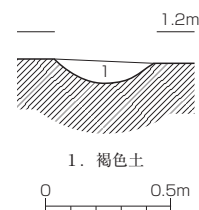


図101 溝40断面 (縮尺1/30)

**溝41** (図62・102、図版28)

A地点西側中央、CS43・44区に位置する。東西方向の溝である。東側は建物基礎攪乱で失われ、西側は調査区外へと延びる。調査区内で長さ約8mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.25~1.29m、底面高は0.4~0.54mで、深さ0.7~0.81mである。西から東に下がる傾斜を有する。幅は1.44mで、断面形は逆台形、鉢状を呈する。

埋土は10層に分層される。土色・土質・包含物・堆積状況にもとづき、三群に大別する。一群は上半部に累積するレンズ状堆積層で、a-a'断面では1~3層、b-b'断面では1~4層が該当する。色調に明暗のある灰

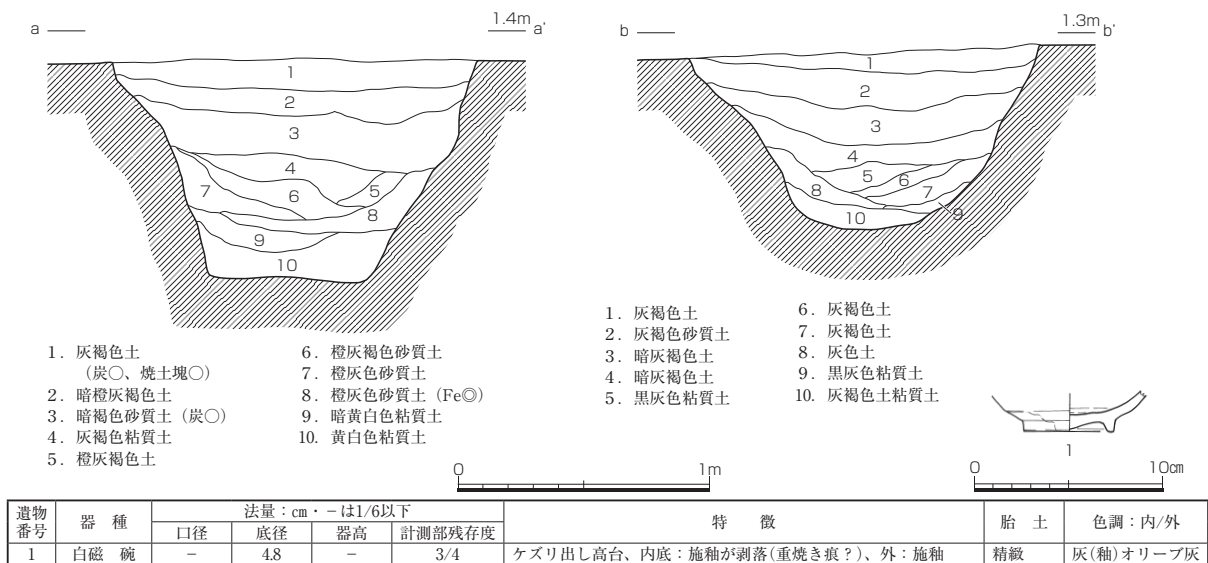


図102 溝41・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

褐色土を基調とし、一部では砂質を帯びる。ブロックの包含がみられる。a－a'断面では焼土塊・炭の包含が確認された。二群は中央から下半部にかけてみられる法面に沿って流れ込んだ層と、その間を充填する粘質土層で構成される。a－a'断面では4～8層、b－b'断面では5～8層が該当する。三群は底面付近に堆積する粘質土で、地山を起源とする粘質土ブロックを含む。

遺物は青磁・白磁の小片が出土した。出土遺物から中世前半に属すると考えられる。

## 第5節 近世の遺構・遺物

### 1. 概要

近世の遺構として、土坑21基、段、畦畔を検出した。A地点北側中央の段およびC地点の東西方向の大畦畔は土地区画を明示する遺構であり、これらで画されたA地点東半部に畦畔が作られる。ほとんどの土坑は、A・B地点では段の西側にあたる39～41ライン間の範囲に南北に散在し、B・C地点では大畦畔が表示する東西の区画線に沿って配されている。なお、本調査区の北に位置する第9・11次調査地点では、35～38ライン間の範囲に南北溝とそれに沿った土坑群が配置されている。C地点の大畦畔を挟んだ南北では、土地を区画する南北区画線の位置が約18mずれていることになる。

### 2. 土坑

土坑16・17・18 (図103・104、図版30)

C地点中央部、CN33・34区に位置する。土坑17・18の北側は調査区外へと延びており、全体の確認には至らなかった。また、土坑17の断面には中央部に幅約0.6～0.7mの攪乱があり、堆積情報が一部失われている。

3基は土坑18が土坑16・17を切って構築される切り合い関係にある。土坑16・17は、両者の規模や掘削位置から、切り合い関係にはないと想定される。検出面はいずれも＜3層＞である。土坑16は検出面の標高が1.09m、底面高が0.23mで、深さ0.86mである。土坑17は検出面の標高が1.02m、底面高は0.22mで、深さは0.8mである。土坑18は検出面の標高が1.06m、底面高が0.02mで、深さ1.04mである。

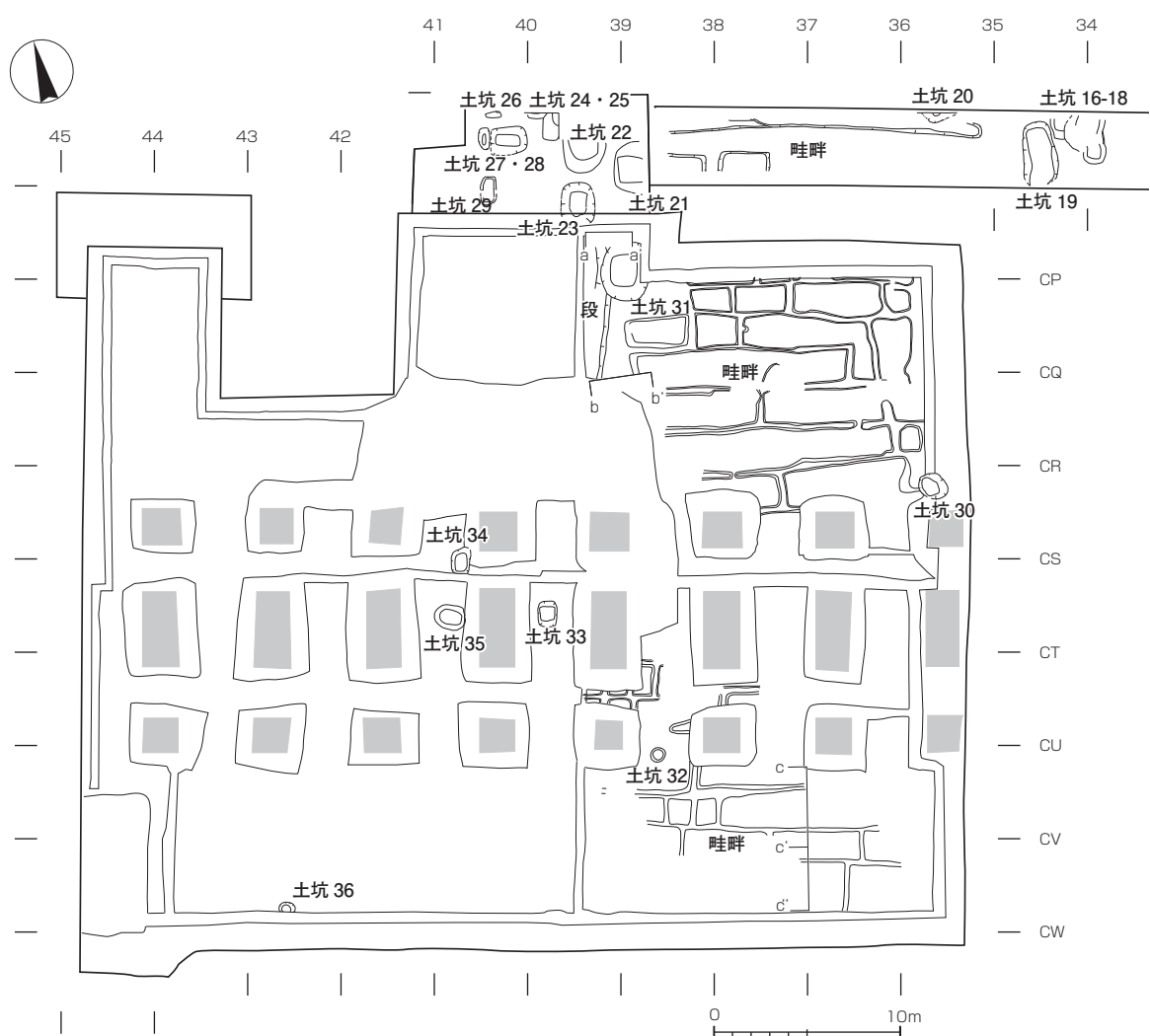


図103 近世の遺構全体図（縮尺1/400）

切り合いや、調査区外にかかる部分もあるが、平面形は土坑16・18がともに隅丸方形、土坑17が方形であると想定される。底面は、土坑16・18では上面と同じく隅丸方形を呈する。土坑17も検出できたラインが上面の形状に沿っており、方形となることが推測される。

規模は土坑16の上面では長軸方向1.15m以上、幅1.15m、土坑17は南北0.95m以上、東西0.85m以上、土坑18は長軸方向1.92m以上、幅2.26mである。底面は土坑16が長軸方向0.58m以上、幅0.73m、土坑17は南北0.86m以上、東西0.8m以上、土坑18が長軸方向1.6m以上、幅1.23mである。

断面形は土坑16、18ともに逆台形を基調とする。土坑17は箱状を呈すると想定される。土坑18では西側法面にやや傾斜を弱める面や小さな段が作出されることが観察されている。土坑17の西側法面にも凹凸がみられ、両者は直線的ではない法面形状をとる点で共通性を指摘できる。

埋土については、土坑17・18はa - a'断面で、土坑16はb - b'断面で説明する。

a - a'断面は調査区北土手にあたる。土坑17の埋土は7層に分層される。1層は暗青灰色土で、＜2層＞に近い色調を呈する。断面で観察された範囲は狭く、層厚も薄いことから、土坑埋没後の上面の窪み等に入った土層であろう。2層以下については、土質や包含物から、2～6層、7層に二分できる。2～6層は灰～灰褐色の色

調を基調とする粘質土である。2～5層でブロックの包含が多くみられること、各層の層理面に不連続な面がみられないこと、各層の間に砂等の流入がみられないことから、比較的短期間に埋め戻されたことが考えられる。7層は暗橙灰褐色土で鉄分を含む。粘性を帯びない点で上位の層群との差異を有する。

土坑18の埋土は色調・土質・包含物に、層理面の特徴を加味して九群に大別する。一群は1層で、層理面が丸底状を呈しており、土坑埋没後の掘り込みと考えられる。二群は2・3層で、土坑18を最終的に埋めた灰色系の埋土である。粘性に差があるが、同様の性格を共有する埋土として考えたい。三群は4層で、層理面は、中央から東側法面にかけて丸底となる。1層と同じく堆積が進んだ段階で部分的な再掘削が行われたものとみられる。これより下位の埋土はすべて粘質土である。四群は5・6層で、層理面の形状から、三群と同様、土坑中央から西側法面にかけて再掘削が行われたものと考えられる。五群は7・8層で、7層はブロックを含んだ厚い堆積で、埋め戻したものとみられる。六群は9・10・11層で、やはり11層下面の層理面は丸底を呈している。9層ではブ

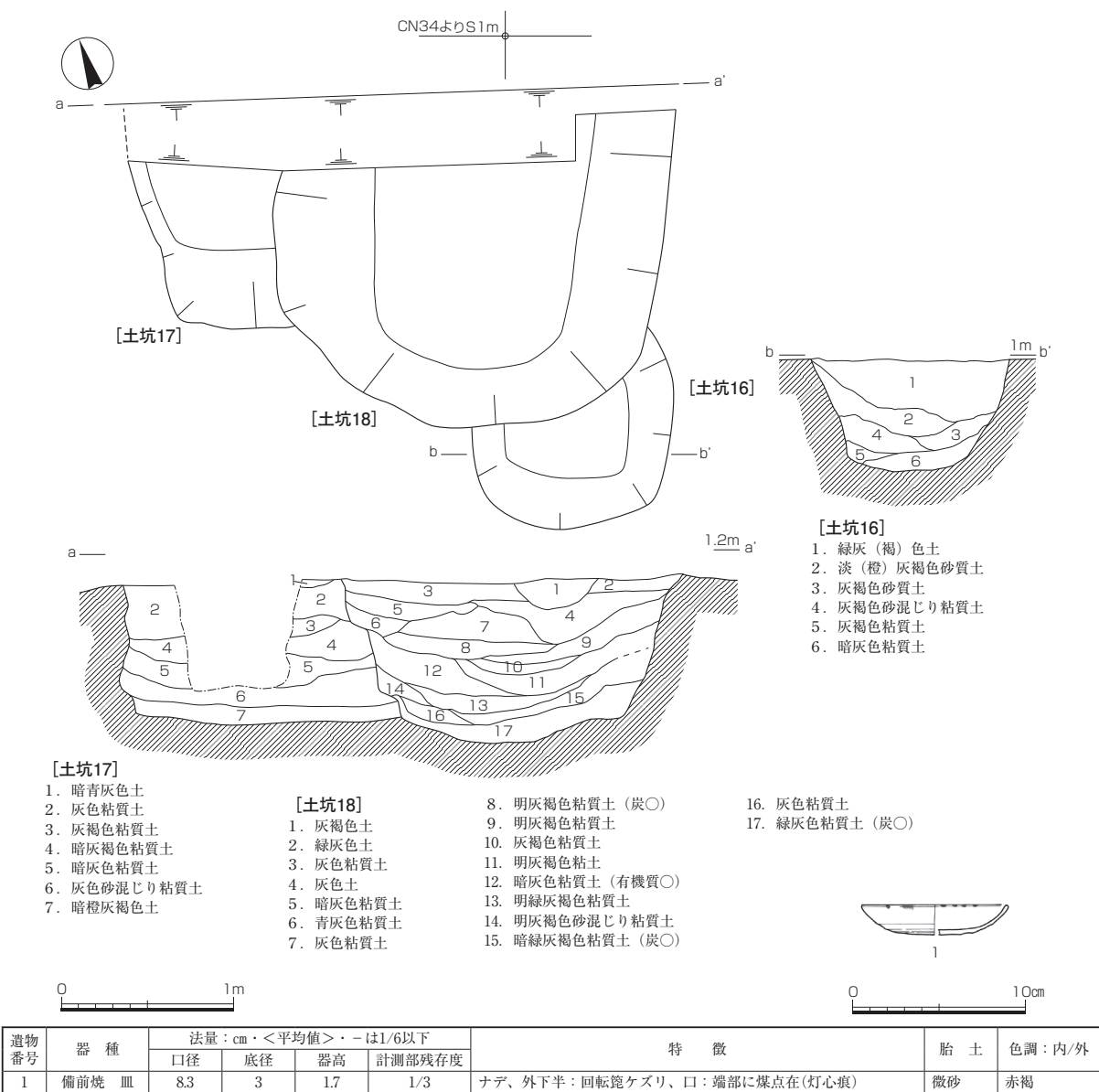


図104 土坑16～18・土坑16出土遺物 (縮尺1/4・1/40)

ロックの包含が認められる。七群は12層で、黒灰色粘土ブロックを含んだ厚い堆積で、埋め戻し土とみられる。八群は13・14層で、明黄褐色粘土ブロックを含む。九群は15・16・17層で、粘性がやや強く、炭化粒を含む層群である。

土坑16（b-b'断面）は6層に分層されるが、土質から三群に大別して説明する。一群は1層で、ブロックを多く含む緑灰褐色土である。層厚のあるブロック包含土であり、埋め戻し土と考えられる。二群は2・3層で、灰褐色砂質土を基調とする。鉄分の集積がみられる。三群は灰～灰褐色粘質土である。4層は砂や鉄分が混じるなど、二群との差異は漸移的である。

遺物は土坑16・18ではともに近世陶磁器片および瓦が出土した。土坑17では中世土器片が出土したが、本土坑の検出層から、混入と評価される。

これらの土坑の時期は、出土遺物および切り合い関係から、近世（江戸時代中期以降）に位置づけられる。

#### 土坑19（図103・105、図版30）

C地点中央部、CN34区に位置する。南側は側溝で失われているが、それを越えた調査区南辺に設定した土層観察用土手で幅を減じた断面が確認されており、この土手内で収束するとみられる。また、北側は遺構の確認を目的とする先行トレンチによって埋土の一部を除去したが、その過程で掘り方を確認することとなった。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.26m、底面高は0.24mで、深さは1.02mである。

平面形は上面、底面ともに長楕円形を呈する。規模は上面で長軸長3.45m以上、短軸長1.82m、底面で長軸長3.02m以上、短軸長1.24mをはかる。

断面形については情報が欠ける部分もあるが、長軸方向は皿状、短軸方向は碗状を呈すると推測される。

埋土は17層に分層される。包含物、堆積状況から三群に大別する。一群は1～3層で、土坑中央から南半にかけてレンズ状に堆積する灰色系の粘質土である。炭化物、ブロックの包含が顕著である。二群は各層が塊状の単位をなすことを大別の指標とした。4～16層が該当する。本群においても炭化物、ブロックの包含が顕著な層が認められる。三群は17層で、有機質を含む暗灰色粘土である。一・二群はブロックを多く包含すること、二群は層の形状自体に塊状を呈するものが多くみられることから、人為的な埋め戻し土であると考えられる。

遺物は近世陶磁器片、瓦片が

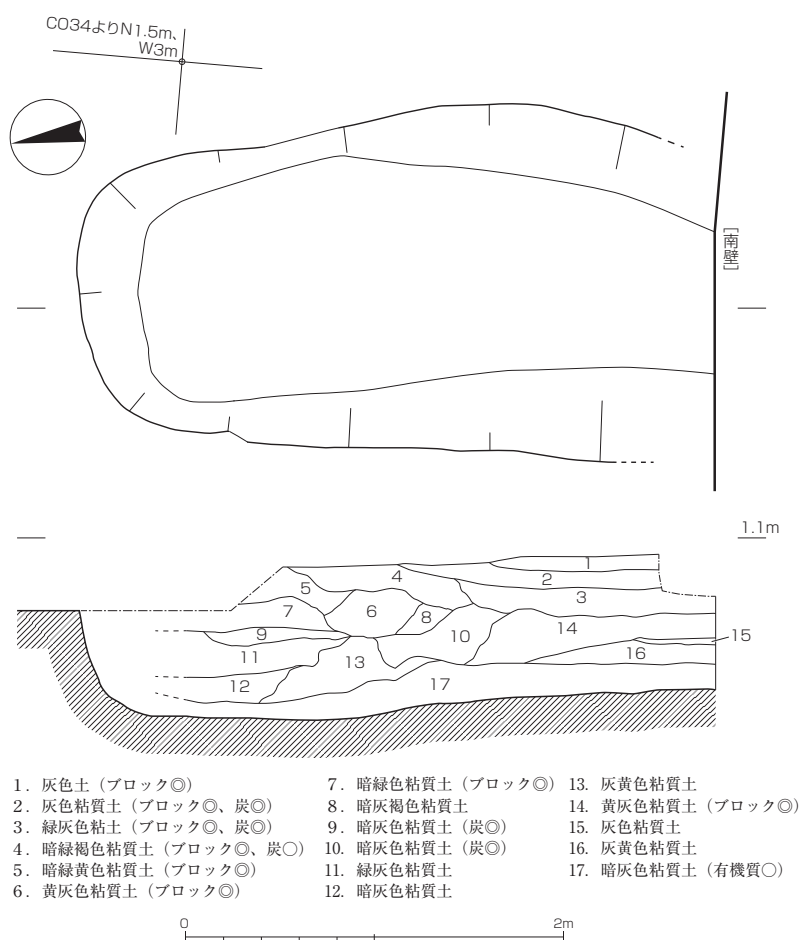


図105 土坑19（縮尺1/40）

出土している。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑20（図103・106、図版30）

C地点中央西寄り、CN35区に位置する。南半部を検出したが、北側溝に重複する位置にあり、大半を側溝底面で確認することとなった。北半は断面観察用土手から調査区外に延びるとみられる。＜3層＞で検出した。検出面の標高は0.85m、底面高は0.17mで、深さは0.68mである。

平面形については、上面は検出できた南半部の形状から、楕円形を呈すると推定される。底面は検出できた範囲では半円形を呈しており、円形に復元される。規模は上面で長軸長1.87m、短軸長0.53m以上、底面で長軸長0.41m、短軸長0.17m以上をはかる。断面形は椀状を呈する。

埋土は灰色土の単層である。部分的に色調の明暗があるが、土質は大差なく、顕著な包含物はない。遺物は中世土器細片、土錘片、木製品が出土している。中世土器片は埋土に混入したものと位置づける。

本土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

#### 土坑21（図103・107、図版29・31）

B地点東側、CN・CO38・39区に位置する。西半部を検出した。東半部については、東側溝部分は失われているが、土層観察用土手へと延びている。一方、C地点内では対応する掘り方は確認されなかった。両地点を画する矢板列（幅約0.5～0.6m）のなかで収束するものとみられる。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.17m、底面高は0.29mで、深さは0.88mである。

平面形については、上面は検出できた西半部の北辺が弧状となるが、西辺および南辺は直線的なラインとなっている。方形を呈する底面の形状をあわせて考えれば、上面の平面形は隅丸方形を基調としたものと復元される。規模は、上面で長軸長2.79m、短軸長1.36m以上、底面で長軸長1.44m、短軸長1.11m以上をはかる。断面形は、南側では二段掘り、北側では逆台形を呈する。

埋土は9層に分層され、四群に大別する。一群は1層で、ブロックや炭化粒の包含が多く認められる灰褐色土である。二群埋土を掘りこむ層理面の形状から、二群堆積後、北辺にボウル状の掘り方をもつ掘削がなされたものとみられ

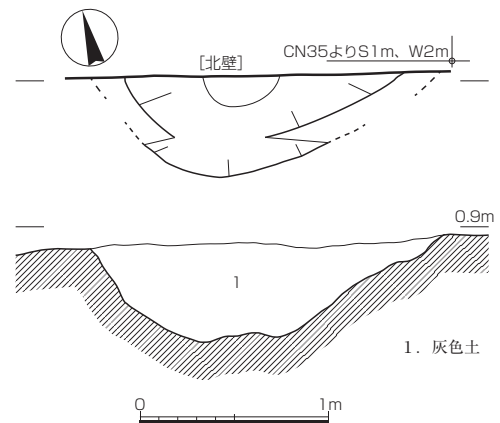


図106 土坑20（縮尺1/40）

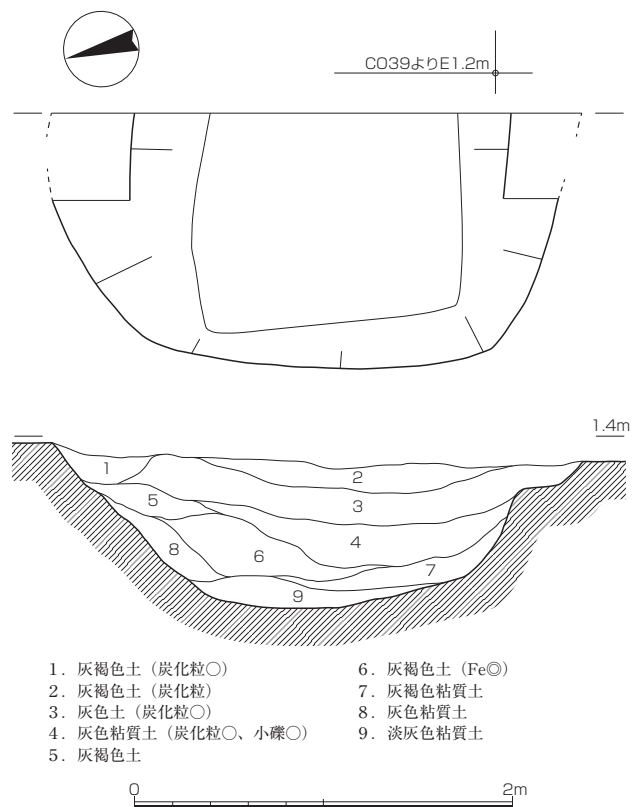


図107 土坑21（縮尺1/40）

る。二群はレンズ状に堆積する2～4層が該当する。灰～灰褐色土で構成される。いずれも鉄分の沈着が顕著で、炭化粒を多く含む埋土である。他にもブロックや小礫の包含が認められている。二群底面の層理面も三群埋土を掘りこむ形状となっている。三群は5～8層が該当する。灰～灰褐色土で、5・6層には鉄分の沈着が顕著である。四群は9層で、ブロック状に固結した鉄を含む淡灰色粘質土である。堆積状況から、本土坑の使用時には埋没と再掘削を繰り返したことがうかがわれる。遺物は近世陶磁器片、瓦片、箸状の木製品が出土しているが、いずれも図化にはいたらない。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑22 (図103・108、図版29・31)

B地点東半、CN39区に位置する。南半部を検出した。北半部は後世の攪乱によって失われている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.25m、底面高は0.26mで、深さは0.99mである。

残存部の形状から復元される平面形は、上面が楕円形、底面が長方形である。規模は、上面で長軸長約1.7m以上、短軸長1.53m、底面で長さ0.67m以上、幅0.61mである。断面形は椀状を呈する。

埋土は7層に分層される。1層は鉄分の沈着が顕著な灰褐色土である。2層との層理面の形状をみると、2層堆積後に再掘削された掘り方の埋土と位置づけられる。2層は炭化粒を多く含む灰～灰褐色土である。3層は鉄分の沈着がもっとも顕著に認められ、ブロックを包含する灰褐色土である。1～3層は土色・土質は近似するが、包含物や鉄分の沈着の差がある。これは堆積の経緯や堆積環境の違いを反映しているものと考えられる。4層は有機質、炭化粒を含む灰色粘質土である。5層は層厚約5cmの白・灰色粗砂である。6層は淡灰黄色粘土、7層は暗灰褐色粘土で、いずれも粘性が強い。5層は粘質埋土間に薄くレンズ状に堆積した自然流入土と考えられ、本土坑では4層以下に堆積した、有機物を含む粘質の埋土が土坑使用時の機能を反映していると考えられる。遺物は図化した陶磁器のほか、瓦片が出土している。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑23 (図103・109、図版29・31)

A地点北辺中央、B地点東半南側にまたがって検出された。CN・CO39区に位置する。A地点側では南端を側溝で失っているが、土層観察用土手で確認することができた。B地点側でも調査区南辺に沿って設定した側溝によって失われている部分があるが、側溝北側および調査区南辺に沿う土層観察用土手で平面的に検出することができた。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.27m、底面高は0.4mで、深さは0.87mである。

南端部を失うものの、平面形は上面で隅丸方形、底面で長方形を呈する。規模は、上面で長さ2.21m、幅1.8m、底面で長さ1.24m、幅0.89mである。断面形は椀状～逆台形を呈する。

埋土は6層に分層される。土色・土質により三群に大別する。一群は青灰色系の土で構成される。鉍物の集積や包含物は認められない。二群は灰～灰褐色粘質土で、粗砂が筋状に薄く堆積する部分も認められる。

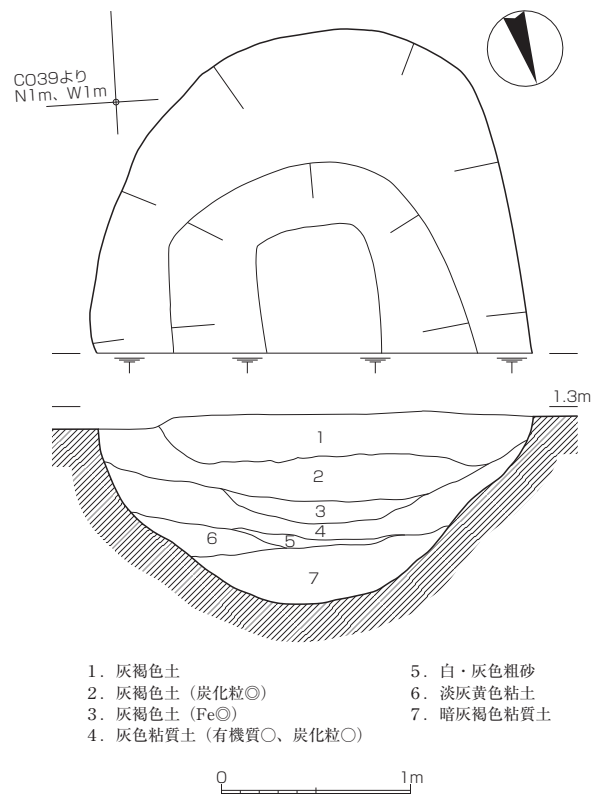


図108 土坑22 (縮尺1/40)

三群は6層で、粘性の強い灰色粘土である。包含物はほとんどない。遺物は近世陶磁器片、瓦片が出土した。

本土坑は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑24・25（図103・110）

B地点中央北側、CN39区に位置する。北・東側は攪乱や側溝で失われている。土坑24が土坑25を切っている。土坑24は約1/4が残存しているとみられる。一方、土坑25は北側溝と土坑24により失われており、遺存状態は悪い。＜3層＞で検出した。

土坑24は検出面の標高が1.28m、底面高は0.25mで、深さは1.03mである。土坑25は検出面の標高が1.04m、底面高は0.49mで、深さは0.55mである。

土坑24は、平面形については、残存部の形状から、上面で隅丸方形、底面で長楕円形を呈すると推定される。規模は長さ1.47m以上、幅0.87m以上、底面は長軸長0.66m以上、短軸長0.33m以上である。断面形は椀状を呈する。土坑25は遺存状況が悪いため、平面形は残存部からの推定となるが、南西部で屈曲の強いカーブが認められるため、隅丸方形であると考えられる。底面は遺存部が寡少で、平面形を推定できない。規模は上面で長さ0.99m以上、幅0.31m以上となる。断面形は椀状を呈する。

埋土は、土坑24では土質や包含物の粗密により3層に分層される。1層は暗灰褐色土で、ブロック・炭化粒を多く含む。わずかに小礫を含み、薄く筋状に堆積した砂もみられる。2層は灰褐色土で、包含物が少ない。3層は暗灰色粘質土で、下方に淡黒灰褐色粘質土ブロックが含まれる。

土坑25ではレンズ状に堆積する埋土は2層に分層される。1層は暗灰色土、2層は炭化物を含む淡黒灰色粘質土である。いずれもブロック等の包含物を含まない。

遺物は土坑24からは中世土器小片が出土しているが、検出面は近世層の上面であり、混入品と判断される。土坑25からは遺物は出土していない。

両土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

#### 土坑26（図103・111）

B地点西半北側、CN40区に位置する。北側を側溝で失っている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は0.99m、底面高は0.6mで、深さは0.39mである。

遺存状況が悪く、残存部から平面形を推定すると、南西部に屈曲の強いカーブが認められるため、隅丸方形の可能性はある。底

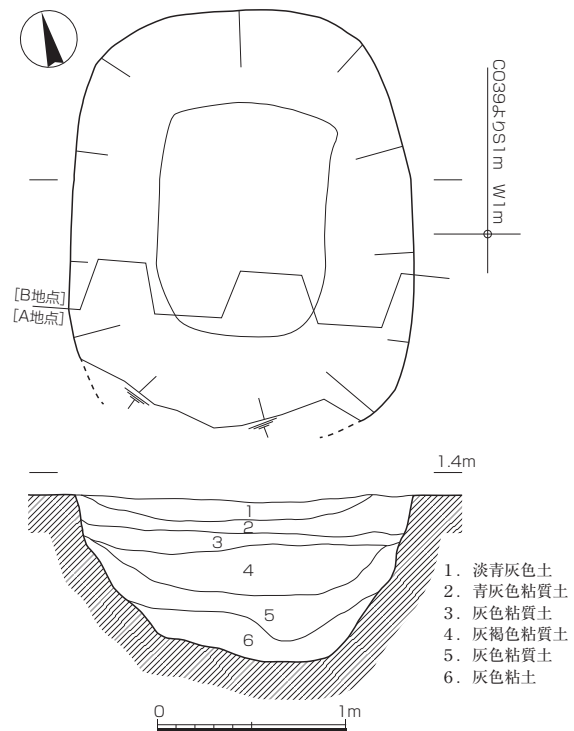


図109 土坑23（縮尺1/40）

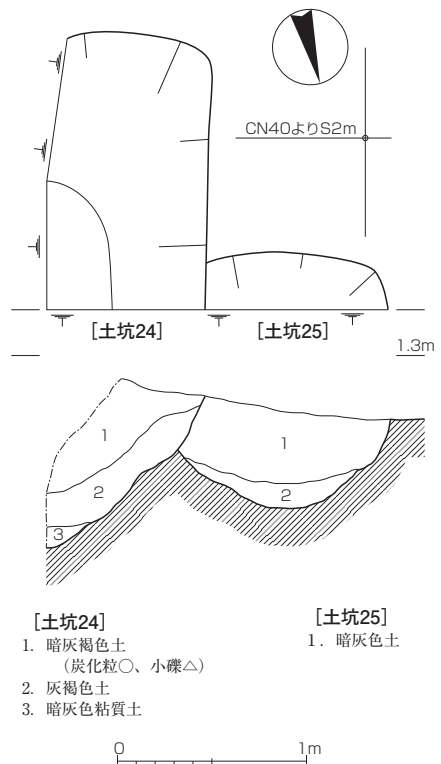


図110 土坑24・25（縮尺1/40）

面は遺存部が寡少で、平面形を推定できない。規模は上面で長さ0.86m以上、幅0.38m以上である。断面形については、東側の法面はオーバーハングしている一方、西側は底面まで緩い傾斜の法面となっており、不整形なものとなっている。

埋土は2層に分層される。いずれも灰褐色系の色調を呈するが、2層は炭化粒を含み、粘性を帯びる。遺物は出土していない。

本土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

#### 土坑27・28 (図103・112、図版29・31)

B地点西半、CN40区に位置する。土坑28が土坑27を切っている。西側に側溝が通っているため、土坑27の西端、土坑28の西辺2／3は失われている。また、土坑28北辺および土坑27の上部は、東西方向にのびる溝状の攪乱によって削平されている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は、土坑27が1.13m、土坑28が1.27mである。底面高は、土坑27が0.43m、土坑28が0.38mで、深さは土坑27が0.7m、土坑28が0.89mである。

平面形は、土坑27では上面、底面ともに楕円形、土坑28では上面、底面

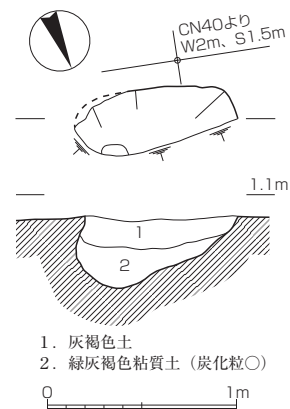
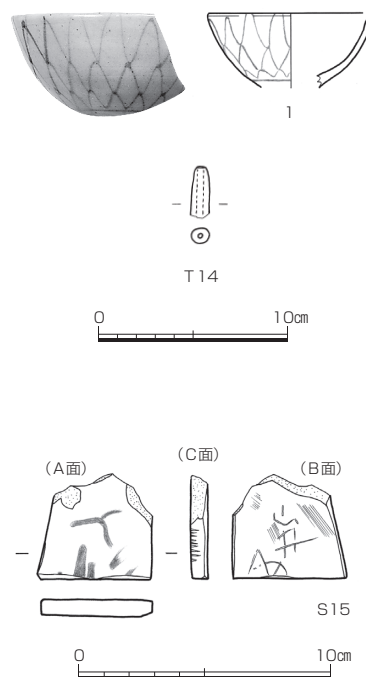
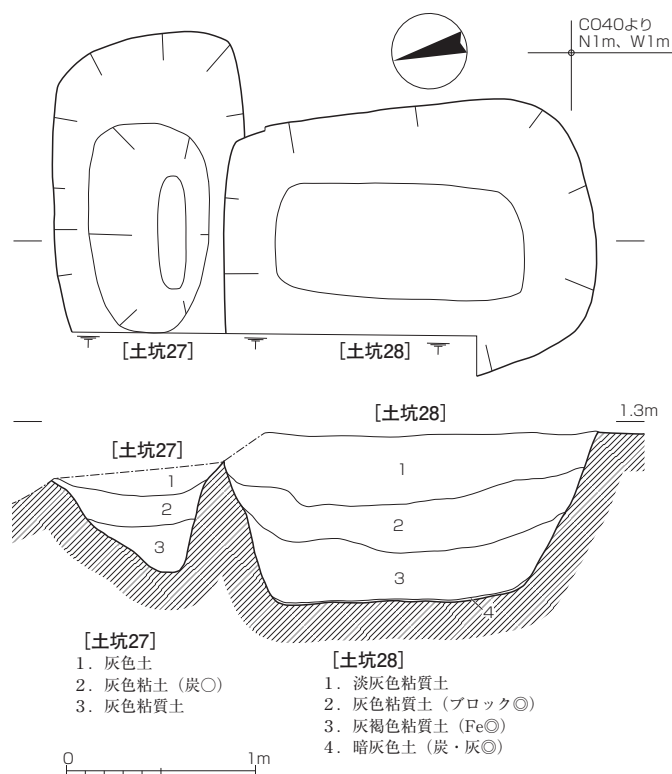


図111 土坑26 (縮尺1/40)



| 遺物<br>番号 | 器 種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |    |    |        | 特 徴        | 胎 土 | 色 調：内/外 |
|----------|-------|---------------------|----|----|--------|------------|-----|---------|
|          |       | 口径                  | 底径 | 器高 | 計測部残存度 |            |     |         |
| 1        | 陶磁器 碗 | 8.8                 | －  | －  | 1/3    | 施釉、染付、肥前系？ | 精緻  | 灰白(釉)透明 |

| 遺物番号 | 器種 | (残存)長：cm | (残存)幅：cm | (残存)厚：cm | 重量：g | 残存状況 | 特 徴           | 胎土 | 色 調 |
|------|----|----------|----------|----------|------|------|---------------|----|-----|
| T14  | 土鍾 | (2.7)    | 1        | 0.8      | 2.3  | 一部   | 直径0.3cmの穿孔、磨減 | 微砂 | 明橙  |

| 遺物番号 | 器種  | (残存)長：cm | (残存)最大幅：cm | (残存)最大厚：cm | 重量：g | 残存状況 | 石 材 | 特 徴                                   |
|------|-----|----------|------------|------------|------|------|-----|---------------------------------------|
| S15  | 砥石？ | (4)      | 4.5        | 0.7        | 19.6 | 一部   | 流紋岩 | A面：凹面・すり面？・墨痕、B面：凸面・線刻(山・井？他)、C面：擦切り痕 |

図112 土坑27・28・出土遺物 (縮尺1/3・1/4・1/40)

ともに隅丸方形を呈する。規模は、土坑27では上面が長軸長1.59m以上、短軸長0.9m以上、底面が長軸長0.59m、短軸長0.15mをはかる。土坑28では上面が長さ1.97m以上、幅1.45m、底面が長さ1.32m、幅0.61mをはかる。断面形は土坑27がすり鉢状、土坑28が逆台形を呈する。

埋土について、土坑27は3層、土坑28は4層に分層される。土坑27では、埋土の色調はいずれも灰色を呈するが、粘性と包含物を指標に細分した。土坑28は、最下層に炭・灰層で形成される4層が薄く堆積し、上位を1～3層が充填する。1～3層の土質は粘質土、色調は灰～灰褐色が基調となっており、濃淡が認められる。遺物は土坑27から中世土器細片、土錘が、土坑28から中世土器細片、土錘、近世陶磁器片、瓦片が出土している。検出層は近世に属するものであるため、土坑27から出土した遺物は混入したものと判断される。

土坑27・28の時期は、検出層および土坑28出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑29 (図103・113、図版29・32)

B地点西半南側、CN・CO40区に位置する。土坑の中央部に東西に通る南側溝のため、この部分は約40cmの幅で失われている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.32m、底面高は0.68mで、深さ0.64mである。

平面形は、上面、底面ともに隅丸方形を呈する。規模は上面で長さ1.5m、幅0.86m、底面で長さ1.25m、幅0.55mをはかる。断面形は箱形を呈する。埋土は4層に分層した。1・2層は灰褐色土で、2層にはマンガンの凝集がみられる。3層は灰色粘質土、4層は灰褐色土で、いずれも鉄分が沈着する。底面縁辺部において、斜辺が内湾する三角形断面の4層や、中央部が窪む断面形をなす1～3層は土坑周囲からの流入土の堆積と考えられる。遺物は4層で漆塗り櫛<sup>註)</sup>が出土したほか、近世陶磁器片、瓦片が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。

註) 漆塗り櫛については、既下記文献において報告し、あわせて自然科学的分析を要約しているが、その内容は本書第4章に掲載している分析報告に基づいている。

高田浩司2003「近世の櫛について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』, pp.13-15

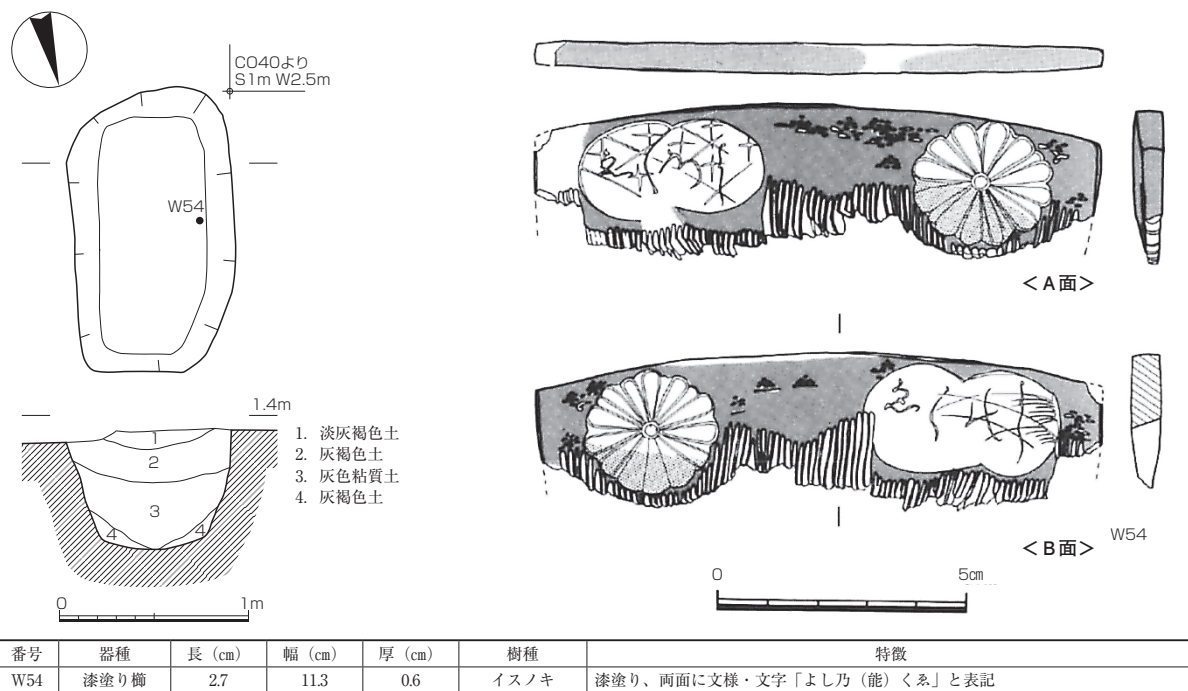


図113 土坑29・出土遺物 (縮尺1/4・1/40)

**土坑30** (図103・114、図版32)

A地点東辺北半、CR35区に位置する。土坑の中央部を南北に東側溝が通るため、幅約50～60cmが失われている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.19m、底面高は0.27mで、深さ0.92mである。

平面形は上面が楕円形、底面は楕円形を志向しているとみられるが、南～東にかけて歪みのある不整な形状となっている。規模は上面が長軸長1.62m、短軸長1.33m、底面が長軸長1.11m、短軸長0.83mをはかる。断面形については、攪乱により失われている北側法面ラインで小さな屈曲があり、対する南側法面にも段があるので、二段掘りと考えられる。

埋土は7層に分層される。埋土の色調、包含物等を指標に三群に大別する。一群は1・2層が該当する。灰色系の色調を呈する土で、ブロック・灰を包含する。二群は橙灰色系の色調を呈する埋土で、3～5層が該当する。灰色粘質土ブロックを包含する。三群は橙色砂質土で、6・7層が該当し、鉱物・包含物により細分される。6層は鉄分の沈着が顕著、7層は多量のブロックを包含する。遺物は図化には至らない近世陶磁器片が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。

**土坑31** (図103・115・116、図版32)

A地点北半中央、CO・CP38・39区に位置する。東辺北側は南北方向の側溝で失われている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は1.14m、底面高は-0.03mで、深さは1.17mである。

平面形は上面で楕円形、底面で隅丸方形を呈する。規模は上面で長軸長3.15m、短軸長2.13m以上、底面で長さ1.71m、幅1.43mをはかる。断面形は逆台形を呈する。

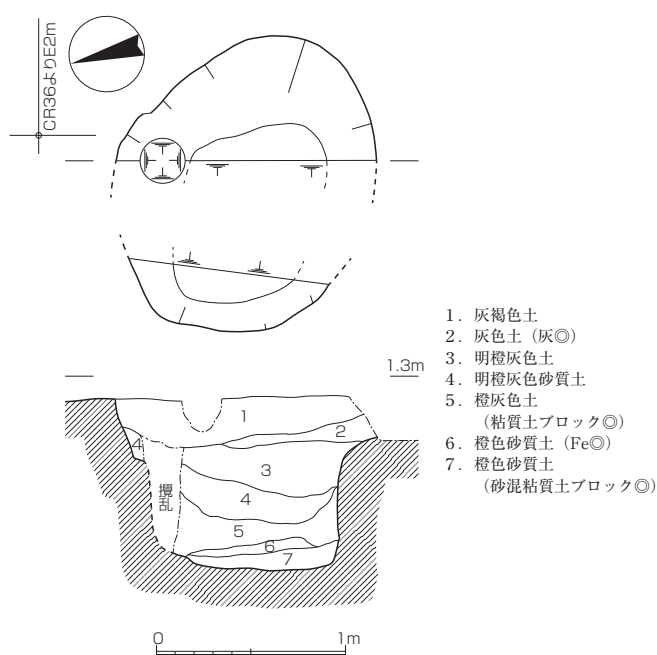


図114 土坑30 (縮尺1/40)

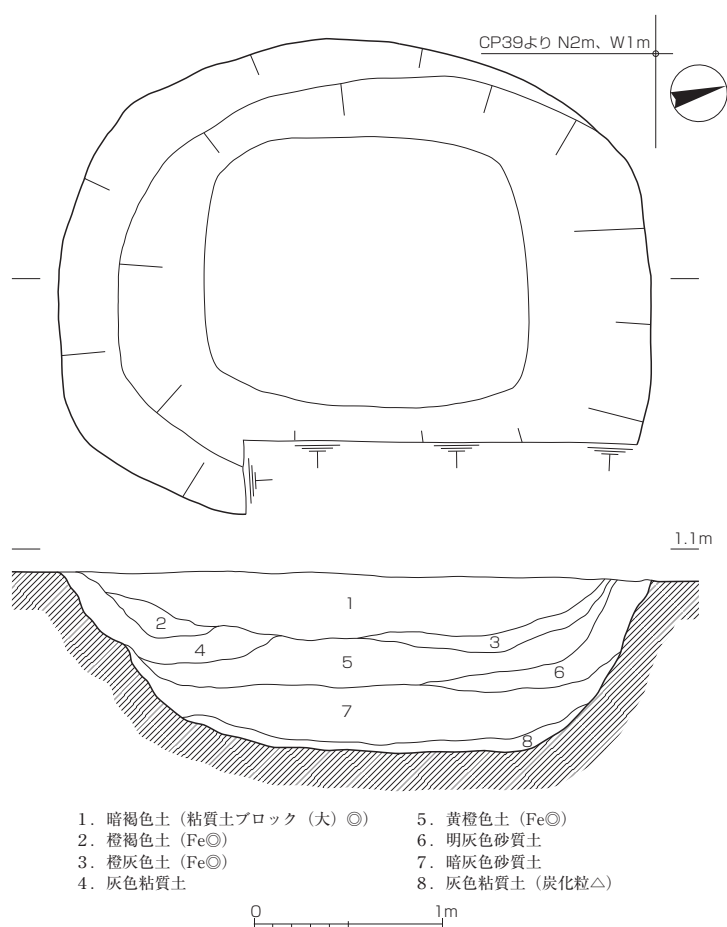
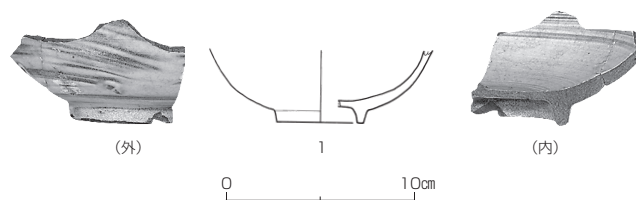


図115 土坑31 (縮尺1/40)

埋土は8層に分層される。土質、包含物を指標に四群に大別する。一群は1層が該当する。暗褐色土で、径10cm以上の灰色粘質土ブロックを多く包含する特徴を有する。層厚約0.35mと厚いこととあわせ、人為的な埋め戻し土であると考えられる。二群は2～5層が該当する。橙色を基調とする色調の埋土で、2・3・5層では鉄分の沈着が顕著、4・5層ではブロックの包含が認められる。二群底面の層理面は三群を掘りこむものであり、再掘削された段階の底面である。三群は6・7層が該当する。いずれも灰色砂質土で、色調の明暗と7層上面に鉄分の沈着が顕著なことで分離可能である。四群は底面に薄く堆積した灰色粘質土である8層が該当する。遺物は近世陶磁器が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。



| 遺物番号 | 器種   | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |     |    |        | 特 徴                      | 胎 土   | 色調：内/外      |
|------|------|---------------------|-----|----|--------|--------------------------|-------|-------------|
|      |      | 口径                  | 底径  | 器高 | 計測部残存度 |                          |       |             |
| 1    | 陶器 碗 | －                   | 4.6 | －  | 1/4    | 淡黄白色に薄ねず色の文様、畳付部のみ無釉、唐津？ | 微砂、均質 | 明褐(釉)淡黄白・薄灰 |

図116 土坑31出土遺物（縮尺1/4）

### 土坑32（図103・117、図版32）

A地点南半中央、CU38区に位置する。＜4層＞中で検出した。検出面の標高は0.89m、底面高は0.29mで、深さは0.6mである。

平面形は、上面では楕円形、底面では円形を呈する。規模は上面で長軸長0.83m、短軸長0.75m、底面で直径0.53mをはかる。断面形は、東側法面下半部が直立するものの、全体としては逆台形に含めておきたい。

埋土は4層に分層される。1層は白色土ブロックを包含する暗灰褐色土、2層は黄褐色細砂ブロックを包含する灰色砂質土である。土坑上半の埋土を構成する両層はブロックの包含という点が共通する。3層は灰褐色粘質土で、層中に砂が混在する。4層は灰色砂質土で、砂粒は粗い。1・2層はブロックを含み、層厚約0.2m前後の厚さを有しており、人為的な埋め戻し土と考えられる。遺物は中世土器小片が出土している。

本土坑の時期について、中世土器小片の出土から、中世に遡る可能性も考えられる。一方、38～40ライン間に南北に配置される近世土坑群の配置原理に合致しているとみれば近世にも位置づけ得る。また、中世に位置づけられる他の土坑が＜5層＞検出であるのに対し、本土坑は＜4層＞中での検出であり、層位的にはこれらよりも新しい遺構である。以上から、本報告では本土坑の時期を近世に属するものと推定しておきたい。

### 土坑33（図103・118、図版39）

A地点中央、CS39区に位置する。近・現代の造成土である＜1層＞直下で検出した。検出面の標高は1.19mで、＜3層＞～＜4層＞にあたる高さに至る攪乱等により上部を失っていると考えられる。底面高は0.55m、深さは0.64mである。

平面形は上面で隅丸方形、底面で方形を呈する。規模は上面で長さ1.39m、幅1.02m、底面で、長さ0.78m、幅0.74mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分層される。1層は灰褐色土で、鉄分の沈着と暗褐色土ブロック、炭化粒の包含が認められる。2層は灰色粘質土で、鉄分の沈着が認められる。下方には粗砂が筋状

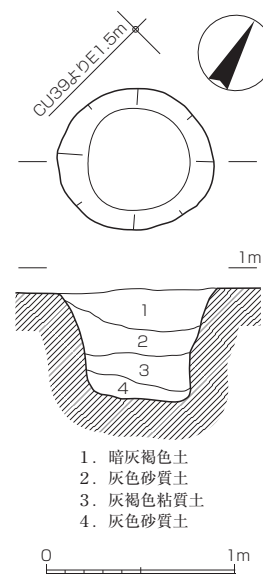


図117 土坑32  
（縮尺1/40）

に堆積する。

遺物は図化した銅器 1 点が出土している。椀状の形状、外面に刻まれた蓮や鳥の絵柄などから、仏具と考えられる。底部に内面から貫通させた穿孔がある。

本土坑は、近世土坑群との位置関係および検出標高から近世に属するものとする。

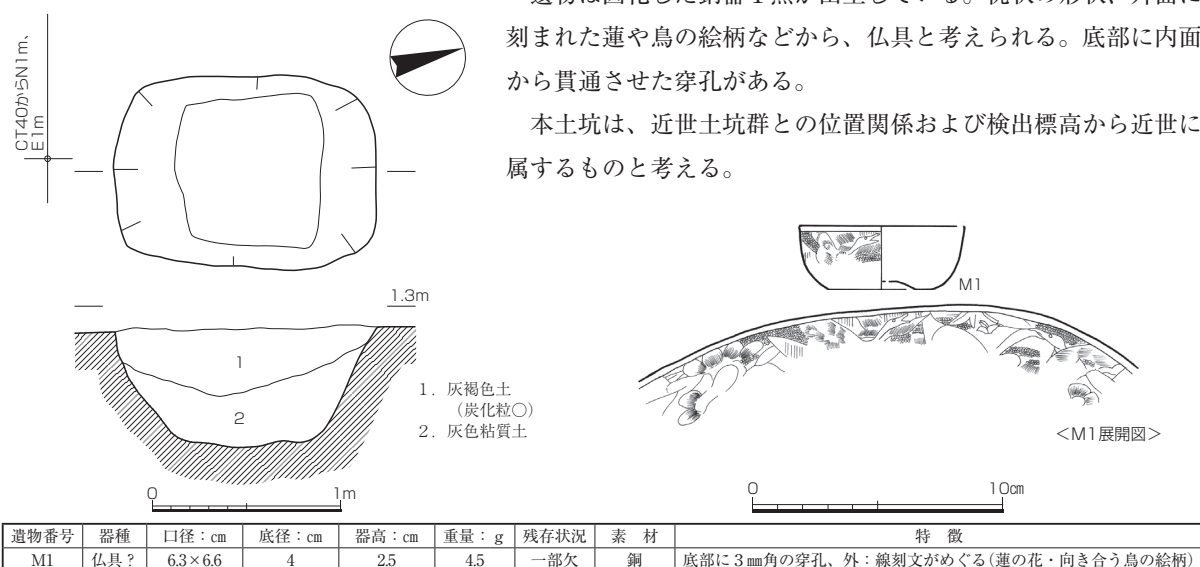


図118 土坑33・出土遺物 (縮尺1/4・1/40)

#### 土坑34 (図103・119、図版33)

A地点中央、CR・CS40区に位置する。建物基礎の攪乱や側溝等により南端、北辺東半、上部を失っている。造成土および攪乱土を除去した段階で検出した。検出面の標高は1.15mで、＜3層＞～＜4層＞にあたる高さである。底面高は0.8m、深さは0.35mである。

平面形は上面、底面ともに隅丸方形を呈する。規模は上面で長さ1.3m以上、幅0.97m、底面で長さ0.91m以上、幅0.65mをはかる。断面形は、底面に小さな凹凸がみられるものの、大局的には椀状～逆台形を呈するとみる。

埋土は4層に分層される。1～3層は灰色系の色調を基調とする土で、鉄分の沈着が顕著であり、褐色土ブロックが多く含まれる。4層は細～粗砂粒の混じる灰褐色砂質土の薄い堆積層である。1層はレンズ状に堆積している。2・3層はブロック状に入る堆積で、人為的な埋め戻し土と考えられる。4層は底面の小さな凹凸を埋めるように堆積した砂質土であり、初期の流入土と考えられる。

遺物は近世に属する灯明皿が出土した。本土坑は、近世土坑群との位置関係および出土遺物から近世に属するものとする。

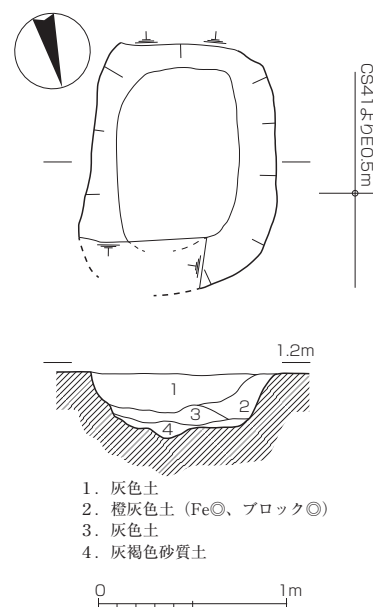


図119 土坑34 (縮尺1/40)

#### 土坑35 (図103・120、図版33)

A地点中央、CS40区に位置する。東端を建物基礎の攪乱によって破壊される。検出層は＜3層＞で、検出面の標高は1.3m、底面高は0.64mで、深さは0.66mである。

平面形は上面、下面ともに楕円形を呈する。規模は上面で長軸長1.41m以上、短軸長1.31m、下面で長軸長1.11m、短軸長0.77mをはかる。断面形は椀状を呈する。

埋土は5層に分層される。1～4層は灰～灰黄褐色の色調を基調とする土や粘質土であり、いずれも径5～10

cm程度のブロックを多く包含している。5層は暗黄褐色粘質土で、包含物は認められない。各層の堆積状況については、1～4層は中央部が丸く窪む断面形状をなすほぼ均等な厚さの層が連続的に、5層は底面南側直上に薄く堆積している。遺物は近世陶磁器片が出土している。

本土坑の時期は、出土遺物から近世に位置づけられる。

#### 土坑36（図103・121、図版33）

A地点西側南辺寄り、CV42区に位置する。南側は南側溝によって失われている。後世の攪乱によって<3層>までが失われており、造成土および攪乱土の下面に接していた<4層>で検出した。検出面の標高は1.23m、底面高は0.92mで、深さ0.31mである。

平面形は上面で楕円形、底面で円形を呈する。規模は、上面で長軸長0.88m、短軸長0.55m以上、底面で直径0.46mをはかる。断面形は碗状を呈する。

埋土は4層に分層される。堆積状況から、1層、2～4層の二群に大別する。1層は炭化粒、ブロックを含む暗褐色土で、層理面は2・3層を切っており、2層堆積後に再掘削された掘り方の埋土である。2～4層はほぼ均等な層厚の褐色土で、包含物や土質によって分層される。3・4層ではブロックの包含がみられる。遺物は中世土器小片が出土している。

本土坑の時期について、本土坑と重複する位置にあり、中世前半に位置づけられる溝37の検出標高が約1.0mであること、本土坑の検出面はそれよりも約0.2m高く、これは<4 a>層中のレベルに相当することから、攪乱で包含層が失われているなければ本来は<3層>に帰属する遺構と考え、近世に位置づける。

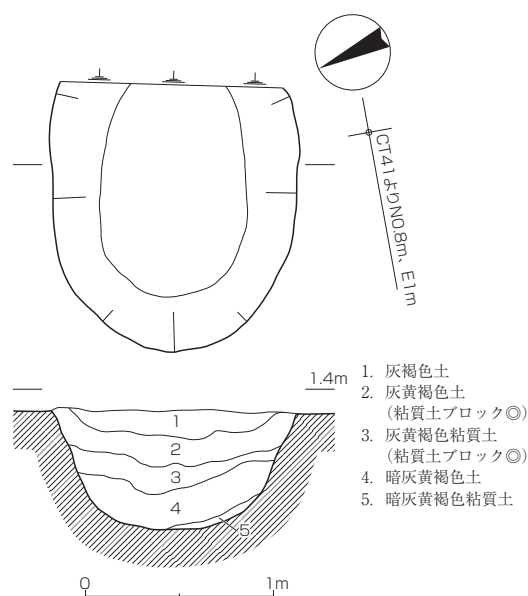


図120 土坑35（縮尺1/40）

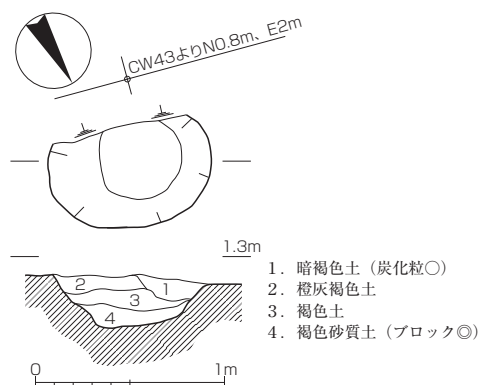


図121 土坑36（縮尺1/40）

### 3. 段・畦畔（図103・122、図版29）

A地点中央北側、CP・CQ39区で、南北方向の段を確認した。段の南は大きく攪乱されているため失われているが、現状で長さ約8mが残存している。<3層>を除去する過程で検出した。<4層>を削りだして成形した段である。

上面の標高はa-a'断面で1.2m、b-b'断面で1.21m、下端の標高はa-a'断面で1.04m、b-b'断面で0.98mである。段の高さはa-a'断面で0.17m、b-b'断面で0.15mをはかる。法面の幅は約0.3～0.5mである。下端から小区画の畦畔までの東側の空間は、約1.5～2mの幅をもつ緩やかな斜面となっている。

畦畔はA・C地点、CN～CV35～38区、CT38区で検出した。A地点では、調査区東辺に南北方向に高さ0.1m前後の高まりがあり、畦畔は先述の段と高まりに挟まれた範囲に作られている。C地点では35ライン以西に、東西方向で幅約1.0～1.2m、高さ約0.1mをはかる幅広の大畦畔が作られる。A地点東辺の高まりの延長線上に近接する位置にはC地点の大畦畔の東端があたっており、本地点における近世の耕作地は、北を大畦畔、西を段、東を高

まりで囲まれた南北40m以上、東西20m弱の空間に配されていることとなる。

この大区画を画す畦畔は、東西方向に直線的な畦を幅約1.2～2.1m、平均的には幅約1.8mの間隔で配しているとみられ、東西方向を長軸とする短冊状の区画を作っている。さらにその内部を南北方向に区画する畦は東西方向の畦を挟んでずれていたり、相対する畦が作られていないなど、東西方向の畦よりは規範が緩いようであり、小区画の形状、面積が不揃いな要因となっていると考える。小区画の畦畔は、c - c' - c''断面では上端標高1.02～1.07m、下端標高0.94～0.97m、幅は上端0.33m、下端0.59mで、断面形は台形である。

本地点では床土上面の傾斜は小さいので、小区画の畦畔を作る理由は配水以外に求められる。これらの畦畔が耕作土や床土を掘り起こし、表層と深層を反転させて積み上げた「天地返し」の土で構築されていたという調査時の所見があることを参考にすれば、苗代として一時的に耕土を盛って作られた畦畔が崩れずに埋没したのとも考えることも一案であろう。

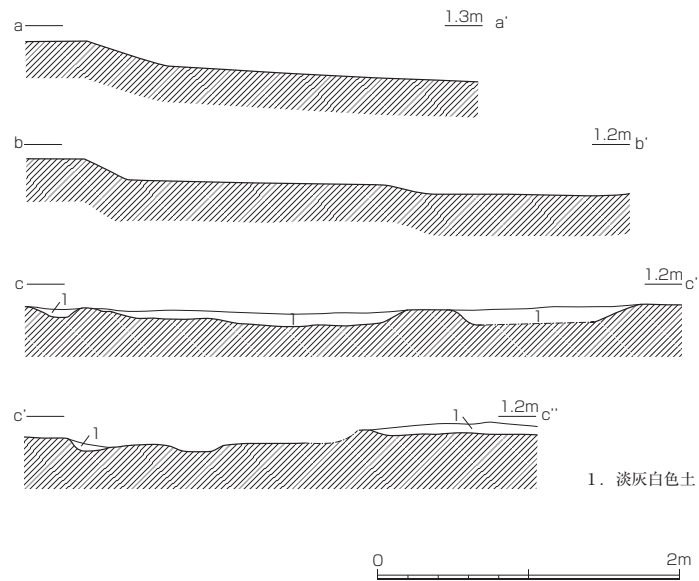


図122 畦畔・段断面（縮尺1/50）

## 第6節 包含層ほかの出土遺物

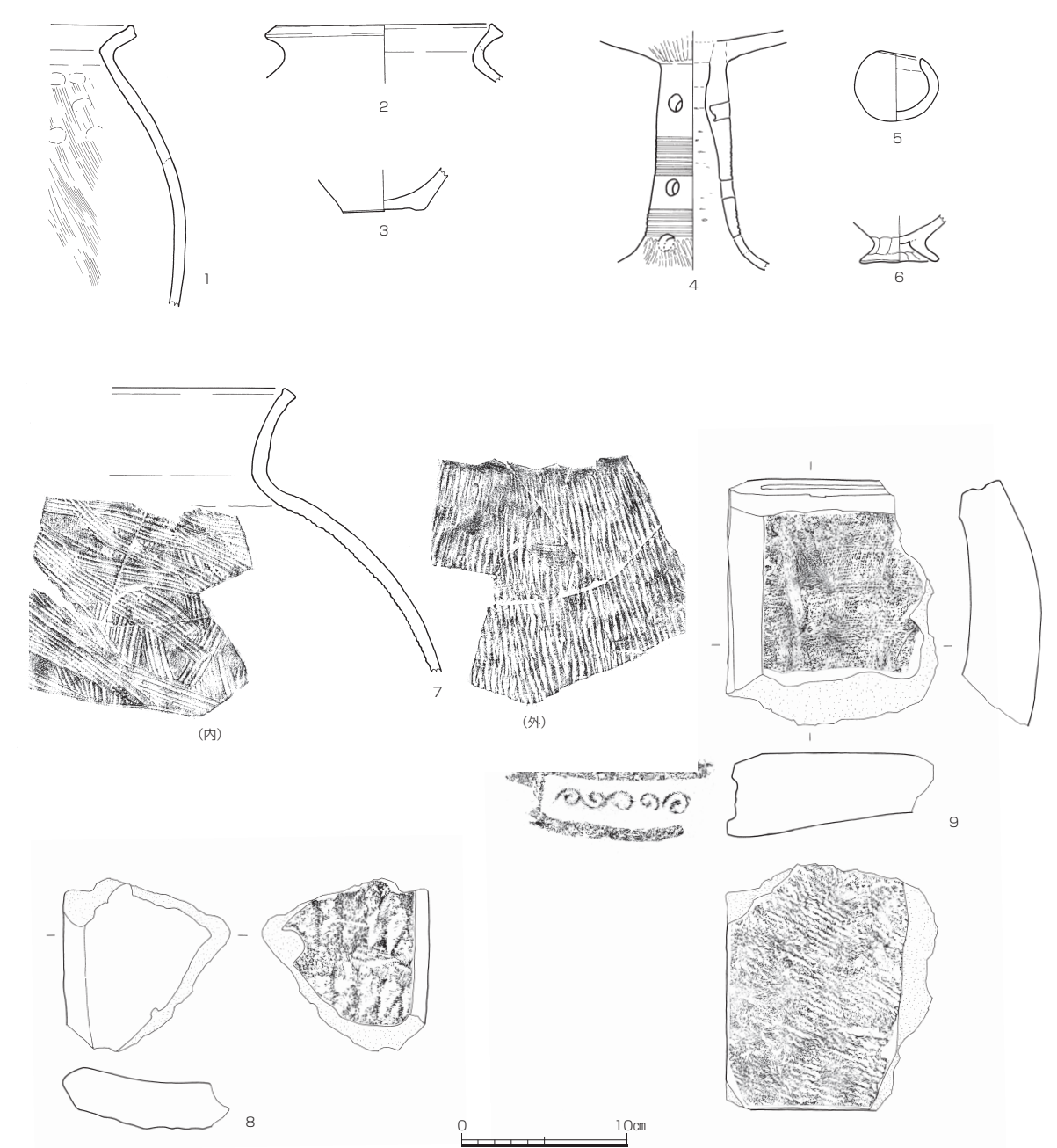
包含層や側溝、土手などからコンテナ22箱の遺物が出土している。そのうち、土層の時期を示すものや、注目される遺物、土製品・金属器を掲載する（図123・124、図版38・39）。

図123-1は弥生時代中期中頃の甕である。河道底面付近から出土した。2～4は河道上層から出土した弥生後期の土器である。河道の時期や埋没に要した期間を推測するうえで有用な資料である。また、4は後期を四分した鹿田遺跡の編年では鹿田・後・1期にあたる<sup>註)</sup>。鹿田遺跡ではこの時期の遺構は未確認で、居住の中断期にあっていると考えられているが、今後、この時期の遺構が周辺で確認される可能性をうかがわせるものでもある。5・6は<5層>から出土した手捏土器、製塩土器脚台部である。

7は<4層>から出土した須恵器甕である。軟質で、外面には縦位の粗い平行タタキ、内面には縦位・斜位のハケメを施す。8・9は古代の瓦である。8は<4 b層>から出土した平瓦で、凸面に縄目タタキをのこす。9はA地点西側溝から出土した軒平瓦で凸面に縄目、凹面に布目をのこす。瓦当には唐草文が配される。これらはいずれも被熱痕跡が認められ、特に9では破面に煤が付着しており、二次的に被熱していることが明瞭である。9は古代のうちでも平安時代に位置づけられる。本調査地点で検出したピットの一部に、この時期に遡る建物を構成する柱穴が含まれている可能性を示すものである。

図124には土製品・金属器をまとめた。T15～21は土錘である。T15は管状土錘で、重量が117gの大型品である。T16～18は端部が狭く、中央部が最大径となる紡錘状の形態である。T19・20は細い管状土錘である。T21は

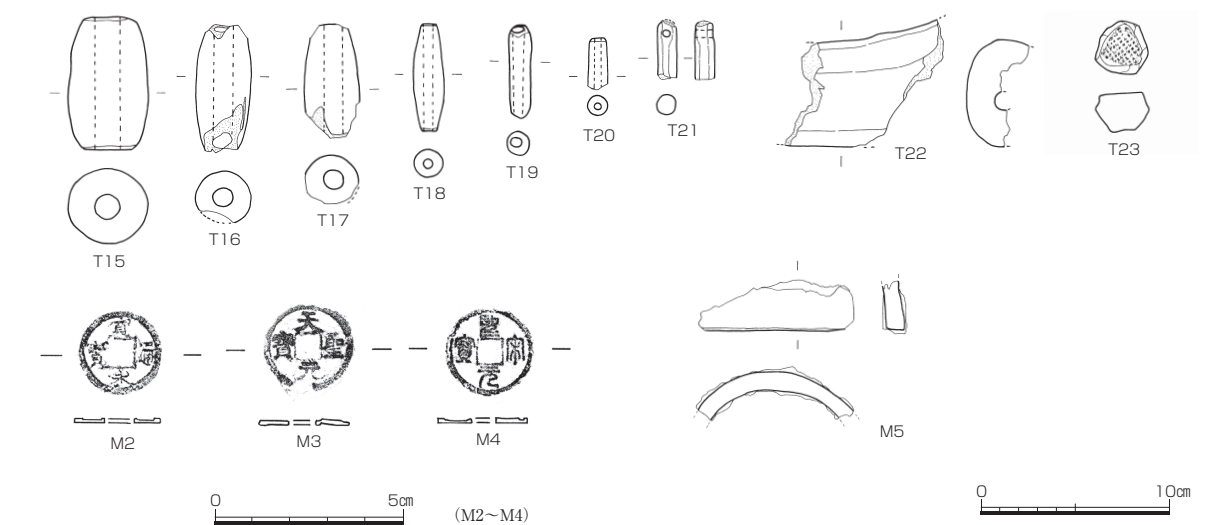
調査の記録



| 遺物番号 | 出土位置 | 器 種      | 法量：cm・＜平均値＞・－は1/6以下 |        |         |        | 特 徴                                       | 胎 土     | 色 調：内/外  |
|------|------|----------|---------------------|--------|---------|--------|-------------------------------------------|---------|----------|
|      |      |          | 口径                  | 底径     | 器高      | 計測部残存度 |                                           |         |          |
| 1    | 河道   | 弥生土器 甕   | －                   | －      | －       | －      | 内：ハケメ・押圧、外：ハケメ・煤、口：横ナデ                    | 微砂、均質   | 灰褐～黒褐    |
| 2    | 河道   | 弥生土器 甕   | 13                  | －      | －       | 1/5    | 磨滅・剥落顕著、外：煤、1と同一個体か                       | 微～細砂/礫多 | 橙褐       |
| 3    | 河道   | 弥生土器 甕   | －                   | ＜4.95＞ | －       | 底1/1   | 磨滅、内：筥ケズリ痕、外：被熱・劣化、2と同一個体か                | 微砂/礫多   | 淡橙/明～暗橙  |
| 4    | 河道   | 弥生土器 高杯  | －                   | －      | －       | －      | 脚柱：径約1cmの円孔3対3段・2段の沈線帯(11条と7条)、最上段の円孔は未穿孔 | 微砂/粗砂～礫 | 淡黄橙～黄橙/橙 |
| 5    | ＜5層＞ | 土師器 手捏土器 | 2.5                 | 2.5    | 3.7～4.2 | 1/1    | ナデ、磨滅、底部は丸み強い                             | 微砂多     | 淡橙～淡橙白   |
| 6    | ＜5層＞ | 土師器 製塩土器 | －                   | 4.7    | －       | 底1/2   | 磨滅、脚部：押圧、全体に被熱で変色                         | 細砂/礫多   | 淡橙灰～橙    |
| 7    | ＜4層＞ | 須恵器 甕    | －                   | －      | －       | －      | 口：ナデ、内：ハケメ、外：縦位の平行タタキ                     | 微砂      | 灰褐～黒褐    |

| 遺物番号 | 出土位置 | 器 種   | (残存)長：cm | (残存)幅：cm | (残存)厚：cm | 重量：g | 残存状況 | 特 徴                          | 胎土/混入物 | 色 調        |
|------|------|-------|----------|----------|----------|------|------|------------------------------|--------|------------|
| 8    | ＜4層＞ | 須恵質 瓦 | (10.5)   | (10)     | 3        | －    | 一部   | 凹面：ナデ、凸面：格子目タタキ(縄?)、二次的被熱痕   | 微砂     | 凹面：淡橙、凸面：灰 |
| 9    | 側溝   | 須恵質 瓦 | (12.7)   | (14.8)   | 4.9      | －    | 一部   | 凹面：布目痕、凸面：縄目、瓦当：唐草紋、二次的被熱(煤) | 微砂     | 灰白、煤で黒色化   |

図123 包含層出土遺物(1)



| 遺物番号 | 出土位置 | 器 種   | (残存)長：cm | (残存)幅：cm | (残存)厚：cm | 重量：g  | 残存状況 | 特 徴                      | 胎土/混入物    | 色 調     |
|------|------|-------|----------|----------|----------|-------|------|--------------------------|-----------|---------|
| T15  | <3層> | 土鍾    | 7        | 4.2      | 4        | 117.4 | 1/1  | ナデ、直径1.3cmに穿孔、黒斑         | 微～粗砂      | 淡茶白～淡灰白 |
| T16  | <4層> | 土鍾    | 6.8      | 2.9      | 3        | 48.2  | 一部欠  | 直径1cmの穿孔、ナデ、黒斑           | 微砂        | 暗褐      |
| T17  | <3層> | 土鍾    | 6.1      | 3.9      | 2.6      | 36.5  | 一部   | 直径1cmの穿孔、ナデ              | 微砂/礫・赤色粒  | 淡黄橙     |
| T18  | <5層> | 土鍾    | 5.7      | 1.5      | 1.6      | 12.9  | 一部欠  | 直径0.5cmの穿孔、ナデ            | 微砂        | 赤橙～暗橙   |
| T19  | <3層> | 土鍾    | 4.9      | 1.2      | 1.1      | 6.5   | 1/1  | 直径0.5～0.6cmの穿孔(先細り)、ナデ   | 微砂        | 淡黄白     |
| T20  | <5層> | 土鍾    | (2.7)    | 1        | 1        | 2.8   | 一部   | 直径0.4cmの穿孔、ナデ            | 微砂        | 淡黄橙     |
| T21  | <4層> | 土鍾    | (3.1)    | 1        | 1.1      | 4.1   | 一部   | 直径0.4cmの穿孔、ナデ            | 微砂        | 暗褐      |
| T22  | 側溝   | 轆？    | (8.4)    | 5.6      | (3.3)    | —     | 一部   | 直径約1cmの穿孔、押圧とナデ、図右側は灰色化  | 微砂/苧多・赤色粒 | 橙       |
| T23  | <4層> | 須恵質 玉 | 2.8      | 2.8      | 2.1      | 10.2  | 1/1  | 一面に布目残存、周囲打ち欠き後表面調整、瓦の転用 | 微砂        | 灰       |

| 遺物番号 | 出土層位 | 器 種   | (残存)長：cm | (残存)最大幅：cm | (残存)最大厚：cm | 重量：g | 残存状況 | 素 材 | 特 徴        |
|------|------|-------|----------|------------|------------|------|------|-----|------------|
| M 2  | <3層> | 銅銭    | 2.2      | 2.3        | 0.1        | 1.3  | 1/1  | 銅   | 寛永通寶       |
| M 3  | <3層> | 銅銭    | 2.4      | 2.5        | 0.1        | 1.9  | 一部欠  | 銅   | 天元聖寶       |
| M 4  | <4層> | 銅銭    | 2.4      | 2.4        | 0.2        | 1.7  | 1/1  | 銅   | 聖宋元寶       |
| M 5  | <4層> | 不明鉄製品 | (8.2)    | (2.8)      | 1          | 28.4 | 一部   | 鉄   | 円筒状、錆付着が顕著 |

図124 包含層出土遺物(2)

端部に穿孔した土鍾である。T22は押圧とナデによって整形、芯に直径約1cmの穿孔がある遺物で、轆の可能性  
がある。T23は一面に布目痕をのこし、周囲を打ち欠いて成形したもので、瓦が転用されている。M2～4は銅  
銭である。寛永通寶1枚のほか、宋銭では、M3が天聖元寶（北宋；1023年）、M4が聖宋元寶（北宋；1101年）  
で各1枚が出土した。M5は円筒状に復元される用途不明の鉄製品である。（野崎）

註 山本悦世1988「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の土器」『鹿田遺跡Ⅰ』、pp.385-395